



kokoima アーカイブ

2017.8.2-2021.4.1

- アトリエ&ギャラリー ふくもち開設(まち場は4面に)
- まちの協働活動、浅香山GENKIプロジェクト始動!
- コロナ禍でもめげずに、外へ外へと、活動を広げる。

堺区香ヶ丘町のまち場を4面とする。

kokoimaとは

NPO法人kokoima(ここいま)のミッション

堺市堺区香ヶ丘町で主に日常生活に手助けを必要とする精神障がい者に対して、地域のなかに居場所を提供し、同時に地域社会を精神障がい者にとってより住みやすい場所にしていくための事業を行い、社会的弱者である高齢者、子ども、障がい者などすべての人々が健やかに暮らせる地域社会づくりと福祉の増進に寄与すること

[Caféここいま]

2015年12月23日オープン。受け入れられ、支えられ、少しはまちの居場所になってきたようです。ボーダレスに「居合わせることができる」場として、より工夫を重ねていきたい場です。作品展示もしております。作家さんたちにご利用いただいています。癖のないマイルドなコーヒーと、日替わり定食をお楽しみください。

[リユースショップぜろ]

2017年5月オープン。まちの皆さんからいただいたリユースできる品物を、まちで販売するお店です。ありがたいことに、次々と品物が運ばれてきます。「いただく」「必要な人に販売する」それは、人と人をつなぐ行為だと感じます。同時にまちの賑わいもうみだす行為だと感じます。日用品、衣類、食器、生活雑貨などを取り扱います。

[おめでたい作業所]

2017年8月開設。メンバー(利用者)さんと一緒に作っていく場、生きることを支えあう場、そうありたいと願っている作業所です。Café店員、ショップ販売、手仕事(織り、猫つぐら、編み物)などに自由に取り組んでいただけます。請負仕事(内職)はありません。「しんどい」を発信することが、大事なルールになっています。



[アトリエ&ギャラリーふくもち]

2021年4月オープン。美しいもの、可愛いもの、素敵な作品と人、素敵な活動と人をこのまちに呼び込みたいと、開設しました。まちの保護猫ふくまるの「ふく」と幸せの「福」古来より日本ではおめでたい日に餅を配るという風習にちなんで、「福」をお餅のように分かち合えればという願いを込めています。

●1階 まちの小さなギャラリー

おめでたい作業所の作品(雑貨、織物、猫つぐらなど)を展示・販売しています。ふく織り職人が実際に織っている姿も、見ていただけます。

●2階 作品を生み出すアトリエ

おめでたい作業所に通うメンバーさんが編み物をしたり、刺し子をしたり、着物のリメイクなどに取り組んでいます。

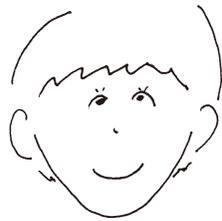


NPO法人
kokoima





かわしまさん



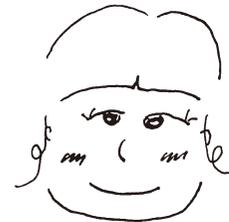
ながえさん



ふくいさん



ちよこさん



かなざわさん



なめださん



たはらさん



まつもとさん



おざきさん



おがわさん



こたにさん



ふくちさん



よっちゃん



むらかみさん



きしさん



ひろたさん



とうまさん



さはらさん



みたにさん



わかさま



メグミお母さん



りえさん



みずまきさん



はらださん



たにぐちさん

作画:福井智子さん

kokoima2017年8月1日-2021年4月1日までのあゆみ

日時	カテゴリ	出来事
2017/8/1	おめでとう	就労継続支援B型・生活介護 おめでとう作業所オープン 初めての利用は田原さん
2017/8/2	GENKI	浅香山GENKIプロジェクト発足! [夏だ!夜店だ!パルファンストリート] 第1回開催
2017/8/17	まち・法人	オープン理事会
2017/9/20	まち・法人	アサダワタル氏による「音楽ラジオワークショップ」/オープン理事会
2017/10/19	イベント・法人 ボーダレス	「福祉事業所を開くと起きる素敵なこと」 ゲスト講師 増田靖さん(社会福祉法人コスモス 森のキッチン店長)/オープン理事会
2017/11/24	イベント・法人・ボーダレス	NPO法人kokoima実践報告 kokoima討論会/オープン理事会
2017/12/16	イベント・法人 ボーダレス	「ザッゼンにいきる工夫について」 ゲスト講師 鈴木励滋さん(横浜市 ひかりが丘団地 カブカブ所長) ファシリテーター アサダワタル氏(文化活動家) 会場:関西大学 SA402教室/オープン理事会
2018/1/1	まち	お正月 おめでとうメンバーさんとまちの人とおせち料理食べました。
2018/1/4	イベント・ボーダレス	書き初め!まちの人も、おめでとう作業所のメンバーさんも筆をとって真剣勝負。
2018/1/24	イベント	ワークショップ資料整理(記録・写真など) kokoima「おめでとう」活動報告
2018/1/31	まち	世田谷区ハーモニー新澤克憲さんがkokoimaを訪問。
2018/2/9	外部イベント	アメニティフォーラム23「アサダワタル超支援?!セッション」 テーマ:「精神障害」はコミュニケーションの資源となるか ～支援としての「Caféこいま」や「幻聴妄想かるた」から見えること～ 出演:新澤克憲(NPO法人やっこ ハーモニー)、 小川貞子(NPO法人kokoima)、若上洋一(一般社団 法人テイクラネット)、 アサダワタル(文化活動家/大阪市立大学)
2018/2/13	外部イベント	第4回身の医療研究会「身を生きたる臨床とは」 (関西大学梅田キャンパス/シンポジストとして小川が参加)
2018/2/15	イベント ボーダレス	教育における 青年期の体験学習:「学生がまちで学ぶ意味」 ゲスト講師:関西大学 村川治彦教授・安田忠典教授
2018/2/15	法人	NPO法人kokoima 第2回通常総会@おめでとう
2018/3/14	イベント・ボーダレス	ワークショップ資料整理(記録・写真など) kokoima「おめでとう」活動報告
2018/3/18	外部イベント	ガシ横フリーマーケット(堺東大小路/リュースショップゼロ 初出店)
2018/3/24	外部イベント	第9回 手をつなごう、浅香山フェスティバルに参加。 (浅香山小学校体育館/バザー担当) 浅香山校区にある障害福祉施設、 子育てサロンなどの共催。
2018/4/1	おめでとう	4月金澤さん 採用
2018/4/19	まち	此花区から阪憲明さんkokoima訪問 よしかねさんの「うつわ」ご購入。
2018/4/20	イベント・ボーダレス	kokoimaラジオ ゲスト講師:文化活動家 アサダワタルさん
2018/4/22	おめでとう	尚人さんの誕生日会 みんなで深川のケーキを食べる。 矢田さんの織りが完成! 今も大事に取ってます。

日時	カテゴリ	出来事
2018/4/28	外部イベント	堺市主催:大和川クリーングリーン活動(大和川河川敷に清掃)に おめでとうとして参加。
2018/5/5	GENKI ボーダレス	パルファンストリートフリーマーケット @香ヶ丘商店街 「地域の不用品で 地域の楽しいをつくる 循環型フリマ」 おめでとうでは夢つぐらやふく織りを展示販売
2018/5/16	おめでとう	三谷さんお誕生日会 紫のバッグをプレゼント
2018/5/17	イベント ボーダレス	kokoimaラジオ2 ゲスト講師:文化活動家 アサダワタルさん ゲスト 梅山晃佑さん
2018/5/20	まち	Pilot Light Coffee (森本康平氏と笹田峻彰氏による) cafeこいまにてスペシャルティコーヒーの出張販売。
2018/5/25	おめでとう	おめでとう前で、なす・きゅうり・トマト・ゴーヤの栽培を始める。
2018/5/26	おめでとう	cafe店長 廣田さんの誕生日会 みんなでスイカを食べる。
2018/6/1	まち	cafeこいまでよしかねさんの陶芸作品「うつわ」を販売し始める。
2018/6/3	まち	リュースショップゼロの看板が完成!(アズモクラフさん)
2018/6/8	おめでとう	尚人さんが夢つぐらを作り始める。メンバーであるつぐらの師匠に師事する。
2018/6/10	映画 ボーダレス	13:00～「オキナワへいこう」上映会@関西大学堺キャンパス ゲスト講師:写真家 大西暢夫さん Pilot Light Coffee 出店 おめでとう物販初出店! (ハレハレハンガーや千代子マグネットを販売) 会場:関西大学 SA402教室
2018/6/10	法人	16:00～ NPO法人kokoima 2018(平成30)年度臨時総会 @関西大学堺キャンパスSA402教室
2018/6/11	まち	近所の方に教わり、梅酒・梅シロップ・梅干しを漬ける。
2018/7/1	映画	おめでとう作業所が「オキナワへいこう」の配給元になる。
2018/7/11	まち	漫画家 水谷緑さんの取材をうける。
2018/7/12	おめでとう	尚人さんの夢つぐら初めて完成! 千代子さん製作モチーフ編みが完成!
2018/7/19	イベント・法人	振り返り「オキナワへいこう」自主上映活動について/セミオープン理事会
2018/7/20	おめでとう	土用の丑の日 みんなで鰻丼を食べる。
2018/8/1	おめでとう	おめでとう1周年記念日
2018/8/2	GENKI ボーダレス	第2回夏祭り「夏だ!夜店だ!パルファンストリート!」 ステージ企画:kokoimaラジオ3 おめでとう:「くろみボタン・ワークショップ」 Caféこいま:味噌カレーライス、キュウリの一本漬け
2018/8/4	外部イベント	臨床実践の現象学会「私たちの実践って何だろう」 (大阪医科大学看護学部講堂 ラウンドテーブルディスカッションに参加) テーマ:人とかわかり、意味が生まれる 出演:吉川雄一郎(大阪大学)、 小川貞子(NPO法人kokoima)、村上靖彦(大阪大学)

ボーダレス=ボーダレスタウン・プロジェクト

※ボーダレス・タウン・プロジェクトは街づくり夢基金第15回助成事業によって
企画・実施した地域プログラムです。

日時	カテゴリー	出来事
2018/8/26	外部イベント	帝塚山芋忠 チャリティーイベント出店 おめでたい物販・くろみボタンワークショップを開催
2018/9/1	GENKI	第2回夏祭り「夏だ!夜店だ!パルファンストリート!おつかれさま会 @関西大学の食堂 GENKIプロジェクトのメンバーや、 まちの人、堺市の職員も参加し、写真を見ながらふりかえる。
2018/9/4	災害	台風21号に見舞われる、停電が3日続く。近所の人もおめでたいで過ごす。 関大堺キャンパスは、まちの人にシャワーブースを開放した。
2018/9/7	おめでたい	電気が復旧し、久しぶりの通常通りのおめでたい開所。 夢つぐら・千代子マグネット・ふく織りなど続々と作品が完成する。
2018/9/20	まち	香ヶ丘商店街のお好み焼き屋さんに子猫がやってきた。 三谷さんが子猫「アイちゃん」に夢つぐらをプレゼント。
2018/9/21	まち	台風21号で被害に遭われた近所の散髪屋さんの奥様から、 店を畳むので不要なものを引き取りに来て欲しいと依頼がある。 おしゃれでモダンな着物や旦那さん手作りの道具入れをいただく。
2018/9/27	まち・法人	セミオープン理事会
2018/10/14	おめでたい	よしかねさんのお誕生日会 阪神タイガースの帽子をプレゼント。
2018/10/28	まち	秋のkokoimaバーゲン開催! 10時開店前からお客さんが並ぶ!
2018/11/10	まち	犬用に屋根のない夢つぐらが売れる 師匠(メンバーさん)も喜ばれる。
2018/11/18	まち	子どもたちに向けて駄菓子を販売し始める。 ゼロの店長田原さんが駄菓子売りとして頑張られる。
2018/11/22	まち	田原さんの退院祝い「551の豚まんが食べたい」とみんなで食べる。
2018/11/23	外部イベント	第9回東北⇄関西⇄九州 ポジティブ文化交流祭@長居公園 くろみボタンワークショップ・おめでたい製品とまちの人からいただいた 手作りセーターを販売。
2018/11/24	まち	おめでたいガチャガチャを設置。ゼロの小物やゼロ金券をカプセルに詰める。
2018/12/8	おめでたい	よしかねさんの裂き織りが完成!
2018/12/12	おめでたい	滑田さんと金澤さんの合同誕生日会 二人お揃いのセーターをプレゼント
2018/12/19	まち	関西大学 安田ゼミの学生さんがリユースショップゼロのシャッターに 絵を描いてくれる。
2018/12/21	GENKI	合同クリスマス会を開催。関西大学食堂にて(おめでたい×関西大学×GENKI) よしかねさんがビンゴ大会で鮫芳さんのカニを当てる! お正月にみんなでいただきました
2018/12/27	GENKI	GENKI 第2回さかいNPO協働大賞 浅香山GENKIプロジェクト受賞
2018/12/28	イベント	大掃除の後はおめでたい初!忘年会@パスキアにて お世話になった人にも来ていただき、たくさん飲んでたくさん食べました。 名物はロブスター。小川理事長にプレゼントのサプライズもしました。
2019/1/1	おめでたい・まち	お正月 みんなでおせちを食べて矢田さんのお誕生日会「今が一番幸せです」
2019/1/2	おめでたい・まち	お正月 caféここいまではおせちバイキング。 まちの人も一緒に福笑いやビンゴゲーム。

日時	カテゴリー	出来事
2019/1/23	まち	関西大学 安田ゼミの皆さんによる 餅つき大会@おめでたい前
2019/1/23	おめでたい	岸さんのお誕生日会「欲しい服あるねん」と前からお望みのジャケットをプレゼント。
2019/1/26	映画	生野区リゲッタホール「オキナワへいこう」上映会に招待される。 大西監督・小川理事長トークとおめでたい作業所物販
2019/1/27	外部イベント	堺市 お料理教室に福井さんが参加。和菓子作りを体験。
2019/1/31	まち	パルファンコリーヌ 閉店。
2019/1/28	GENKI	「浅香山GENKIプロジェクト」が堺市のNPO協働大賞受賞 表彰式に参加
2019/2/19	法人	NPO法人kokoima 第3回通常総会@おめでたい
2019/2/25	おめでたい	小川理事長のお誕生日会 メンバーさんから「100歳まで生きてね!」
2019/3/9	映画	みくも地域人権センター(滋賀)「オキナワへいこう」上映会 廣田さん講演・おめでたい作品物販
2019/3/23	外部イベント	第10回 手をつなごう、浅香山フェスティバル(浅香山小学校体育館) おめでたいから物販で参加。
2019/3/31	おめでたい	ボランティア永江さんの退職祝い ゼロから金(本物)のネックレスと おめでたいからkokoima永久職員認定の感謝状を贈る。
2019/4/4	おめでたい	受注販売の7.2mの裂き織りが売れた! 築80年の岸和田古民家の廊下で使用するからと 色の魔術師よしかねさんが半年かけて織り上げました。
2019/4/7	おめでたい	ふくまる3歳お誕生日会
2019/4/29	GENKI	パルファンストリートフリーマーケット第2回 @香ヶ丘商店街「地域の不用品で 地域の楽しいをつくる 循環型フリマ」
2019/5/1	おめでたい	京都造形大のアルバイト生 尾上(オガミ)くんを雇用
2019/5/13	まち	ベトナム青年トゥンくんが腕をふるう「フォー」の販売@caféここいま
2019/5/14	まち	ハレハレハンガー大量注文! 退職のお祝いに50本売れました。
2019/6/2	映画	関西大学堺キャンパス「オキナワへいこう」上映会 小川所長・大西監督トーク
2019/6/10・11	イベント	おめでたい天橋立研修旅行(超ゴーカでした!)
2019/6/21	外部イベント	堺市地下食堂「森のキッチン」にておめでたいの作品を展示(6/11から) 福井さんのお誕生日会
2019/6/27	外部イベント	このはな福祉ラウンドテーブルに廣田さんが講師として招待される
2019/7/7	おめでたい	七夕 おめでたいメンバーさんやまちの人と短冊に願い事を書く。 「香ヶ丘にすてきな家が欲しいなあ ふくまるお願い」
2019/7/8	映画	此花区社会福祉協議会による「オキナワへいこう」上映会 大西監督・小川理事長のトーク・おめでたいメンバー (岸さん・小嶋さん・福井さん)物販も頑張りました。
2019/7/25	外部イベント	みくも地域人権福祉市民交流センター(滋賀) 「だれも 排除されない 排除しない」講演(小川理事長)

日時	カテゴリー	出来事
2019/8/2	GENKI	第3回夏祭り「夏だ!夜店だ!パルファンストリート! 香ヶ丘商店街老舗和菓子店「おかよし」さんも参加
2019/8/21	まち	内閣官房健康医療戦略室の田中謙一さんと大阪大学の山川みやえ教授がCaféここいまにお越しになる。
2019/8/31	映画	シアターセブンで映画「オキナワへいこう」劇場上映 おめでとうメンバー舞台挨拶。大西監督・小川さん・三谷さん・福井さん
2019/9/1	外部イベント	堺区ボランティア祭り@山之口商店街 くみボタンワークショップ・おめでとう物販・映画PR
2019/9/9	映画	「オキナワへいこう」の聖地巡礼で他府県からのお客さんがふえる。
2019/9/18	まち	東京ソテリアの塚本さんのご案内でイタリアからイヴォヌ・ドネガーニさん(エミリア・ロマーニャ州立ポローニャ地域保健連合機構精神保健局前局長)がkokoimaに来られる。
2019/10/4	おめでとう	京都造形芸術大学からのアルバイト生尾上(オガミ)くんによるFBの「おめでとう日記」が始まる。
2019/10/4	おめでとう	尾上(オガミ)くんとよしかねさんが関大で自転車の練習。
2019/10/11	おめでとう	近くの保育園児さんたちがふくまるを見に来て大合唱!
2019/10/16	おめでとう	ハレハレハンガーを焼肉「でん」に寄贈。
2019/10/16	映画	堺区さかいボランティア連絡会主催 映画「オキナワへいこう」 上映会とお話会 小川理事長登壇 おめでとう出張販売
2019/10/18	おめでとう	kokoima体操を考えるために浅香山病院の理学療法士さんが来てくださる
2019/10/19	映画	大阪人間科学大学「オキナワへいこう」上映会 大西さん・小川さん・三谷さん・福井さん・小嶋さんがトークと物販に参加
2019/10/28	外部イベント	「ラポルト病院の脱制度精神医療と日本の動き」にシンポジストとして小川理事長が参加(大阪大学)
2019/11/9	映画	那覇市地域活動支援センター主催「オキナワへいこう」上映会に小川理事長が招聘(精神障がい者の暮らしを考える)講演する
2019/11/15	おめでとう	kokoima体操ミーティング 曲が阪本九の「明日があるさ」に決定
2019/11/17	イベント	秋のkokoimaバーゲン 過去最高売上達成!!!!
2019/11/23	外部イベント	堺浜シーサイドステージ スワップマーケットにリユースショップゼロ出店。 お客さんの熱気に負けそうになる。すごい値切り!!
2019/11/24	映画	教育文化財団 高山市総合福祉センター「オキナワへいこう」小川理事長講演
2019/12/1	連携	おめでとう界隈を関西大学 人間健康学部の体験学習の授業での活用開始
2019/12/6・13	映画	関西大学 千里山キャンパス 講義「映像から現代社会を考える」で「オキナワへいこう」の上映 講師:小川理事長
2019/12/11	映画	「オキナワへいこう」パンフレット完成
2019/12/21	おめでとう	年末「夢つぐら」大セール開催!
2019/12/21	GENKI	関西大学 堺キャンパス 浅香山GENKIプロジェクトのクリスマス会

日時	カテゴリー	出来事
2019/12/28	イベント	おめでとうの忘年会@割烹ダイニング二葉 ボランティアさんや大西監督も参戦!総勢25名。
2019/12/29	おめでとう	二日酔いの中、おめでとうの大掃除。去年より体力あり! 文句も言わず隅から隅まで頑張りました!すごい!!
2020/1/1	おめでとう・まち	kokoima お正月 おせち料理・お雑煮・関東炊き
2020/1/2	おめでとう・まち	kokoima お正月 まちの人も一緒にビンゴ大会
2020/1/3	おめでとう・まち	関西大学卒業生 ちゃいによる「伝筆(つてふで)」書き初め おめでとうメンバーとまちの人も参加
2020/1/12	まち	関西大学人間健康学部企画「七草粥パーティーとお正月遊び」@cafeここいま
2020/1/13	映画	浅香山GENKIプロジェクト主催 映画「オキナワへいこう」参加者316名 上映会&トークセッション@フェニーチェ堺 大西監督・小川理事長・ おめでとうメンバー(三谷さん・福井さん)・亀井哲夫(雑魚寝館館長)・ 高橋明(浅香山病院理事長)・安田忠典(関西大学教授)
2020/1/18	映画	岸和田市教育委員会生涯学習部生涯学習課「オキナワへいこう」上映 小川理事長講演
2020/2/2	おめでとう	常連さんが千代子マグネットと織りストラップお買い上げ。
2020/2/10	映画	ねや川サナトリウム「オキナワへいこう」上映 小川理事長講演
2020/2/17	法人	NPO法人kokoima 第4回通常総会@おめでとう
2020/2/19	映画	村川治彦教授企画 世界遺産センター熊野本宮での「オキナワへいこう」上映会参加 小川理事長・廣田さん・水巻さん・福井さん・大窪さんとまちの人 片鎌さん NPO法人kokoimaと一般社団法人kumano.coの姉妹団体協定の締結。
2020/2/23	おめでとう	なおとさんの卒業&小川理事長の誕生日会 「宝くじあてておめでとうのビル建てるから待っててな!」
2020/3/1	おめでとう	「コノネ」～社会を楽しくする障害者メディアへの軒先書店となる。
2020/3/20	映画	東京大学大学院総合文化研究科石原孝二准教授の企画 「東京大学駒場キャンパス オキナワへいこう上映会・トークセッション」に おめでとうメンバーが招待される。「まさか東大に行くなんて!」 「頑張りて歩く練習するから俺も行きたい」と大変期待に胸を膨らませていたが、 コロナによる緊急事態宣言で延期となる。
2020/3/21	おめでとう	マスク不足に対応すべく、おめでとうでマスクを縫う。 一時は注文に間に合わず、1週間待ちになることも。6月までに400枚販売。
2020/3/26	おめでとう	福井さん・田原さん・廣田さんによる「オープンサンドコンペ」 選ばれた人にはパンとドリンクチケットの賞品が!
2020/3/31	法人	アトリエの内装工事 耐震工事が完了する
2020/4/1	畑	貸農園「kokoimaファーム」を始める。 ボランティア永江さんに教えてもらいながら畝づくり。 コロナの中でどこにも行けないので、気分転換できるかな。
2020/4/1	おめでとう	水巻さん採用

日時	カテゴリー	出来事
2020/4/8～	おめでたい	コロナウイルスの流行と緊急事態宣言発出でCaféここいまは休業する。(10日間) おめでたいは在宅ワークも始めたり、マスク不足に対応し手作りマスクを作り始めた。
2020/5/13	おめでたい	野良猫「健太くん」を保護するために[健太を救う会] 発足!
2020/5/13	おめでたい	大井さん得意の3Dプリンターを使ったマスク補助バンドが完成。販売。
2020/5/15	まち	緊急事態宣言で休んでいたパン売り再始動。 テイクアウトができるおにぎりも販売開始。
2020/5/24	おめでたい	師匠の夢つぐら完成! ふくまるもお気に入り。
2020/5/28	まち	関西大学 安田先生 朝パンの常連さんに「あんマーガリン最高!」
2020/5/28	まち	加藤啓子さんによる広場読み@Caféここいまの軒下にて
2020/5/29	まち	おにぎりの具も工夫。「オムライス・水ナス・梅」など毎日創意工夫中。
2020/6/7	イベント	cafeここいまで〈シェアカフェ〉に取り組み始めた。 一人目は関西大学教授 安田先生&職人による 「キーマカレーとピクルスサラダ」美味しい萩原コーヒーも。
2020/6/24	畑	kokoimaファームで夏野菜が続々と収穫される。Caféここいまのメニュー。 サラダや冷やしうどんに大活躍。
2020/7/1	まち	Caféここいまスイーツ部門「アトリエケイク」始動。
2020/7/1	おめでたい	週に一度のおめでたいミーティングが始める。金曜日15時～
2020/7/7	外部イベント	インターネットラジオ「のんのとカントリーママのENJOYまつばら!」 NPO法人kokoimaから金澤さん・水巻さん・三谷さん 出演。
2020/7/11	イベント	写真展「作業所のねこ&ノラねこ展」をみるため @新世界ギャラリー1616へ
2020/7/19	イベント	シェアカフェ Caféここいまのごちそうキッチン 辻並麻由さんによる「ルーロー飯」
2020/7/26	おめでたい	アルバイト 純一くん雇用(11月中旬まで)
2020/7/31	イベント	合同お誕生日会「鰻を食べよう」 コロナで開催できなかったお誕生日会と 土用の丑の日を合わせてアプロで鰻を購入したらふく食べました。 鹿島豆腐のところてんがデザート。
2020/8/20	おめでたい	大阪大学大学院生 豊原くん 研究のためkokoimaに滞在(1週間ほど)
2020/9/6	イベント	シェアカフェ「皆楽」出店 コーヒー・厚焼きたまごドッグ
2020/10/19	法人	ふくもちに家具や机、棚を配置する アトリエカフェさん/株式会社こふれさんに依頼する
2020/11/1	おめでたい	當間さん採用
2020/11/1	おめでたい	アトリエ&ギャラリー ふくもち2階で裁縫仕事を始める。 サンタさんの洋服を尾上母につくってもらう。
2020/11/19	まち	大西監督来訪。パンフレットにサインするために 配給元おめでたいに来てくださる。
2020/10/30	まち	浅香山校区連合自治会さん主催のハロウィンフェスタに参加 隣の八百屋「フレッシュ畑」さんもゲリラ参加でお菓子を配る。

日時	カテゴリー	出来事
2020/12/3～9	外部イベント	第27回堺市精神保健福祉セミナー「ふりかえろう、今まであゆんできたまち ～私のリカバリーストーリー、そしてこれから～」をテーマにメンバーの滑田さんが メッセージ動画に出演される。「自分のまちですから」
2020/12/4	映画	関西大学 千里山キャンパス講義「映像から現代社会を考える」で 「オキナワへいこう」上映 講師:小川理事長
2020/12/20	イベント	関大安田ゼミとの協同企画で〈サンタさんとじゃんけんおみくじ〉イベントを実施。 お手製衣装を着て滑田さんと田原さんがサンタさんに! 楽しかったな。
2020/12/20	おめでたい	Caféここいま軒先で焼き芋を始める。 ご近所の方にいただいた火鉢を使い露天販売。なかなかいける!
2020/12/22	まち	kokoima五周年記念ふくまるカレンダーを作る。 まちの人に配る。
2020/12/27	おめでたい	大掃除で仕事納め。まち場が増えたため、会議をして分担分け。それぞれの仕事場 ピカピカに。スーパーアプロで年越しソバとお惣菜を買ってみんなで食べた。 「新人の當間さん、喫煙所の掃除、よく気づいて佐原さんと二人で頑張りたなあ」と メンバーさんから労いの言葉にみんなで感動。
2021/1/1	おめでたい・まち	お正月 2021年もみんなでおせち食べました。突然やってきた野良猫の 幸ちゃんを保護する。ふくまるくとあわせて「こうふく」コンビ
2021/1/2	おめでたい・まち	お正月 ビンゴゲームや、言葉ゲーム豪華賞品あり?!
2021/1/3	おめでたい・まち	書き初め 先生はいないけれど、みんなで書きたいものを書きました。 「無断欠席しない」「恋活」「健康」「迎春」「母」など名言たくさん。 みんな表現者。
2021/2/7	まち	関西大学人間健康学部 大学生企画「豚汁パーティー」と子ども向け ワークショップ「ピニャータづくり」メンバーさんも売り子を頑張りました。 声かけが素晴らしいかったです「いらっしやい。いらっしやい。心をこめて作りました」 おにぎりセットで販売。完売!
2021/2/10	おめでたい	三谷さんの発案で堺区スマイルフォトコンクールに ふくまると幸ちゃんの写真を投稿。結果は選ばれず。 「来年は商店街の真ん中で撮影するわ。堺感が足りなかった」と三谷さん。
2021/2/13	まち	関西大学人間健康学部 大学生企画「甘酒・ペビーカステラ・百人一首」 ミーティングではメンバーさんが先輩らしく 「チラシをもっと早くにほしかったわ(あれば、配ってあげたのに)」
2021/2/22	法人	NPO法人kokoima 第5回通常総会@おめでたい (コロナの影響により書面決議)
2021/3/14	まち	関西大学人間健康学部 安田ゼミ「香ヶ丘商店街でホワイトデーイベント」 おめでたいメンバーと学生のコラボでクッキーとギフトカードを手作り @おめでたい ふくもち 近所の子どもたちが大勢参加。
2021/3/23	映画	「オキナワへいこう」上映会@岸和田市精神障害者の生活を支える会 「げんき」の会(稲垣診療所) 物販&トーク(廣田さん・三谷さん・岸さん)
2021/4/1	まち	アトリエ&ギャラリーふくもちオープン 本格的に壺焼きでの焼き芋を始める。これはいける!

日常

おめでたいの日々

香ヶ丘商店街の入り口にある作業所おめでたい。メンバーさん、まちの人、猫までやって来て、毎日何かが起きている。しんどいこともあるけれど、まちで生きるのは面白い。雑魚寝館の亀井先生は「ここは、まちのリビングやなあ」とつぶやいている。そんな私たちの日々をぜひ覗いてみてください。

01. お正月はCaféここいまでおめでたいメンバーと手作りのおせち料理をいただきます。今日だけは特別にちょっといいお酒で乾杯1年の抱負を語ります【こんなに賑やかなお正月は初めてです】
02. お正月はまちの人も参加しておめでたいで書き初めをします。安川真慈先生(2018年)、関大卒業生の住徳沙弥香先生(2020年)のお二人に講師をお願いしました。2020年は自分たちだけでやりたいと三谷さん。「精一杯生きる」と素晴らしい1年の抱負です。
03. 小川所長にサプライズパーティー。メンバーさんがバレーのように(バレーでしたが笑)ドンキホーテに行ってパーティグッズを買い込んで、思いっきりお祝いをしました。
04. 「今年はお花見行かへんの？」の声にハツとして、突然お花見に行きます。お弁当とおやつ持って、たまにはこういう楽しみが必要です。今日は仕事を休んでカンパイ!
05. 大井さんは3Dプリンターで様々なものを作り出す奇天烈発明家!この日はふくまると大井さんのお誕生日会でした。おめでとう。
06. ゴールデンウィークの頃「浅香山つつじまつり」が開催されます。散歩しながらみんなで見に行きました。
07. 廣田さんのお誕生日。可愛いまるいふくのお皿をプレゼント。初物のスイカも食べました。
08. 近所の小学生とメンバーさんの素敵なシーン。「僕、生まれて初めて子どもと喋りました!」どうでしたか?と尋ねると「とっても楽しかったです!」この二人は今でも交流があるんです。
09. 土用の丑の日は鰻を食べます!GENKIの仲間でもある鮒芳さんと大きな鰻を買いました。デザートは香ヶ丘商店街の名店、鹿島豆腐のところてん。
10. 「焼肉食べたい」と田原さんの希望を叶えるため、誕生日に近くの焼肉「でん」でお食事へ。すると、なんとスタッフがサプライズパーティーをしてくださりました。そこからハレハレハンガーの寄贈物語がはじまりました。
11. 浅香山病院の理学療法士さんに開発していただいた「kokoima体操」毎朝10時にみんなでやっています。青空の下でやっていると、まちの人も参加してくれることもあるんです。
12. 2018年の千代子さんの誕生日は病気が辛くて涙の誕生日会でした。でも翌年の誕生日会はこの素敵な花咲く笑顔。「ケーキが食べたい」と希望を叶えるため、深川で可愛いケーキを食べて、リュウシヨップぜろのチケットをプレゼント。
13. おめでたいの大切なボランティア永江さんの退職祝い。メンバーさんと考えて、手作りの永久職員感謝状と純金のネックレスをプレゼントすることに。「これからも末長くよろしくお願いします!」
14. 年末は忘れてはならない大掃除。毎年、掃除のスキルと忍耐力が上がっていて感動しています。
15. 2019年の忘年会。大西監督も駆けつけて大所帯の宴でした。ビンゴゲームあり、大盛り上がりでみんなで1年を振り返りました。なかでも、よしかねさんは「1日も休まなかった!」とみんなの前で勇気を出して一人で発表できた!本当にみんな頑張りました。来年は忘年会でできるいなあ。



2019年令和元年 天の橋立1泊旅行

浅香山の駅で廣田さんと大分待ちました。新今宮の駅へ初めて行きました。なおと君とお父ちゃんが待っていました。小川さんがなんぼ待っても来なかった。何かあったのかと思いました。梅田へ来たのも43年ぶりです。ちともわからない!!大阪の駅で小川さんと金澤さんと合流しました。とてもタイミングが良かった。バスに乗りました。バスの運ちゃん1人で切り盛りしてました。よいよ宿に着きました。ペンションです。関西の軽井沢ですね。部屋に入ったらソファで少し横になりました。とても気持ち良かったです。夕飯はバーベキューとハンバーガーと海老を食べました。おいしかったです。ちともお酒が廻り、歌なんかを歌い出しました。小川さんと廣田さんが焼く役として、大変そうでした。8時に済みました。それから2次会もしました。金澤さんとちきさんとちきさんと君と私でお父さんと田原さんも。2次会も10時半に終わりました。11時に顔を洗ってベッドで寝ました。朝5時に起き、智ちゃんも1時半頃、露天風呂に入りました。気持ちよかったです。朝食のビュッフェを切りましたが大変でした。屋ごはんのうな井のおいしかったこと、コーヒもおいしかったです。ウニを3個、4個食べました。帰りのバスは遅かったです。私が助かったことは荷物を持って下った事です!!こういう旅行も変わっていいなあと思います。事故もなく、無事帰って来た事が何より幸せです。来年は淡路島に行きましょ!!

三谷恵美

おめでとう初!研修旅行—与論島からのお天橋立!—

三谷さんが学生のときに行った与論島でおめでたいのメンバーで行こうと計画。何度も何度もミーティングを重ね、予算のこと、移動のことを考えた結果、天橋立に決定!(行く直前まで「やっぱりやめとく」「バーベキューなら行きたくないわ」と悩むメンバーさん)紆余曲折しながらマリントピアリゾートというプールやグランピングもできる豪華なリゾートへ宿泊。「こんな豪華なところ生きてきた中で初めて」とみんなで感動し、歩いて食べて飲んで笑った二日間の珍道中の記録です。大変だったけれど、最高に楽しかった。行ってよかったなあ!



「荷物を持って大阪駅から阪急梅田駅まで歩けるかが一番不安や」休憩しながら見事到着!繁華街で迷子にならないように、おめでたいの旗を作って出かけました。



マリントピアリゾートは超豪華!!!!温泉付き!小川所長はどこだ?!



いつもよくしてもらっている香ヶ丘商店街のみなさまや常連さんにお土産を配りました。選ぶときは「おっちゃんとおばちゃんと、そうやママにもあげないと!」と顔を思い浮かべて。

天橋立 旅の道 辿っていくと 笑福の瞬間 顕れる

廣田安希子

日常

おめでたいの作品とお仕事

NPO法人kokoimaが運営する4つのまち場(Caféここいま・リユースショップぜろ・おめでたい・アトリエ&ギャラリーふくもち)では、「やってみたい」を仕事のモットーにさまざまなモノやコトが生み出されている。3年間のわたしたちのさまざまなお仕事紹介します！

大切なこと

- ムリをしない。しんどいときはしんどいと言きましょう。
- 休むときは必ず電話を！心配します。

01. Caféここいま

カフェの仕事は昼食の準備や配膳、ウェイターの仕事などさまざま。コロナ禍では、店内の飲食だけでなくテイクアウトのおにぎりやオープンサンドにも力を入れました。関西大学の安田先生は授業前に「今日は何ー？」と毎朝のようにパンを買いに来てくれました。スイーツ作りにも取り組み、りえさんの作るザクザククッキー cookrie(クックリエ)は味噌カレーのようにここいま定番商品に！

02. 焼き芋

コロナ禍でCaféの売上げが落ち、悩んでいた時にまちの人からいただいた火鉢。所長のひと声の「火鉢を使ってお芋を焼いたら暖かいし、まちが賑わうかしら！」を実践！お芋のいい匂いにつられてお客さんが集まり「これはいける！」とつば焼き壺を信楽から取り寄せ、本格的な焼き芋が始まりました。まだまだこれからですが、メンバーさんと共に行列のできる焼き芋店を本気で目指し、日々頑張っています！

03. kokoimaファーム

コロナ禍の中、外出もイベントも自粛続き。畑なら気にせず仕事ができる！と三国ヶ丘の貸し農園を申し込みました。ボランティア永江さんの指導の元、初心者の職員・メンバーさんたちで、耕し、畝を作り、植え付け、夏野菜を収穫！メンバーさんの中には「これは面白い」とハマる人も。暑い日も、寒い日も交代で水やりをし、収穫した野菜は最高に美味しい！この活動が、関西大学村川ゼミとの共同の畑「おはる畑」に繋がっていきます。



01



02



03



04. リユースショップぜろ

まちの人にいただいた不要なものを販売しています。値切り交渉には負けることもありますが、ぜろの店員さんは商売上手。「お姉ちゃん、お兄ちゃんと話しにきてん」と来られるお客さんだっています。ぜろファッションと称して、まちの人もおしゃれにキメてくれます！

05. おめでとう

夢つぐらを作る師匠と、織り師の二人が働いています。そして、みんなが休憩したり、ゆっくりする場所になっています。岸和田の古民家の縁側の廊下マットとして受注を受けた、ふく織りは7.2メートル。ふくまるがつぐらと織りの完成を「頑張ったね」といつも点検してくれます。

06. アトリエ&ギャラリーふくもち

2階でメンバーさんと日々チクチクとお裁縫をして作られた可愛い雑貨や洋服を1階で販売しています。新作は小さなネコのブローチ「ふくもちず」とあなたの守護神「おめでとう神(シン)」です。ヘアターバン「ういやつ八巻」もおすすめです！

まち

香ヶ丘町とkokoima

コミュニティカフェ Caféここいまは常連さんがいる喫茶店。ひとりゆっくり過ごす人、みんなでおしゃべりが好きな人。kokoimaはまちの人のサードプレイス!コロナ禍では感染防止対策を取りながら、少しでもまちの人が楽しめるようにシェアカフェとしてのご利用を働きかけました。

亀井哲夫さん

kokoimaには雑然とした魅力がある。料理に例えればゴツ煮の味わい。そして、(住民の)とまり木的存在。ここいまが閉まっていると、すごく「まちが寂しい」。



- 01. 常連のおばあちゃんと近くの事業所のヘルパーさん。毎週水曜日に待ち合わせるほど仲良しに。「頭のマッサージしたるわ」
- 02. シェアカフェ第一弾は関大安田先生による特製キーマカレー助手はコーヒーを淹れるのが上手な職人(職人はあだ名です)
- 03. シェアカフェ第二弾は辻麻由さん(gecoya食堂)によるルーローハン!全て香ヶ丘の食材で作っていただき大満足!
- 04. ベトナム留学生のトゥンくんはcafeここいまをオープンして間もない頃からのお付き合い。トゥンくんのフォーは絶品!
- 05. 亀井先生はコノネを年間購読してくださってました!
- 06. Caféのランチはまちの人もメンバーさんも一緒に食べます。
- 07. 夕方は週1回、尺八教室としてご利用いただいています!
- 08. 土用の丑の日。向かいのアプロ前で鮎芳さんが鰻を出店!毎年、古家さんがいい声で売ってます。
- 09. pilot light coffee のお二人がスペシャルティコーヒーを淹れてくれました。※p42掲載記事あり
- 10. お正月はまちの人もおせち料理を食べに來られます。「ひとりよりみんなでお正月も楽しいわ」
- 11. そよ風のように来てくださるポコさん。王子の夢つぐらをご友人の子猫にプレゼント。いつも感謝です。
- 12. ご近所さんのふくまるのかわいいお友達。「ふくチャンドコー?」と挨拶してくれます。
- 13. 関大生の常連さん。ニックネームは職人と大将です。卒業してから元気かな?会いたいなあ!
- 14. 大西暢夫監督もはるばる岐阜から。おめでたいのネックストラップを買ってくださいました。
- 15. 加藤啓子さんとコンダミカさんによるひろば読みが始まりました!まちの人も「なににな?!」と興味津々で本を手にとります。

関西大学とkokoima

kokoima開設当初からお付き合いのある関西大学人間健康学部の村川治彦教授と安田忠典教授のご協力のおかげで、学内でココ今ニティ写真展や「オキナワへいこう」上映会を実施していくうちに、大学生がkokoimaと共に香ヶ丘町でやってみたいことを仕掛けてくれるようになりました。

安田ゼミのみなさんは、シャッターの塗り替えや、餅つき大会、子どもたちとメンバーさんの共同でホワイトデーのクッキー作りなど、いつも新しい風を入れてくれます。

村川ゼミのみなさんは関西大学の学内で、おめでたい作業所や近隣の作業所ハッピーポケットさんと運営する畑「おはる畑」をつくってくれました。毎日、交代で水やりをしています。コロナ禍の中ですが、大学で収穫祭をみんなで行いました。メンバーさんは「学生さんが一緒に明るく楽しんでやってくれて本当に嬉しかった」と話されていました。

村川治彦さん

人間は顔を見て、ふれあい言葉を交わすことで偏見をなくしていきます。

安田忠典さん

社会の中で、多様な人と繋がる体験こそ、真の学びです。

01. 4年ぶりに関西大学 安田ゼミOBが集合。未完のCafe ここいまのシャッターを完成させるために。
- 02.03. 先輩たちも卒業した先輩に負けじとリユースショップゼロのシャッターペイント。学生がワイワイと描くことでまちがにぎやかに!
04. 突然の安田ゼミ企画!お餅つき大会。亀井先生もメンバーさんも参加してみんなでおいいただきました。
05. 絵の上手な福井智子さん作シーサー。遊びに来てくださった村川先生という笑顔。
06. 浅香山連合自治会と関西大学でハロウィンイベント。おめでたいもまちの人と一緒に菓子を配りました。200名以上の子どもたちが来てくれました。
- 07.08.09. 豚汁パーティー企画。メンバーさんも売り子として頑張りました。反省会では学生さんもメンバーさんと一緒に売り上げの計算をしながらか客さんはとても喜んでくれた利益を得るって難しい。」
- 10.11. 大学生と甘酒と百人一首大会もしました。「初めて甘酒作るんです」と学生さん。「この甘酒、濃ゆいなあ〜」と近所のクリーニング屋さんのおっちゃんは何度も飲みに来てくれました(笑)
12. ホワイトデー企画!(メンバーさんと学生でクッキー作り。焼けたクッキーに子どもがデコレーションして持ち帰るという連携企画)メンバーさんは、学生さんと話ながら「時間通りに焼けなかったり、こねるのも大変だったけれど、一緒にできて楽しかった。またしたい!」と危機を乗り越えたからこそ絆が生まれました。

おはる畑:

2020年夏から関西大学村川ゼミの「おはる畑」に参画。1月の収穫祭ではなめださんのダンスで大盛り上がり!今は、夏野菜を育てています〜!おめでたいは土日か水やり当番。大澤くん、いつもありがとう。



映画

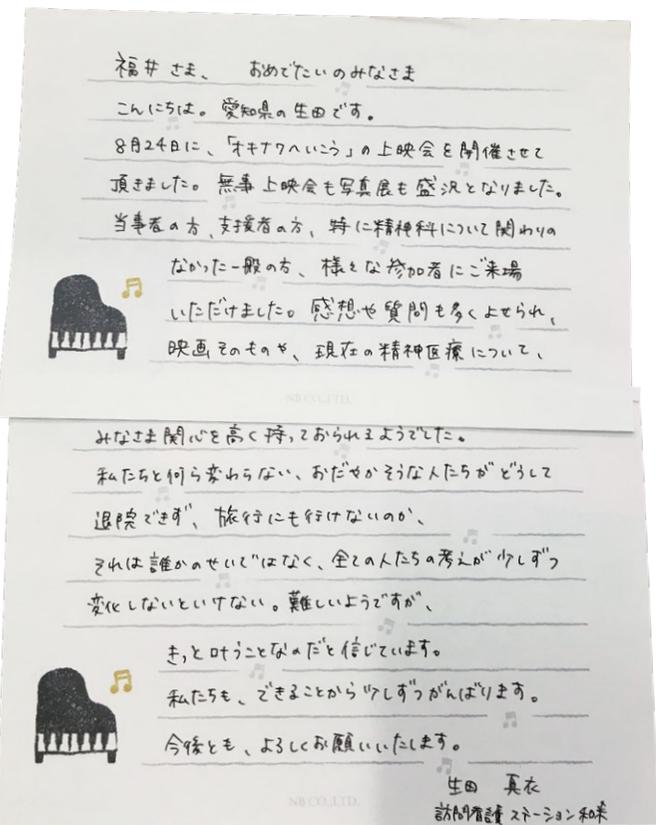


オキナワヘイコウ ステッカー ¥300

『オキナワヘイコウ』

おめでたい作業所が『オキナワヘイコウ』（監督：大西暢夫）の配給元として、自主上映の受付とDVDの発送や宣伝を行っています。上映会の会場に出張して、舞台挨拶に登壇したり、おめでたいグッズを販売したい、メンバー全員で映画の応援をしています！発送担当は字も絵も上手な福井さん。福井さんのお手紙を楽しみにされているファンの方もいるようです。映画の続きが、街で遅く暮らしているメンバーさんの姿や、おめでたい作業所の日々なのではないかなあと思っています。

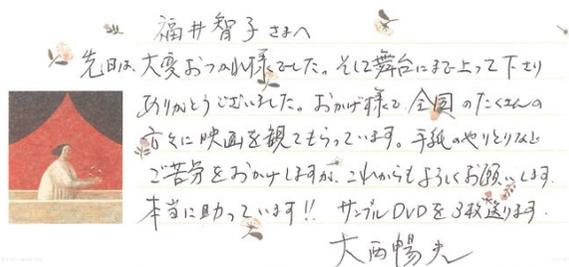
発送担当福井さんと上映先の往復書簡？！



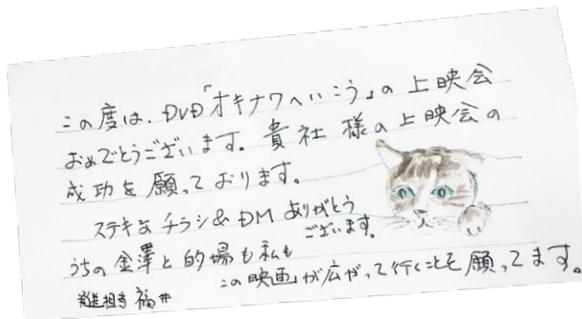
※現リンクよこはま訪問看護ステーション



配給元カード 作画：福井智子さん



大西暢夫



雞掛福井

メンバーさんが上映会に参加!物販 ついに登壇もしました!

最初はおめでたいグッズの販売員として参加していましたが、舞台にあがってお話する機会をいただきました。入院を経験して、街で暮らすメンバーさんは香ヶ丘での暮らしを舞台で真剣にそしてユーモラスを交えて語られます。最後のメは「ステッカーぐらいなら300円やから買って行ってくださいよ」と、ここでも商売上手です。

01. 2019年7月8日

此花区社会福祉協議会 / 此花区民一休ホール
メンバーさん(福井さん・岸さん・小嶋さん)が初めて登壇。



02. 2019年8月31日

シアターセブン (上映期間:2019/8/31-9/13)
舞台挨拶に大西監督と参加。

福井さん「発送担当として、お手紙書いてます。初めてDVDが返ってきたときはクッキーと一緒に送ってくれて、感動したんですが、あれから一度もありません(笑)」三谷さん「よそゆきの声出して「いらっしゃいませ」と言ってゼロで働いてます。楽しいですよ!みなさんも嫌なことがあったら、うじうじ言ってんと小川さんのNPO法人kokoimaにあたってくださいな」



03. 2019年10月16日

気づきのボランティア講座 映画「オキナワへいこう」上映会&お話
堺区さかいボランティア連絡会・堺市社会福祉協議会 / 堺市総合福祉会館
「映画は何回も見たから今日は売るわ!」とメンバーだけで販売。



04. 2019年10月19日

人科祭 / 大阪人間科学大学 庄屋学舎B601教室
人間科学大学の富澤宏輔先生がシアターセブンの舞台挨拶でメンバーさんが話す姿を見て、ぜひ来てくださいとオファーされました。



05. 2020年2月19日

関西大学SDGsラーニングラボ / 世界遺産センター 熊野本宮館
関西大学村川教授の企画の一環で、マイクロバスで熊野までオキナワへいこうの上映へ。福井さんは自作のハレハレハンガーとねこたい(猫の首輪)を持って宣伝!まちの人も一緒に小旅行気分♪



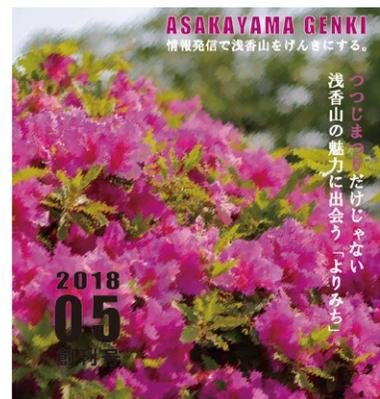
06. 20121年3月23日

岸和田市精神障害者の生活を支える会「げんき」の会 / 岸和田市福祉総合センター
当日はざろファッションで決め、物販では目標にしていた17,000円を売り上げ「登壇と物販は疲れたわ」とトットで帰って来られました。

GENKI

浅香山GENKIプロジェクト

浅香山・香ヶ丘地域でボーダレスに人が集い、まちに「新たな賑わいと価値を創出する」ことを目的に活動する緩やかなネットワーク。「香ヶ丘商店街のお祭りは昔は大にぎわいやってんで。今はなくなってしまって寂しい」というまちの声を聞いたことが始まり。夏祭りのほかに、まちの不要なものを循環させるフリーマーケットや、まちの人や関西大学の学生と交流するクリスマス会など2017年から様々に実施しています。



2018年に作成したパンフレット。中面には、浅香山のよりみちマップも作りました。デザインは関西大学の卒業生森岡雅勝さんによるもの。

発行：浅香山 GENKI プロジェクト
香ヶ丘町 1-9-1
制作：一般社団法人 kumano.co

ちょっとよりみちしたいまち

Cafe ここいま 28



このCaféが人のつどう場（居場所）になったら・・・と、願っています。人がつどう場には、おいしい食べ物、癒しの飲み物は欠かせません。だから、できるだけ手作り。スープセットが最近の人気メニューです。
家庭料理が楽しめるcafeここいま



電話 072-220-5458
営業時間 10:00~17:00
定休日 月・火

うなぎミュージアム雑魚寝館 30



電話 072-233-8831
営業時間 15:00~22:00
営業日 金曜日
※GWは4月28日~5月3日まで休まず営業！ただし、営業時間は10時~17時



館長オススメの自慢のうなぎのカフェ料理
ウナギや淡水魚のアート作品やコケ盆栽に囲まれた自然遊スペースで憩いの一刻、マリアー・ジュフレールやフォションのオリエンタル系紅茶とうなぎの塩パンセットを味わってみてください。また、うなぎの飯蒸しやうなぎチャーハンそしてうなぎの頭・半助と温かいご飯の取り合わせも美味しく楽しんでみてください。

創刊号特別企画

特集 浅香山をもっと元気に！！ 地域を盛り上げる仲間たち



亀井哲夫さん
うなぎミュージアム雑魚寝館の館長！うなぎのことならなんでもおまかせ！



古家聖司さん
バルファン・コリーヌで今日も元気にまちの食卓を守ります！



小川貞子さん・ふくまる
cafe ここいま・おめでたいからこのまちをもっと元気に！



南部英剛さん・貴子さん
人の出逢いがつなかる街、そんな魅力を伝えたい。



岡崎里奈さん・アレックス
帝塚山芋忠株式会社の宣伝部長アレックスさんと一緒に浅香山を盛り上げていきます！



白石大さん
浅香山に祭りを求めて！

バルファン・コリーヌ 29



ふしぎな魅力がみつかる浅香山で注目のお店

電話 072-229-8486
営業時間 9:30~21:00
定休日 月曜
ただし、7のつく日は営業します

バルファン・コリーヌは毎月7のつく日にお得なイベントを行っております。「98円均一セール」や「Best100セール」「総力祭」などお客様にできるだけ安く・高品質な商品をお買い求めいただけるように日々、努力しています。ぜひ香ヶ丘町にお越しの際は一度、バルファン・コリーヌに足を運んでください。

※店名横の数字は裏面のマップ番号

浅香山周辺のイベント開催情報！！

5.5 11:00~16:00 Saturday
堺市堺区香ヶ丘町1-9-29の周辺
南海高野線「浅香山」駅徒歩約3分
近隣駐車場あり

夏だ！夜店だ！
8月2日
今年も開催決定

大和川花火
2018
8月14日(火)
予定

大和川水辺の楽校
まつり
5月6日 @大和川河川敷
楽しい出店がたくさん。

オキアキのいこう
関西大学キャンパス
6月10日
13:00

1 浅香山カメラ・スタジオ
 受験・就活の証明写真はお任せください。
 営業時間 9:00~19:20
 電話 072-227-1408
 定休日 日曜・祝日



9 おふくろの味 田舎
 自家製の新鮮野菜をつかった手作りの宮崎郷土料理。
 電話 090-1150-2966



17 グリル 美作
 創業 50 年続く洋食店です。
 電話 072-232-1959



20 ヤマト水道
 給排水工事・トイレ・風呂・改築修理工式
 電話 072-201-0970



23 鹿島屋豆腐店
 創業 54 年の手作り豆腐
 電話 072-238-5955



26 リユースショップゼロ
 「いたたく」「必要の人に販売する」それは、人と人をつなぐ行為だと感じます。
 電話 072-220-5458



2 Dining+ お酒 凜 ~Rin~
 お弁当のお持ち帰り。店内では一日中定食が食べられます。ぜひお待ちしております。
 電話 072-276-4455



10 ア・ミ・コート (千代田公房)
 オリジナルかりんドーナツ好評です。皆様ご賞味ください。
 電話 072-238-3715



18 BKD 改 BEST KIDS DREAM
 プラモデル・工作の小さなお店
 電話 072-233-7718



21 喫茶パロン
 モーニングが特別な老舗の喫茶。お昼はランチもしております。
 電話 072-229-3777



24 帝塚山芋忠株式会社
 敬愛シビックホール堺 敬愛シビックホール帝塚山 帝塚山芋忠は、故人様の尊厳を大切に「オンラインワンのお葬式」をご提案いたします。
 電話 0120-012-342



27 おめでたい
 好きな事、得意な事に取り組み、楽しく時を過ごす努力ができる場所。
 電話 072-220-5458



3 株式会社中井酒店
 ワインソムリエのいるお店です。
 電話 072-233-6591



11 三丁カフェ
 元倉庫跡のDIY カフェスペース
 電話 072-233-6652



19 串かつ 友家
 気軽にサクッと食べて放めるのが串カツの醍醐味!!
 電話 090-6233-3401



22 南部交流センター
 「障害者自身が主人公」をモットーに、互いに利用障害者を中心に運営、活動しています。重い障害を持った人も、本人の活動に沿ながら充実した活動ができるように取り組んでいます。
 電話 072-238-6541



25 株式会社ウェルケア ウェルコート美原
 あなたと私の絆を大切にします。住宅型有料老人ホーム
 電話 072-369-1070



4 喫茶マック MUC
 各種コーヒー豆 挽売り致します。
 電話 072-229-5208



12 畳のあさか
 熊本産の上質な「いぐさ」を用いた畳は、いい香りで「ほっ」とくつろげる空間を創りだしてくれます。
 電話 072-238-5909



14 World Commons 合同会社
 玩具、雑貨、衣類の卸販売、買取やバレーン装飾、イベント企画及びHP制作まで多岐に渡り営業しております。
 電話 072-275-6859



5 堀野赤心館書店
 創業 96 年の堺で一番古い町の本屋です。どんな本でもお取り寄せ出来ます。
 電話 072-232-2851



13 株式会社エヌクリーン
 剪定・植栽、外構等の造園工事、手すり取付、お部屋の整理、ご用聞き等、住環境に沿った様々なサービスを行っております。
 電話 072-228-3089



6 マザーハンド
 洋服のリメイクが得意です。手持ちのお気に入りだった洋服を今風によみがえらせませんか。
 電話 090-6372-0739



15 関西エニシングリフォーム
 外壁、内装工事全般。物件を価値あるリノベーションでサポートする。
 電話 06-6366-6171



7 フライショップ 光食品
 ご注文を受けその場で揚げる熱々コロッケをご賞味ください。
 電話 072-229-4155



16 お好み焼 とよちゃん
 創業 38 年。家族でがんばってます。
 電話 072-222-7948



8 おかよし味匠庵
 手作り和菓子をお茶の先生方に納めます。
 電話 072-229-6518



ふりみちマック

浅香山の魅力大発見



GENKI

2017

●第1回目「夏だ!夜店だ!パルファンストリート」

地域住民で作った手作りの夏祭り。やってみると驚いた!昔のお祭りが復活したように、人が集まりました。

2018

●第1回目「パルファン・ストリート・フリーマーケット」

「浅香山つつじ祭り」に合わせて、来場者や地域住民が気軽に立ち寄れるように地域循環型リユースイベント「パルファン・ストリート・フリーマーケット」を企画しました。

●第2回目「夏だ!夜店だ!パルファンストリート」

ステージ企画を実施。アサダワタル氏の司会のもと、地域の子どものセッション、関西大学軽音部や、尺八の発表、当時の堺市長も参加し「堺っ子体操」を子供も大人も踊りました。

●まちのクリスマス会@関西大学

関西大学の食堂を貸し切って、まちのひと学生も子どももみんなでクリスマス会をしました。骨つきチキンを食べたリ、ビンゴ大会、学生モデルによるぜろファッションショーやダンスのお披露目。本当に楽しい宴となりました。

2019

●第2回目「パルファン・ストリート・フリーマーケット」

●第3回目「夏だ!夜店だ!パルファンストリート」

香ヶ丘商店街の老舗和菓子店「おかよし」さんが夏祭りに参加。無料で和菓子を実演お振る舞いでくださいました。まちの人大喜び!「おかよし」さんは堺和菓子マイスターの1人。

●まちのクリスマス会@関西大学

昨年よりグレードアップして、大学生の皆さんが出し物・ゲーム・料理(関大特性キーマカレー)など全て企画・運営。「大学生と一緒にお酒を注いでもらえるなんて嬉しいわぁ」とメンバーさんもまちの人も楽しい1日。

2020

●サンタとじゃんけんおみくじ

コロナウィルスの影響で全てのイベントが中止に。関西大学安田ゼミの皆さんに協力していただき、感染防止対策バッチリでクリスマスイベントをストリートで企画しました。(企画・発案はおめでたいのメンバーさん)チキンが当たった子どもは大喜びで、ストリートがとてにぎやかに。



2020.1.13

「オキナワへいこう」上映会&トークセッション
&大西暢夫写真展(主催:浅香山GENKIプロジェクト)

会場:フェニーチェ堺

来場者数:274名 主催者32名 学生10名 計316名

トークセッション登壇者:

高橋明さん(浅香山病院 理事長)・大西暢夫(映画監督)・亀井哲夫さん(雑魚寝館館長)・
小川貞子さん(NPO法人kokoima理事長)・香ヶ丘一丁の人々
ファシリテーター:安田忠典(関西大学人間健康学部教授)

*おめでたい作業所物販・Caféここいま出張コーヒー・浅香山GENKIプロジェクトのパネル
展示も実施しました。



来場者の感想

・トークセッションが楽しすぎて映画の内容を忘れてしまうぐらいでしたが、映画に出られている方の素直な思い、病院にずっといた方が出る事、出た際を想像しづらい環境、ちょっとでも行動や変化があれば、新しい道がひらかれる。なかなか1人1人と向き合う事は大変だと思いますが、浅香山病院から、1人でも無理なく出られ、地域で受け入れられ、さらに、地域外の方も精神病という事を理解して、住みやすい日本になればよいと思いました。

・ボーダーラインを我々がつくっていると感じました。

・皆が普通に暮らせる事が出来ないのはなぜなのでしょう?いつかきっと、いろんな人の個性として生活されます様に!

・浅香山のまちが温かくて住みたくなりました。

・ボーダーレスなフラットな社会が一刻も早く訪れることを願って止みません。NPOここいまの皆さんありがとうございました。浅香山商店街が様々な人々へ障害があるなし関係なくが行き交う、集う、やさしい街になってほしいと思います。

・トークセッションが特に良かったです。ボーダーラインを取り除くための動き一歩一歩が素晴らしいと思いました。今日が私の第一歩です。

超支援

病院を出て地域活動を始めたkokoimaについて、文字で表現しては……というやさしい投げかけを日本看護協会出版会「教養と看護」編集部村上陽一朗さんにいただき、即座にひらめいたのがアサダワタルさん(kokoima設立前から「kokoimaの夢は僕のだ直球のテーマです」と伴走してくれた人)でした。アサダさんが超支援で表現されたことは、全てにおいて私達kokoimaの思いが適切にすくいとられており、私達にもそうだったなと現象をとらえ直させてくれるものでした。故に、kokoimaを最も適切に表現されたものとして、このkokoimaアーカイブに村上さんとアサダさんのご了承のもと、全文掲載させていただきます。

公開 Web サイト「教養と看護」連載

<https://jnapcdc.com/LA>



支援現場に
表現的まなざしを
向けてみる。

超支援?!

by アサダワタル

第六回「病院から地域へ。精神看護と地域づくりのハザマから見えること」その1

—カフェ・ここいま (NPO 法人 kokoima) の実践から—



「カフェ・ここいま」の入り口。晴れた日に「ふくまる軒下マーケット」という名のバザーを行なっている。Facebook 日記より転載。

媒体: Webサイト「教養と看護」「超支援?!」vol.6~8

発行: 日本看護協会出版会 執筆: アサダワタル

vol.6

<https://jnapcdc.com/LA/asada/06/index.html>

vol.7

<https://jnapcdc.com/LA/asada/07/index.html>

vol.8

<https://jnapcdc.com/LA/asada/08/>

vol.6



vol.7



vol.8



スタッフとして、看護部長として精神科の長期入院患者に長く寄り添ってきた小川貞子さんが定年直前に退職し、病院近くの商店街に開店した「カフェ・ここいま」は、オープンから2年が経ちました。

“人々の健康な生活を支える”という看護の本質を突き詰めつけた一つの結論であるその実践は、小川さんの「自分が本当にしたい看護とはどういう形をしているのか」という問いが静かな駆動力となって、着実にそして予想外の拡がりをもたらしながらいまも進行中です。

それは多くの当事者や支援者の人々に支えられた賑やかな毎日である一方で、暗闇のトンネル掘りのように一寸先は闇の日々でもあるようです。しかしひとたび開通すれば、後に続く多くの人がその道を自由に歩けるようになるはずです。

当事者とかれらを支援するさまざまな立場、また何より、

そのどちらにもふだん接したり関心を寄せることの少ない人々との間に引かれた、社会の見えない境界線をどのように溶かしていくのか。そしてこのNPO活動に理事として当初から深くかかわるアサダさん自身はどのような問題意識を小川さんと共有されているのか……。それは冒頭にある次の一文から読み取ることができそうです。

——「その分野の専門性」を高めていくことが、より力強く当事者の支えになる一方で、時として「支援の常識」という壁にぶつかり、「一生活者としての相手に向き合う」という前述したコミュニケーションが取りづらくなっていく、そのような支援・ケア従事者当人の語りや状況に対しても、モヤモヤとした関心を高めてきたのだ。(本文より)

—— 今回の視点 (編集部)

日本看護協会出版会

「超支援?」。そんなちょっと大仰なタイトルをつけて書き始めたこの連載では、主に障害福祉や精神看護の分野における「支援」や「ケア」という取り組みについて、現場に関わりながらいろいろと感じてきたことを、僕なりに書いていくものだ。と言いつつも、僕は看護や福祉の現場人ではないし（ホームヘルパーをやっていた時期はあるがかけただけ）、またその分野の研究者や専門家でもない。芸術文化活動。これが僕の軸足。ではなんでそんな立場の者が、「支援」についてあれこれ書いているのか。

それは数年前から福祉施設や病院などで行われる当事者（入所者や利用者や患者）を対象とした表現活動（絵画や彫刻などの造形活動、ダンスや音楽などのパフォーマンス活動）に関わり続け、人が「障害者」や「患者」である前に「多様な面を持ち合わせた〇〇さん」であるという、当たり前だけと見過ごしがちな事実が気付かされてきたからだ。そしてまた、生活支援員や看護師との交流や対話が増えるなかで、「その分野の専門性」を高めていくことが、より力強く当事者の支えになる一方で、時として「支援の常識」という壁にぶつかり、「二生活者としての相手に向き合う」という前述したコミュニケーションが取りづらくなっていく、そのような支援・ケア従事者本人の語りや状況に対しても、モヤモヤとした関心を高めてきたのだ。

こうした現場に関わり始めた当初は、当事者の方々が表現活動を通じてご自身の類い稀な才能や可能性を社会に開いていくプロセスに関心があったのだけど、いつしか活動を通じて支援・ケア従事者が「真の支援」ってなに?と悩み揺らぎながら、「福祉」や「医療」や「看護」といった分野の外にその答えを求めつつ新たな「支援者」へと生まれ変わってゆくプロセスにこそ、一層深い関心を持つようになったのだ。

さてさて。前回までは、主に知的障がいのある人たちの地域福祉に取り組みなから、障がいのある人たちの一部が、とてつもない表現衝動から見たこともない造形物を生み出していくことに着目し、やや強引にまとめるなら「芸術文化をきっかけにした、障がいの地域福祉の実現」に奔走してきた、滋賀県の社会福祉法人グローの取り組みや、その象徴としてのポーターズ・アートミュージアムNOMAの活動に触れてきた。

そして今回からは、看護の世界に目を向けてみたい（この連載サイトの常連読者の方々、お待たせしました!）。とは言っても僕の場合は、もともと「障がいてなに?」ということが関心の根っこにあったので、障害福祉領域と比較的隣接しやすい「精神看護」という分野における、看護師たちの「超支援?」的事例を紹介していこう。なお、ここでは客観的な視点で描くよりも一関係者（NPOの理事）として微力ながら奔走してきた僕の立場ゆえに見えること、語れることをできるだけ丁寧に描いていきたい。

「カフェ・こいま」という場

大阪は堺市の香ヶ丘町。南海電鉄浅香山駅前の商店街の一面に、二〇一五年十二月、あるカフェが立ち上がった。名前は「カフェ・こいま」。十坪ほどの店内は清潔感のある白い内装で、奥では日々、店主たちが来客や飲食の準備をしている。メニューをみれば、珈琲やトースト、ホットサンドや日替わり定食など。ときに自家製の蕎麦寿司や近所に住む留学生がつくる地元料理なども食べられたり。

店内では、向かいにあるスーパードの買い物帰りに立ち寄り寄るご老人や、近所でスナックを経営する常連さん、すぐ近くにある関西大学堺キャンパスの教員や学生などがお茶を飲み、店主たちとの会話に花を咲かせている。そしてその隣には古着やアクセサリーや古本などがところ狭しとズラリ。そこはリサイクルショップ・コーナーだ。さらに商店街の通りを挟んだ向かい側には「おめでたい」という不思議な名前が縫われたタペストリーが掛けられているスペースも。

カフェの倍くらい広い広さはあるここでは、何人かの男性たちが古着の布を裂いたり、なにやらゆったりと作業をしている様子。首輪をした一匹の猫がいて、カフェ・スペースと作業スペースをスタッフに連れられ行き来しながら、ここに集うみんなに癒しと元気を与えているようだ（猫ご本人様は飄々としてるけど）。

さて、これらの場を運営するのはNPO法人kokoi maだ（二〇一五年十一月設立。法人格認証二〇一六年三月）。運営を担う主要理事は、精神科病棟に勤務してきた看護師たち。代表理事でカフェ・こいま初代店主で、現在は就労スペース「おめでたい」の所長を務める小川貞子さんは、二〇一五年春まで徒歩十分圏内にある浅香山病院の看護部長兼副院長を務めてきた、勤続年数三十五年のベテラン



生後二カ月の頃にカフェ・こいまへやってきた、ふくまる。小川さんと毎日車で通勤している。



カフェ・こいま、くつろぎの風景。浅香山病院に入院する精神障がいのある患者と看護師たちが、珈琲を飲んで語り合う。

看護師である。

浅香山病院は、とりわけ精神科医療が充実していることで知られ、小川さんの専門も精神科看護だ。多くの患者たちの看護に精力的に取り組んできた彼女だが、六一歳で希望退職し、このカフェの経営に乗り出している。そして副代表理事で現在のカフェ店主を務める廣田安希子さんも、小川さんのもとで同病院に二四年間勤めてきた。彼女は当初、看護師とカフェ運営の二足のわらじ状態だったが、二〇一七年三月に病院を退職。また、もうひとりの副代表理事 北村素美恵さんは病院での勤務を継続しながら、さまざまなカタチでNPOの運営に携わっている。未知なるチャレンジへと彼女たちを駆り立てた出来事の数々は、この連載で数回に分けて伝えていくつもりだが、端的には「長期入院している慢性期の精神障がい患者を、いかにして地域での生活につなげるか」、このテーマを突き詰めた結果が、現在の「転身」に結びついていることは間違いない。

ここでNPOの設立趣旨を確認してみたい。

主に日常生活に手助けを必要とする精神障がい者に対して、地域のなかに居場所を提供し、同時に地域社会を精神障がい者にとってより住みやすい場所にしていくための事業を行い、社会的弱者である高齢者、子ども、障がい者などすべての人々が健やかに暮らせる地域社会づくりと福祉の増進に寄与すること

(NPO法人kokoiまパンフレットより抜粋)

ここにある「地域のなかに居場所を提供」については、まさにコミュニティ・カフェの運営を通じて、その理念と役割を担おうとしている。しかしそこに留まらず、居場所を見つけたその先には「地域社会を精神障がい者にとってより住みやすい場所にしていくための事業」として、実際に彼ら彼女らが病院を退院し、この浅香山周辺エリアで家を借りて「住む」に至るまでを目標んできたのだ。でも、一人暮らしを始めるにも、長年の入院生活のなかで生活に必要な家事、調理、買い物などが満足にできない人たちが大半だ。自立生活を始める準備段階から失敗も含めて徐々に実践できる現場がないと「いきなり」

は難しい。また、グループホームなどを地域に立ち上げ、彼ら彼女らが共同生活をするような道筋を描くにも「精神障がい者の人たちが住んでいる家」という存在は、悲しいかな地域住民にとって必ずしもすんなり受け入れられるものではない。

そういった数々の課題、厳しい世間のまなざしに向き合いながら、地域住民との信頼関係を段階的に構築するプラットフォームにもなりえる場として「看護師が運営する地域に開かれたコミュニティ・カフェ」としてのカフェ・ここいまを先行的に立ち上げた、というわけだ。

現場の声から見えてくる、居場所づくりのプロセス

立ち上げから約2年を迎えるこの二〇一七年十二月の執筆時現在。現場に張り付いて運営をしているわけではない僕の立場から見ても、訪れる客層や事業運営における広がりや変化はめまぐるしい。少しカフェ開設初期のkokoiまのFacebookページの投稿（小川さんと廣田さんが投稿担当）を追ってみよう。

開店直前に訪れたココ今ニティーマンバーさん*¹が、いったん病院に戻ろうとして道に迷った。そこで、カフェ・ここいまの小川の名刺をまちの女性に示し、迷ったから連絡してとお願ひした。小川の携帯にその女性から連絡あり、駆け付ける。お礼を言い名を尋ねると「私の母も、徘徊でずいぶん皆さんのお世話になっているから、お互い様です」と。

そうなんだ！ 皆いろいろな事情の中で、他者を大切にしようという生きあっているんだ。お互いさまで言葉…なんて素敵なんだろう。メンバーは、困った時によく名刺を使うようになっていて、それもステキ（後略）

（オープンから約一カ月後の二〇一六年一月二十二日の投稿より）

カフェ・ここいまの料理人、土屋さん*²手作りのたねをみんなで包む「手作り餃子」を行いました。



NPO代表で就労スペース「おめだたい」所長の小川貞子さん（左）と「カフェ・ここいま」店長の廣田安希子さん（右）。カフェのドアにペイントを施す。

*1…平たくは長期入院患者の方々のことであるが、この言い回しについての厳密な意味は次回紹介。

ご近所の常連様や入院患者さんみんなでいただきました。自分の包んだものをいただいたり、人に焼いてあげたりと、ものすこくにぎやかで熱気ムンムンでした。

同じ日に雑魚寝館の亀井先生³がお見えになって、美味しい蕎麦寿司を頂戴しました。久しぶりにとくさんも来てくれて、うれしい一日でした。

(オープンから約一カ月後の二〇一六年一月三十日の投稿より)

身体治療から回復したNさんは、カメラマンの大西さんや、写真展⁴で出会った杉原さんたちに「自分は元気になりつつある」ことを、Facebookで紹介したいと。看板の前で、同伴してくれた師長さんと記念撮影。皆さん、ご安心ください。お元気です。

詩人のJさんは、一人で来店。「今日は調子がとてもいい」と。お店のお客さんの大きな声の雑談の中で、詩をつくっていました。詩は撮影したのですが、投稿の許可をいただくのを忘れてました。残念。病院を辞めてカフェを経営している小川を気遣う、優しい詩でした。写实的でありながら、思いやりにあふれ、私のことをこんなに思ってくれている人が病院の中に他にいるのだろうか。このような人を友人といわずして、だれを友人というのでしょうか。

(オープンから約一カ月半後の二〇一六年二月十一日の投稿より)

小川さんたちがケアにあたってきた長期入院患者たちは、普段から外出に慣れていないうえにご高齢の方も多く、病院から徒歩十分の距離にある場とはいえカフェに通うのは一苦労だ。それでも、病院とはまったく違う環境で、看護師や医者や家族とはまた違う地域住民や、ふらりと訪れる遠方の客、また近くの関西大学の学生たちとご飯を食べたり、珈琲を飲んだりしながら何気ない会話を紡いでゆく。

「病人」であることを前提に会話するのでなく、いろんな面を持ち合わせているなかで徐々に「その面」についても触れながら、困ったことやつらいことも語る。すると、カフェの常連になってきた地域住民

のそれぞれも、実は独居老人で日頃誰かとご飯を共にすることがなかったり、障害者手帳を持っているわけではないけれど、どこか生きづらさを抱えている若者だったり、留学したばかりで孤独を感じているアジアから来た学生だったり、この場でぐちゃぐちゃと本音を漏らしながら時に楽しく、時にしみみりと混じり合う。

これまでの入院生活では得られることのなかったこれらの体験は、患者にとってこのカフェに訪れる大きな動機となる。もちろん体調が悪いときは来られないし、気が乗らないときもある。でも、カフェ開設当初は病院勤めだった廣田さんや、病院に勤務しながらこいまを支える北村さんら数名の看護師たちも、「今日はこいまに行かないの？」と自然にアシストするなか、徐々に足が向くようになる。そうして一進一退を繰り返しながら、病院のなかでは「患者」という立場が強く働いてしまう状況から脱する「居場所」を、カフェで出会った具体的な〇〇さんとのつながりというカタチで獲得してゆくのだ。僕が定例で行なっている「暮らしと表現の私塾」の様子。長期入院患者さんとの出会いをきっかけに、地域住民も交えて。映画や文学や音楽を鑑賞して語り合う。

そして時が経つにつれて、Facebookには「理想の場づくり」に対する明確なメッセージも見られるようになる。

まちでつどう。

まちに出かける。まちから帰る(病院へ?)。

やがて、このまちで暮らそう・となる。

そんな仕掛けをもっともって考えたい。(中略)

(オープンから約五カ月後。小川さんの個人アカウントからの二〇一六年五月十六日の投稿)

うれしかったお話し二つ。

一つめ。

* 2…ボランティアで関わっておられる看護補助者。

* 3…近所で自宅水族館を営むこの地域のキーパーソン。以前から僕との個人的な付き合いもある。次回以降紹介。

* 4…大西暢夫氏とココ今二ティ写真展。詳細は次回。



近所で自宅水族館を営む地域のキーパーソン、亀井哲夫さん(左)と、ベトナムからの留学生トゥンさん(中央)。この日はトゥンさんによる「フォー」がテーブル。



僕が定例で行っている「暮らしと表現の私塾」の様子。長期入院患者さんとの出会いをきっかけに、地域住民も交えて。映画や文学や音楽を鑑賞して語り合う。

「就職が決まった」と報告に来てくれた人がいる。就職活動に踏み出せた要因の一つは「ここいまがあったから」

カフェ・ここいまのボランティア（バザーや出張販売のお手伝いなど）が、「自信につながったと思う」ですって！

二つめ。

「ここいまがあるから、ホント助かってる」という人がいる。

「二人でいると（いろんな事考えて）あかんねん」

ボーダレスな居場所づくりがビジョン。時々これでいいのかしらと妙な気分になることがある。それぞれの人にとっての居場所は、時にいろんなものが結合したよくわからないエネルギーとなってカフェを覆うことがある。けど、人の集まる場って、それが「普通」なんですよ、きつと。

こんな素敵な言葉を聴けたりするのだから、これでいいだろうと前を向く・・・笑。

（オープンから一年約四カ月後。小川さんの個人アカウントからの二〇一七年四月一八日の投稿）

……看護一筋、やむなく管理も一生懸命取り組んできたわたしとしては、地域、福祉は真っさらさらの領域。というのも変ですが、それぐらい、病院という箱の中でのみ私は生きていたということ。（自戒を込めて）

ということ、理事会をオープンにすることにしました。福祉の先輩たちを含め多彩な人たちからご意見をいただきたい！

そんな気持ちを察してか（笑）、いまままで交流があった人がさらにその友人の方を誘って下さったりで、なんと！二十名を超える方がご参加くださいました。

私としては、いくつかの迷いが晴れ、新たに工夫が必要なものも理解でき、まさに おめでたくおめでたいという名の就労B開所に向けて突っ走れるわ。……

（オープンから一年約七カ月後。小川さんの個人アカウントからの二〇一七年七月二十一日の投稿）

カフェ開設から二年。やがてリサイクルショップ「ゼロ」（もともと入院患者のひとりのある夢を叶えるために行ったバザーから派生）がオープンし、そして精神障がいのある人々の働く場として就労継続支援B型事業所「おめでたい」もオープンするなど、より多様なチャンネルで居場所づくりを行っていくことになる。

ここまで書いて改めて。まず小川さんたち看護師が「病院から地域に出てゆく」という相当な覚悟を要する決断をしたそもそのきっかけはなんだったのか。そして、地域に出たあとに、彼女たちの「支援」はどう変わり続けているのか。この「前夜のアクション」とそこから立ち上がったカフェ運営を手始めに継続中の「未来に向けたアクション」を織り交ぜながら追っていかうと思う。今回は、まず前夜のアクションとなった、長期入院患者と看護師とプロカメラマンによる類まれな写真プロジェクト「ココ今ニティ写真展」について、書いていこう。

（つづく）



「おめでたい」開設と同時期に始まった「オープン理事会」の様子。毎月開催し、障がいの当事者や看護師、福祉やまちづくり関係者や地域住民が混じり合って意見交換。

アサダワタル

一九七九年生まれ。大阪出身、東京在住。文化活動家・アーティスト。大阪市立大学都市研究プラザ博士研究員、サウンドメディアプロジェクト「@S@S」ディレクター。

音楽や言葉の創作、文化事業（アートプロジェクト）やワークショップの企画演出を通じて、障害福祉やまちづくりなどさまざまなフィールドで文化活動を展開。また実践と並行して

二〇一六年に滋賀県立大学大学院環境科学研究科にて博士号（学術）取得。

著作に「住み開き家から始めるコミュニティ（筑摩書房）」「コミュニティ難民のススメ 表現と仕事のハザマにあること」（木楽舎）、「表現のたね」（モ・クシユ）、「リアル・ブリュットアート日本」（編著、平凡社）、「ひとびとの精神史第9巻 震災前後—二〇〇〇年以降」（共著、岩波書店）など多数。

これまで、数々のNPOや社会福祉法人と協同して、表現活動と支援（ケア）の関係性について実践と研究を重ねてきた。障害のある人々の表現をテーマにしたラジオ番組・KBS京都ラジオ「Grow 生きることが光になる」パーソナリティ、ボーダレス・アートミュージアムNOMA懇談会委員、NPO法人多様性と境界に関する対話と表現の研究所理事、NPO法人koiima理事などを歴任。ホームページ 2 級取得者。https://www.kototami.org





超支援?!

by アサダワタル

支援現場に
表現的なまなごしを
向けてみる。

第七回「病院から地域へ。精神看護と 地域づくりのハザマから見えること」その2

—「ココ今ニティー写真展」が切り開いた
「ケア観」の揺らぎと「地域」への回路—



「カフェ・ここいま」近くにある関西大学堺キャンパスで開催された「ココ今ニティー写真展」の様子（2016年6月撮影）

精神科病棟に入院している患者さんたちが「顔出し・名前出し」で被写体として、また企画運営者として会場に登場する写真展。それはありのままの自分たちと社会との間にある、見えない境界線を自身の力で超えていこうとする活動の第一歩でした。

アサダさんはそれが、展覧会をプロデュースした小川貞子さんにとって「病院の中で固定していた〈看護師/患者（ケアする者/ケアされる者）〉という関係性を微妙にズラし、看護師たちの新たな（広義の）〈ケア〉の回路を開いた」体験だったのは間違いないだろうと述べられています。

写真展を通して、見違えるほど元気になって力がでてくる患者さんたちを目の当たりにした小川さんは、

しかし、いやむしろそのせいであるジレンマを感じるようになります。どれだけ素晴らしい「場づくり」を行っても、それは入院中の患者さんたちが日常的に社会とつながっていくための拠点とはなり得ない。本当に必要とするのは、彼ら・彼女らが生きる同じ地域で暮らす人々と時間を共有できる日々の「居場所」なのだ。

こうした真摯な洞察が、看護部長の小川さんやその部下だった廣田安希子さんに、自分たちを病院という「ハコ」から飛び出させる決心として結実していきます。今回の記事ではそうした彼女たちの戸惑いや苦悩といった心の動きがよくとらえられています。—— 今回の視点（編集部）

日本看護協会出版会

大阪は堺市の香ヶ丘町。南海電鉄浅香山駅前の商店街の一角で運営されるコミュニティカフェ「カフェ・ここいま」。前回お伝えしたとおり、ここは近隣の浅香山病院の精神科病棟に長年勤めてきたベテラン看護師たちが中心になって運営される、地域の不思議な「居場所」だ。

二〇一五年十二月の立ち上げ当初から、運営を担うNPO法人kokoiimaの理事の一人として、僕も企画や運営に関わってきたけど、この二年半近くのなかで、その「場の可能性」は日に日に高まり、多様に広がっている。浅香山病院に長期入院する患者さんをはじめ、その客層は徐々に地域住民や商店街関係者、福祉やまちづくりを学ぶ学生や教員、そして地域に開かれたケアの実践に触れたいと思う遠方からもやってくる看護師や福祉関係者、そして僕のようなケアの現場に関心を寄せる文化関係者なども。こうして、カフェ・ここいまは徐々に成長し、リユースショップ「ゼロ」や、就労継続支援B型事業所「おめでたい」のオープン、さらには商店街活性化のためのイベントの中枢を担うなど、「精神看護と地域づくりのハザマ」を縫うように歩みを進めてきた。

病院勤務の看護師がその「ハコ」を出て、いわゆる訪問看護師というわけでもなく、地域にカフェを開き、まちの人たちとあれやこれやとイベントを仕掛けていく。kokoiima代表理事の小川貞子さんや、理事でカフェ店長の廣田安希子さんたち看護師がその覚悟を決めるにはさまざまなプロセスがあっただろうが、その大きなきっかけとなった「ココ今ニティー写真展」について、今回は書いていこう。

被写体のナラティブ（語り）が魅了する「ココ今ニティー写真展」

浅香山病院では、精神科病棟に長期入院する患者さんたちが被写体となる写真展がたびたび開催されてきた。きっかけは、二〇一二年に写真家の大西暢夫さんが雑誌『精神科看護』（精神科看護出版）のグラビア連載のため病院に訪れたことだ。

大西さんが、患者さん個々人と撮影を通じて関係性を築き上げていくなかで、連載では掲載しきれないほどたくさんの方の魅力的な写真が誕生。当時、浅香山病院の副院長兼看護部長だった小川さんは「彼ら彼女らと現場で一緒に生活し、ケアしている立場としては、私たちのケアを提供する時にみるメンバー



二〇一五年八月に森ノ宮医療大学で開催された「ココ今ニティー写真展」の様子（右）とそのチラシ（左）

さんの笑顔と、カメラを通して得られる笑顔とが違うと感じ」*1た。

「写真展をしてもっと多くの人に観てもらいたい」という小川さんの提案に、患者たちは自然に乗りながら、やがては一緒に企画をし、ポスターをつくり……と徐々に看護師と患者という立場を越えて、大西さんはじめ雑誌編集者や精神看護学の教員など、外部の人々も巻き込みながら写真展ができて上がった。これが「ココ今ニティー写真展」のはじまりだ。ちなみに、「ココ今ニティー」の「ココ」は「この場」や「ここに居る人たち」、「今」は病院のある地名・堺市今池町の「今」と現在の「今」、「ニティー」は「コミュニティ」の語呂あわせ。

浅香山病院の院内でスタートしたこの取り組みは、姉妹系列の茨木病院や森ノ宮医療大学のオープンキャンパスでの開催へと広がり、二〇一五年秋にはグランキューブ大阪で開催された第四十六回日本看護学会の精神看護学術集会でも展示されるなど、全国の精神看護の専門家から注目される存在となっていった。

改めてこの取り組みが注目されるポイントを二つ挙げたい。まず一つ目。それは、患者さんたちが被写体であることだけにとどまらず、展示会場で自らの写真の横に座り、撮影時に思ったことや自身の半生、そして夢について語り出す「ナラティブ（語り）写真展」であるということ。そして二つ目。この展覧会の企画自体に患者さんたちが主体的にかかわり、名刺まで制作して営業活動Ⅱ「地域参加」するという点だ。

この二つの特徴を通じて、看護師と患者と写真家という関係性が、同じ志——写真をもっと多くの人に観てもらいたい。院内にとどまらぬとあって、さまざまな人と出会いたい——のもとで「メンバー」として編み直されてゆく。ここでは過去の展覧会でのいくつかメンバーの「ナラティブ」をつまんでみたい。

まずは、二〇一五年七月、森ノ宮医療大学にて開催された写真展での、田村正敏さん（次ページ右の写真：右から三人目）による語りの風景から。彼が被写体となっている写真には以下のキャプションが書かれていた。

—— 田村さんにとっての楽しみは？

やっぱり、ローンやな

おやつ買うのが楽しみ。タバコ以外で買うもの。

—— 田村さんが一番大切なものは？

やっぱりバックやな。三、〇〇〇円から五、〇〇〇円したから。

—— 田村さんの好きな人は？

やっぱり自分の母親やな。

その次は大西さんやな。

そして次は師長、永江師長さん。

—— 田村さんにとって「ココ今ニティー」は何ですか？
くつろぎです。

次は二〇一五年七月森ノ宮医療大学（左の写真）と二〇一五年九月グランキューブ大阪（中央の写真）にて開催された写真展での、益田敏子さんによる語りの風景。以下はキャプション。

お部屋から出てきたところを待ち構えていて、撮ったのかな？

大股に歩いているね。

女の子だからもう少し小股で歩くようにしないと恥ずかしいでしょう。

いろんな写真を一枚一枚見て歩くのもエンジョイではないでしょうか？

最後に二〇一五年九月、グランキューブ大阪にて開催された写真展での、治村正信さん（次ページ写真）

*1:二〇一七年二月十二日（日）に大津プリンスホテルで行われた、アサダ企画のトークセッション「福祉」に対する新しいまなざし（「アメニティプログラム21」内プログラム）での小川氏に発言より。



による解説風景。

楽しんでできることそれは自分の得意な
趣味、仕事、その他できること

人間一人では生きてゆけない

だから対立する

だから友達になる

そして、何か楽しむことを

さがす……でも

たいていが

していることだ……?!

また、メンバーが写真展を重ねてきたなかで出てきた感想を紹介しておきたい。以下、前述した益田敏子さんと治村正信さんの言葉を、二〇一五年六月に記録された手書き感想用紙から原文のまま書き起し、個人名の箇所は〇〇として表記したものを。

看護学生さんと話す機会を得ました

説明をしながら写真も見てもらいました

奥様でこの写真は覚えていきますよとやさしく云って下さった方も

いらっしゃいました

よく写真が撮れているねと写真をほめて下さった方もいました
全体的には好評だったように思いました

ご来場のみなさま方も今回は多かったように思いました

精神科のイメージが変わってくれたらいいなと思えました

—— 益田敏子

写真展にこられた方が、写真や詩に見つめられ、うれしかったです。

僕の写真好いばんエレベーターの前だったので、

少しさみしかったです。

だけと見に来てくれた方々に名刺交換をしたりしてほんとうに
たのしかったです。

アイスマルクティーや、アイスコーヒーもでよかったです。

昔おられた〇〇さんや〇〇さんにも出会えてよかったです。

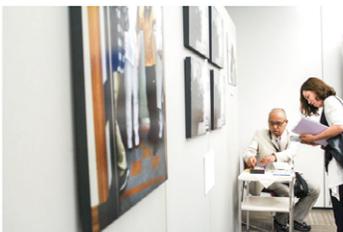
このココ今ニティ写真展が日本中に届くとよいと思います!!

—— 治村正信

写真展が開いた回路を「日常」にまでつなげるには……

ちなみに、僕がこのココ今ニティ写真展を観に行ってきたきっかけは、大西さんからの誘いだった。以前からこの連載でも取り上げてきたポダレス・アートミュージアムNO.1MAでの仕事を通じて大西さんとは親交を深めてきたが、この数年は事あるたびに「大阪の浅香山病院で面白い写真展やっているからぜひ遊びに来てよ」と誘ってくれていたのだ。それで二〇一四年六月に茨木病院にて開催された写真展に、僕がパーソナリティをやっているラジオ番組²⁾の取材も兼ねて足も運んだのだ。その際に大西さんが謙虚ながらも熱く語ってくれた内容は、今でも印象に残っている。

写真が何かの効果になったかどうかというのはあくまで後付けではあるけど、でも明らかに患者



* 2: KBS 京都 ラジオ「Glow 生きることが光になる」。詳しくは <https://www.kbs-kyoto.co.jp/radio/glow/> を参照。

さんたちが一枚の写真で相当変わった感じがしますね。

いまみんな僕の名前を呼んでくれてますよね。患者さんたちが覚えてくれて名前で呼び合うまでってなかなか時間がかかるんですよ。それはまあ病院に限らずですけど、そういう関係にまで行き、被写体とカメラマンなんですけどどこかでその域を超えたところで、「またご飯食べに来たで」ってね、そういう呼吸を受け入れてくれてる感じがします。

また、写真展を通じてこうやって外部と接触して名刺つくって営業に行ったりね、そういうアクションっていうのが、僕たちの生活とほとんど同じようになってきたことも大きな変化の一つだと思う。この取り組みが、もう一息外にできるべき。この写真の存在が珍しくない時代を僕も病院側も求めているはず。僕らは忘れてるんです。彼らの存在を本当に忘れてるので、もっと地域に出て行く意味があるだろうと模索しています。

(KBS 京都ラジオ「GI・w 生きることが光になる」第四十四回・二〇一四年八月一日放送での大西氏の発言)

この写真展が、病院のなかで固定していた「看護師／患者（ケアする者／ケアされる者）」という関係を絶妙にズラし、看護師たちに新たな（広義の）「ケア」の回路を開いたことは間違いないだろう。しかし、いや、それゆえか、小川さんたち看護師にとっては、写真展を進めていくうえで生まれる苦悩もあった。その一例として、メンバーの一人である東武司さんのことを挙げたい。茨木病院にて開催された写真展の東さんのキャプションにはこう書かれていた。

ちゃんと正装して 身なりを整えるだけじゃなく
もっと社会の一般教養と常識を身につけて
一日も早く
社会に貢献したい。

自分は一人じゃないと感じている。

夢は恋人の一人でもつくりたい。

この展覧会の際、すでに七〇歳を超えていた東さんは、長期入院が続くなか看護師たちが退院に向けたサポートを手厚くする前に、退院への待ちきれない思いが病状をさらに悪化させてしまったという。現在は、この写真のようにカメラの前に立つことができない状態になってしまった。小川さんは写真展活動が「地域参加」を促し、退院に向けた第一歩だとわかりつつも、「ゆっくりと写真展活動だけをやっているわけにもいかない。……ではどうすればいいのか」という問いを、東さんから学んだと話す。そして、小川さんは以下のような悩みを膨らませていった。

写真展活動をしてきて、東さんのような出来事や、他のメンバーにもいろんな出来事がありました。

この活動は、外部からの評価をたくさんいただきました。（たとえば）障害者に対するプライバシーについて考え直したとおっしゃってくださいました。大西さんの写真には力があって、写真を見ると楽しくなる、元気になる、力が出る、自分のケアを問い直せるとか、いろんなことを言ってくださいました。いずれも嬉しい言葉でした。

でも、私のなかでは、そんなふうに見える人を元気にする力のある写真、その写真に写るご自分、語り合えるご自分、たとえその力をもってしても、華やかな場所で展覧会を開催しても、患者さんが帰るのは精神科病棟のベッドなんです。四人部屋のベッド。誰も私にはそんなことを問わないけれど、自分の中で「これでいいのか」と問い始めて、大変苦しくなってきたんです。

(二〇一七年二月十二日(日)に大津プリンスホテルで行われた、アサダ企画のトークセッション「福祉が対する新しいまなざし」(「アメニティフォーラム21」内プログラム)での小川氏の発言)

そこで、小川さんはこの苦悩を乗り越えるために、病院を早期退職することを検討し、病院の外、つまり「地域」に軸足を置きながら自分のこれまでの経験を活かせる実践を模索し始める。でも、たった



二〇一四年六月の茨木病院にて開催された写真展での、東武司さん(右)による解説風景。

一人で何ができるだろうか……?!とすぐに行き詰まってしまふ。

そこで、長期入院患者が今後、地域に出ているような具体的なプランを練り、それをもとに、最初に相談に行ったのが、無謀にも(↑本人曰く!)元厚生労働省事務次官の村木厚子氏。そこで村木氏から紹介されたのが、滋賀県大津市の大津プリンスホテルで二十年以上にわたって毎年二月に開催されてきた障害福祉の一大シンポジウム「アミニティフォーラム」の存在だった。

村木さんは小川さんに「あそこに行けば、若くて面白くて、これまであなたが出会っていないようなタイプの支援者と会えるのではないか」と伝えたらしい。そこで、毎年このフォーラムの企画に関わってきた僕ともつながった。ちょうど担当したトークセッションが終わった直後、講師控え室に向かおうとする僕に小川さんは拙著『住み開き―家から始めるコミュニティ―』(筑摩書房)を手に持ちながら、「あなたに、私が考えていることを聞いてほしいの」と伝えてきた。落ち着いてはおられたがどこか切迫した空気も漂っていて、その勢いに良い意味で押された。それが小川さんと僕との出会いだった。

まずは院内で「別の居場所」を、そしてより「地域」へ……

ココ今ニティー写真展を契機に、小川さんたち看護師たちの「ケア・支援観」が揺るがされていくなか、二〇一五年三月に小川さんは浅香山病院を早期退職。そして、病院の一階にある長年使われてなかった十二畳ほどの部屋を、「病院と地域をつなぐコミュニティサロン」として再活用し、その運営を写真展のメンバーである患者と看護師たちが共同で担うことに。「ココ今ニティーサロン」と呼ばれたこの部屋には、玄関の窓や室内の壁にメンバーの写真が展示され、書籍や雑誌のほか、ちょっとした飲み物やお菓子も置かれていた。二〇一五年四月、初めてここに来たときに小川さんが僕に伝えたのは、以下のようだった。

この場所にとどまるときは出入りするか、できるだけ電話してほしいんです。そうしていただくと、メンバー(患者)さんが「はい、ココ今ニティー事務所です!」って電話を取られるでしょう。そして接待したり、伝言されたりするじゃないですか。そのことでメンバーさんに「役割」ができる。そして地域社会への関心が人とのコミュニケーションを介して高まっていくきっかけになるんです。

この発言からは、メンバーたちが写真展開催という「イベント」非日常」の活動のみならず、「日常」的にも社会の一員としての意識を持ち続けられるような機能を、このサロンに持たせたいという小川さんの思いが垣間見られる。かつ、個々のメンバーと写真展を通じてつながりができた僕のような外の人たちにとっても、これまでメンバーに会いに行く際は病棟へ「見舞い」のような形で訪問せざるをえなかったところが、このサロンができたことで、より気軽に立ち寄れるようになったのも間違いない。

ここは「院内」ではありながらも、病棟とは雰囲気異なる「別の居場所」として機能し、メンバーたちはここに来ては写真展の打ち合わせをしたり、何をしてもなくゆっくりくつろぐなど、各々の時間を過ごす。そして僕も、ここで音楽ワークショップをやらせてもらったり、打ち合わせに参加したりと定期的に通うようになった。

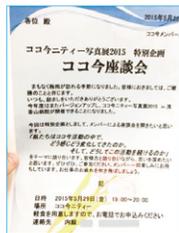
ココ今ニティーサロンができて二ヵ月ほど経った二〇一五年五月。写真展の運営に関わってきた看護師たち二十五名ほどが集まり、写真展のこれまでを振り返る座談会を開いた。写真展が患者の新たな側面と出会うきっかけになったこと、これまで院内ではできなかった会話やコミュニケーションが生まれたことなど、彼女たちの口からは好意的な意見がたくさんでた。

その一方で、こういった「非日常」的な取り組みがあることで患者の気分の変動が目立つようになり、買物や広報などで患者が地域へと出て行くことのサポートに難しさを感じる、といった声も聞かれた。つまり、これまで院内においては、あくまで「治療」や「ケア」といった観点を軸にしながら、医者や看護師と患者の関係が成されていたところに、かつて経験したことがなかったような「表現活動」が挟まることで、良くも悪くも新しい関係性やそれに伴う行為(非業務)が院内の「日常」にまで影響してくることに戸惑いもある、という意見だ。

患者である前に「ひとりの人」として地域とつながりながら生きていく。その一見当たり前のメッセージを一枚一枚の写真を通じて表現してゆく。そのことと院内での普段の「ケア体制」は、両立しにくい



ココ今ニティーサロンで、メンバーを対象に音楽ワークショップを行っている筆者(中央、二〇一五年秋)。



二〇一五年五月にココ今ニティーサロンで行われた写真展関係者座談会のチラシ。

公開 Web サイト「教養と看護」連載

http://jnapcdc.com/LA



支援現場に
表現的まなごしを
向けてみる。

超支援?!

by アサダワタル

第八回「病院から地域へ。精神看護と地域づくりのハザマから見えること」その3

— 私たちにとって「地域」とはどこか? —



「カフェ・ここいま」のある番ヶ丘商店街で2017年8月に開催された「夏だ!夜店だ!ときめくパルファン・ストリート」のようす。

精神科病棟に入院する患者との協働でプロデュースした写真展。その活動を通じて看護師と患者の間に引かれたボーダーラインが溶け出し、職業人としてだけでなく「個」の立場から「ケアとは何か」を考えざるをなくなった小川さんと廣田さんたち。

彼女らが、病院から地域へ飛び出す決心をしたあと、次に向き合ったのは「じゃあ、私たちの言う“地域”って一体ぜんたいどこなの？」という問いでした。そしてこの問いは、それまで「ココ今ハウス構想研究会」メンバーたちの意思共有の中で曖昧にされてきた、あ

る重要な迷いやブレを眼前に浮き上がらせていきます。

どのような取り組みでも多少なりに、どこかで「腹を決め」てブレイクスルーを起す必要が生じます。kokoimaのメンバーたちにその機会をもたらしたのは、多様な人々とのつながりと、かれらとの間で重ねた対話の数々でした。

そしてそれは足元の地域で、その時(いま)、その場(ここ)でこそ得られる価値に気づくことでもありました。 — 今回の視点(編集部)



アサダワタル
一九七九年生まれ。大阪出身・東京在住。文化活動家・アーティスト。大阪市立大学都市研究プラザ博士研究員、サウンドメディアアプロシエクト「0の0」のドレマー。音楽や言葉の創作、文化事業(アートプロジェクト)やワークショップの企画演出を通じて、障害福祉やまちづくりなどさまざまなフィールドで文化活動を展開。また実践と並行して二〇一六年に滋賀県立大学大学院環

境科学研究科にて博士号(学術)取得。
著作に「住み開き家から始めるコミュニティ」(筑摩書房)、「コミュニティ難民のススメ 表現と仕事のハザマにあること」(木楽舎)、「表現のたね」(モ・クシユラ)、「アール・ブリュットアート日本」(編著、平凡社)、「ひとびとの精神史第9巻 震災前後—二〇〇〇年以降」(共著、岩波書店)など多数。これまで、数々のNPOや社会福祉法人と協同して、表

現活動と支援(ケア)の関係性について実践と研究を重ねてきた。障害のある人々の表現をテーマにしたラジオ番組・KBS京都ラジオ「Grow」生かすことが光になる「パーソナリティ、ポードレス・アートミュージアムNOMA懇談会委員、NPO法人多様性と境界に関する対話と表現の研究所理事、NPO法人kokoima理事などを歴任。ホームヘルパー2級取得者。https://www.kokoim.org

ものなのだろうか。
確かにココ今ニティサロンという「別の居場所」ができたことで、院内でありながら「ケアする／ケアされる」の関係を宙吊りにしてもいい状況には一歩近づいただろう。しかし、小川さんたちとミーティングを重ねるなかで生まれた共通認識は、それでもやはりここは病院という体制のなかでの仮設的な場であり、メンバーにとっては本場の「地域」「社会」とはなり得ないだろう、ということだった。実際、物理的にも院内であることから、まだまだ外部からはハードルが高く、しかもあくまで「ココ今ニティ写真展のメンバーの事務所」という体裁で開かれているために、写真展を通じて知り合った方以外との偶然の出会いに恵まれる機会も多くなかった。
あらゆる前提や文脈を超えたところで、地域に出て行く。そしてその地域での生活を「日常」にする。そのためにはどうすればいいのか。このようなプロセスを経て、「カフェ・ここいま」という、看護師としてはこれまでにまったく経験したことのない「場づくり」へとつながってゆくのだ。

(つづく)

精神科病棟に長年勤めてきたベテラン看護師たちが中心となって運営する「NPO法人kokoiima」。代表理事の小川貞子さんの出会いについて、またその出会いのきっかけとなった「ココ今ニティイ写真展」については、前回で詳しく触れた。

長期入院患者が被写体となったプロ・カメラマンによる撮影をきっかけに、彼ら自身が看護師たちと協働して、これまで経験のない「写真展」の企画に取り組む。そのプロセスで「地域」に参加し、そして自身のライフヒストリーを写真の前で語る（ナラティブ）。この写真展では「看護師／患者」の間に引かれた「／（ボーダー）」は薄まり、写真展を企画する「メンバー」として両者の関係性がじわじわと編み直される。

しかし、こうした「ケア・支援観」の変容は同時に「揺らぎ」も伴う。地域に出て新たな出会いを獲得していくプロセスで、気持ちが必要になる患者の姿。写真展を通じて体験してゆく目の前の患者との「出会い直し」、あるいは「二人の固有の『私』としての互いの立場を超えた対話」へとその関わりが進展するにつれて「本当に必要なケアとは一体何なのか?」「このままのケア体制でいいのか?」といった戸惑いやためらいを実感してゆく看護師たち。

院内にコミュニティサロンをつくり、さまざまな試みを重ねて浅香山病院を早期退職した小川さんたちは、地域に「彼女ら彼女らのための家をつくらう!」という青写真を描き出す。今回は、その際の議論とアクションの中から悩みに悩んだ「じゃあ、私たちの言う『地域』って一体ぜんたいとこなの?」という話を中心に書いていきたい。

「地域」を探る迷路のような道のり

二〇一五年四月から同年十一月の「NPO法人kokoiima」設立までの数カ月は、浅香山病院の院内に設けられた「ココ今ニティイサロン」にて、毎月のように研究会が開かれていた。その名も「ココ今ハウス構想研究会」。目的は、写真展メンバー（患者）が退院を遂げ、地域生活を送れるような「家」をつくること。研究会委員は、小川さんと廣田安希子さんと北村素美恵さんを始めとした、現在NPO

法人の中核を担う看護師たちと、小川さんと旧知の小児科医や定年を迎えた元会社員、精神看護に携わる大学教員や建築畑の行政マン、アートとコミュニティづくりの立場の僕も含め、構成された。

当時の会議資料を振り返れば、ここでは、その「家」がグループホームのような形をとるのか、シェアハウスというニュアンスに近いのか、あるいはメンバー各々が個別の部屋を借りつつもみんなで集えるスペースを別途借りるのか、などが議論されていた。形態の違いこそあれ、ポイントとして浮かび上がってきたのは「住まい」でありながらも「集いの場」があり、かつその場が地域に開かれている（あるいは地域に働きかける）という点だ。

加えて、小川さんたち看護師からたびたび上がってきた意見は「『施設』ではない」という点だった。理想は、メンバーたちがその場で何かしらのアクションを起こすことで、地域住民も集まりたくなるような場……。かつ、あくまで「普通の家」であり「施設」ではない場。でもよくよく考えれば読者の皆さんもモヤモヤしてきくのではないだろうか? 「普通の家」って、そもそもどんな家? とか「じゃあ逆に『施設』ってどこからどこまでのことを言うの? グループホームであれば施設ではない?」とか。

「当たり前前」のようだけど、結構その線引きは難しい。あえて言えば「福祉」や「医療」の匂いのしない場が求められているということだろうけど、それはそれで「福祉」や「医療」に対する過度の関心の裏返しでもあるだろう。研究会は徐々に「ええい! 議論を重ねてばかりだと埒があかない!」となり、まずは堺市内のさまざまな地域や物件を当たりつつ、「走りながら考える」という方法をとるようになった。研究会資料のなから、以下、物件探しにまつわるメモを抜粋しよう。

二〇一五年五月五日（来栖・小川）

堺市堺堺線沿い／綾ノ町あたり、堺市榎木元町 都市の過疎化現象・・・ほんまにそうやわ。

二〇一五年五月九日（北村・廣田・小川）

大阪狭山市駅から徒歩一分スパーあり 築三六年文化住宅 一〇戸（ワンルーム）母屋付きで販売! 全部で一一六坪 面白い仕掛けができそう! 町としての喧騒感あり。条例でパチンコなし



アサダワタル

一九七九年生まれ。大阪出身・東京在住。文化活動家・アーティスト。大阪市立大学都市研究プラザ博士研究員、サウンドメディアプロジェクト「SOS」ドラーマー。

音楽や言葉の創作、文化事業（アートプロジェクト）やワークショップの企画演出を通じて、障害福祉やまちづくりなどさまざまなフィールドで文化活動を展開。また実践と並行して二〇一六年に滋賀県立大学大学院環境科学研究科にて博士号（学術）取得。

著作に『住み聞き家から始まる「コミュニティ」(筑摩書房)』、『コミュニティ難民のススメ 表現と仕事』、『表現のたね』(モ・クチュラ)、『アール・ブリュットアート日本』(編著、平凡社)、『ひとびとの精神史第9巻 震災前後二〇〇〇年以降』(共著、岩波書店) など多数。

これまで、数々のNPOや社会福祉法人と協同して、表現活動と支援(ケア)の関係性について実践と研究を重ねてきた。障害のある人々の表現をテーマにしたラジオ番組・KBS京都ラジオ「GLOW 生きることが光になる」パーソナリティ、ボーダレス・アートミュージアムNONOMA 懇談会委員、NPO法人多様性と境界に関する対話と表現の研究所理事、NPO法人kokoiima 理事などを歴任。ホームページ取得者。 <https://www.koioima.org>

二〇一五年五月二日（廣田・小川）
 南海高野線沿いを探索 寂れてる。商店街の店がつぶれ、更地が目立つ

〈物件内覧大阪狭山市駅歩三分〉

築二四年目 木造二階建て 改修がこまめにされていて、室内がきれいなデザイン性がある 利回り八・九〜十二・〇％・いい感じなのは百舌鳥八幡駅周囲 大阪狭山市駅周辺と同じような雰囲気として

〈団地と素敵な古民家風の空き家がいっぱい・・・金剛〉

人口 大阪狭山市 五万七千 富田林市 七万ちよっと。高齢化率は富田林市が三〜四％高い 介護保険のデイクア、施設がごろごろできてきている

これらのメモを振り返ってわかること。それは当時の僕たちは「物件」や「地域」を見る視点がちやんと定まっていなかったという点だ。長期入院経験のある精神障がい者が地域で自立した生活を営むような住居モデルがほぼ存在しない中で、これらの背景にとって必要となる「物件」とは？そしてその住生活の土壌となる彼女らが真に暮らしやすい「地域」とは？それは一体どんなものなのだろう。このあたりの深い議論になかなか至れないまま、さまざまな方々のアドバイスをいただく旅へ。

例えば、岡山市内で精神障がいがあるために住居が見つけられない人たちの入居支援を行っている、阪井土地開発株式会社 阪井ひとみさんに会いに行く。阪井さんからは「こういった社会福祉的に大切なことだからこそ、持続可能なやりかた、つまり経営感覚を持った『事業』としてやるべきだ」という助言をいただいた。金銭的な計画もちゃんと立てていかないといけないわけだが……うーん、まだまだそこまで議論が……（苦笑）。

そして次につながったのが、大阪市阿倍野区昭和町で「まちの不動産屋さん」として活動する丸順不動産三代目社長の小山隆輝さんだ。小山さんは、昭和町エリアの長屋や古い建物のリノベーション・利

活用を通じて、デベロッパーが行う再開発とは別の方法で、地域に根ざしたまちづくりを積極的に行ってきた方である。

小山さんに会いに行った理由はふたつ。ひとつは前述した阪井ひとみさんとの対話からも彼の名前が挙がってきたこと。もうひとつは僕が以前から文化事業や執筆を通じて提唱して来た「住み開き」*1を、家を通じたまちづくり事例の一環として評価して下さっていた嬉しい縁から！また一方で彼は、知的障がい者向け生活訓練所として社会福祉法人への物件の貸与や、多機能型デイサービスを営みたいというNPO法人の誘致も手掛けられてきた。これは相談しない手はない。

僕からアポを取り、二〇一五年八月、小川さんと僕とで小山さんに会うために昭和町まで出向く。快く迎えて下さった彼に僕たちのビジョンと進捗を伝えた。対話を進めるうちに僕たちのとこに「住み開き」があり、同時にとこがまだ「ブレ」ているのが明らになってゆく。そのブレを端的に言えば、僕たちは本当に「地域」をしっかりと見てきたのだろうか？物件の入手という目先の目標だけに捕われていなかったのだろうか？ということだ。彼の助言は以下のようなものだった。

「地域」で活動するのであれば、物件よりも前に重要なのは、その地域の強力な支援者、バックボーンになってくれる人を探すこと。

このメッセージの背景にはさまざまな意図があるが、そのなかでもシビアな問題としては、精神障がい者が住まう家という存在が、今の日本の地域社会ではなかなか快く受け入れられないという、悲しく厳しい現実だ。だからこそ地域の中で理解者を見つけ関係性を築き、受け入れてもらえる地道な努力こそが、物件を取得する以前に必須なアクションであるのだ。

ましてや、まったく縁のない地域での活動ということであれば、なおのこと慎重さを求められるであろう。この助言は、まちづくり的な仕事にも関わってきた僕にとっても実に腑に落ちるものだった。さらに続いて、小山さんは僕たちにこう尋ねたのだ。

なぜ、浅香山病院の近くで考えないのか？



二〇一五年の春から夏にかけて、浅香山病院内の「ココ今」ティールームで開かれていた「ココ今」ハウス構想研究会の様子。

*1…筆者が二〇〇九年に提唱したソーシャルコンセプトで「自宅の一部を、自分の好きなことをきっかけに、他人や地域に無理なく少しだけ開く活動」のこと。もともとはアート活動の一環として実践し、広めたものだが、マスコミの影響などもあり、まちづくりや地域福祉の先進事例として注目されることが多くなった。詳しくは拙著「住み開き 家から始めるコミュニティ」（筑摩書房）参照。



「ココ今」ハウス構想研究会」で小川さんが作成したプロジェクト関係者相関図。医療・看護内外問わず、多様な背景を持った人たちがこの動きに賛同した。

「この問いかけは盲点だった……」と、言えればよかったのかもしれない。しかし、実はそうではなかった。その可能性があることは初めからわかっていた。にもかかわらず、僕たちは見て見ぬふりをしてきたのだ。小川さんは帰りの電車の中であまり落ち込んでいた様子だった。彼女は当時の心境をこうメモしている。

病院の近くは嫌だった。

長期入院者であるメンバーにとっては、病院が「地域」になっているのかもしれない。でも、そのことを受け入れることは「そこしか知らない（知り得ない）、そこしか選択できない」という事実を受け入れることになってしまう。と同時に、病院の近くでは、私たち（看護師）が・・・ワクワクできない。それは病院の影響力を期待して、病院の傘下で活動していると地域の方々から思われるのが嫌だからだと思う。病院とは連携しつつも、そこではできない新たな実践の可能性を探りたいだけに、そう思われながら活動するのはつらい。

小山さんには「病院の近くは古い文化住宅が多く、これだと思える物件がないと考えている」と答えてしまった。そう思っているのは嘘ではないが、本質ではなかった。本当はわかっていたのに、あの場では答えられなかった。

（資料「二〇一五・八・六臨時会議の結果」より、ニュアンスをとめつつ一部筆者が改稿して引用）

熟達の小山さんには、こちらの心中のモヤモヤがよく伝わったことであろう。「イメージ」で語らず、病院の周辺を実際にリサーチされてみては？皆さんの見方と不動産屋の見方では違うので、私も一緒に歩いてみていいですよ」とまで言って下さった。浅香山病院周辺エリアにどうしても関心を向けられなかった一方で、この地域であれば、外出や買い物などを通じて患者が地域に受け入れられてきた側面もある。もちろん看護師の存在も頼りにされているであろう。地域に根を下ろしてきた人たちが、信頼を得る活動を積み重ねた結果として「今」があるのであって、外からの参入で地域に根ざす活動がそう

そう安易にできるものではない。

小山さんの「なぜ病院の近くではダメなのか？」という率直な質問は、これらの意図を含めた極めて的を射た助言だったのだ。

「足元」で、まず「カフェ」から始めよう

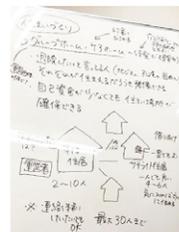
回り回って「足元」に辿り着いた僕たちは、ここから十数回に及ぶ浅香山病院近隣地域のリサーチを開始し、その結果、南海高野線浅香山駅の近くにある香ヶ丘商店街の立地の良さや、徒歩圏内で生活行動が完結できる利点なども改めて確認できた。しかし何にもまして大切だったのはこの地域で志を持って活動をしているキーパーソンとの出会いだっただけだ。

それは、亀井哲夫さんを始めた「雑魚寝館（ざこねかん）」の方々との出会いだ。雑魚寝館は住居の一部を淡水魚専門のミュージアム兼カフェとして運営しているスペースで、淡水魚をモチーフにしたアート作品の鑑賞や、鰻をふんだんに使ったさまざまな飲食も楽しめる場所として知られている。また、こうした取り組みを通じて浅香山界隈のまちづくりにも積極的に取り組んでいる。

そして実は、これはもう縁としか言いようがないのだが、その雑魚寝館の館長である亀井さんは、これまで僕が行ってきたまちづくり活動や前述の「住み開き」での縁で、以前からつながりがあったのだ！縁が縁を呼び、僕たちの思いに賛同してくれた亀井さんたちから、次に関西大学堺キャンパスの人間健康学部教員の安田忠典氏や、そこで学ぶ学生たちとの出会いへとつながってゆく。これらの出会いの連鎖が、浅香山を拠点とすることに「腹を決める」大きなきっかけとなっていった。

再び会議を重ねた僕たちは、まずは「家」をつくる前にメンバーと地域住民が交流できる「コミュニティカフェ」の運営からスタートし、そこから地域での信頼関係を強固なものにしたうえで、元来の目標としていたハウス構想を実現させよう、という結論に達した。

二〇一五年十一月、香ヶ丘商店街の築五〇年の物件二棟を賃借。向かって右側は元お菓子屋で一〇年間シャッターが閉まった状態。四畳半の和室がついているのが特徴だ。その左側に借りた建物はたこ焼



「ココ今ハウス構想研究会」の際の「ハウスのイメージメモ。当時の議論はなかなか混沌としていた……（苦笑）」



のちに「カフェ・こいま」となる香ヶ丘商店街の物件。二〇一五年秋の地域リサーチ当時。



病院から駆けつけたメンバーや、近くの大学生たちが行った壁拭き作業。



二〇一五年十一月十九日に浅香山公民館にて開かれた「NPO法人kokoi ma」設立総会の様子。

き屋さんで、かつての看板も残っていた。ここから僕たち自身の手による大改修が始まる。地元の大工さんの指導の下、まずは天井のペンキ塗り。そしてクロス張り、床張り、入口の戸がないため玄関をつくる、和室やトイレを改修する……などなど。

メンバーも病院から駆けつけ汗を流し、関大安田ゼミの学生さんたちにも協力をいただき、セルフビルドを通じて日に日に場が生まれ変わっていった。そしてさらには、浅香山病院からも院内で使われていない家具類などを提供してもらえることになった。こうしてカフェ・ここいまの場づくりのプロセスから、さまざまな共感と協働が生まれていったのだ。

そしてカフェ開設の運営母体となるNPO法人設立も同時平行で動かすことに。事業理念や目的、そしてその第一弾の手法であるコミュニティカフェの運営。諸々の方向性が定まってゆくにつれて、自ずと法人格の選択もNPO法人に落ち着いた。堺市市民協働課の相談コーナーを幾度か活用し、定款を整え、看護師仲間やつながりの生まれた地域住民に対して、会員への参加を呼びかけた。

そして二〇一五年一月一九日・一九時。堺市浅香山小学校内にある浅香山公民館にて、記念すべき「NPO法人kokoi ma」の設立総会を遂に開催。入会会員総数五七名（正会員四名、賛助会員九名、サポーター会員七名）、うち総会への出席会員数四名。僕も理事就任を兼ねて出席。地域に愛される公民館で多くの人たちに見守られる中、改めて「ここが、いま、から、始まるのだ」という意識をみんなで共有した。こうして、カフェ・ここいま事業を始めとした「NPO法人kokoi ma」がスタートを切ったのだ。

写真展メンバーたちの日常とさらなる「大チャレンジ」の予感……

カフェ・ここいまオープン後、メンバーたちは各々のペースで浅香山病院からカフェ・ここいまに通うようになった。例えば、文学や音楽が大好きな治村正信さんは「大切な場所、皆でつくったこのおみせ」

「ここいまを残しておく」と言いながら店前の路上中央にドカンと座り込み、黙々とお店の姿を写生。完成したスケッチに自らの詩を書き込む。そう、彼は詩人なのだ。僕もこれまで彼の幾つもの詩がたためられたノートを見せてもらってきた。

いつもベレー帽を被ったお洒落で物知りな西口賢一さんは、体調を崩し身体の治療を行っていたがようやく回復。カフェ・ここいまに遊びに来て、写真家の大西暢夫さんや知人の看護師さんたちに向け、kokoi maのフェイスブックを通じて「自分が元氣である」ことを発信することに。

おしとやかだけれどしっかりご自身の意見も述べる益田敏子さんは、カフェ・ここいままで正面扉のガラスにイラストを描いたり、ここいまの電話を使って携帯通話をかける練習をしたり。また、カフェ開設から五カ月ほど経った五月一七日、彼女の七三歳の誕生日²が開かれることになり、集まったメンバーが彼女を囲みケーキセットでお祝い会を開いた。そこで彼女がお祝いカードに書いた「七十三歳でやりたいこと」³が、この場に居合わせたメンバーたちの夢を膨らませることになる。

沖縄へ旅行してみたい 一生の内に

今回は、益田敏子さんのこの一言から始まった、前代未聞の「精神科病棟長期入院患者たちによる沖縄旅行珍道中」について、紹介していこう。

(つづく)



店の前で写生を始めた治村さんと詩の作品。



看板の前で同伴してくれた師長さんと記念撮影をする西口さん(右)。



前列左端が益田さん(後列右…小川貞子さん、中央…廣田安希子さん)。

○新聞



次の取り組みを話し合う「浅香山GENK」プロジェクトのメンバー。いつも和気あいあいだ＝堺市堺区香ヶ丘町1丁

堺・浅香山の団体に市の「大賞」

堺市堺区の浅香山地区を「元気にしたい」「活躍し入たちが結成した「浅香山GENK」プロジェクト」が、市「NPO活動大賞」を受賞した。プロジェクトの目標は、子育て世代、精神障害のある人や大学生ら多種多様な人々が集い、誰もが隔てなくつきあえる「ポーターレス（障壁なし）」の街だ。



昨年8月の夏祭り。普段は人通りが少ない浅香山駅前前の商店街がにぎわった＝「浅香山GENK」プロジェクト提供

夏祭り・フリマ 催し企画

浅香山駅がいわいは人口約8千人、ツツジの名所として知られる旧浅香山浄水場があり、10年に関西西大入間健康学部もできたが、全般的に高齢化が進み、空き店舗が目立つ。「何とかならないか」。メンバーたちが「こいま」で話し合っていて「夏祭りをしよう」との構想が膨らんだ。17年8月、浅香山の商店街で開いた夏祭りは、メンバーの雅もが驚く大盛況だった。関大の学生も参加した夜店には、十人を超す親子連れらにぎわった。

古家さんは、やる気がある仲間が集まった。それと本業にプラスになり、さらに多くの人が参画し、街の賑わいにつながる。そんな取り組みをもっと考えたい」と意気込む。（加戸靖史）

媒体：『朝日新聞』2019年1月28日号 発行：株式会社朝日新聞大阪本社 執筆：加戸靖史

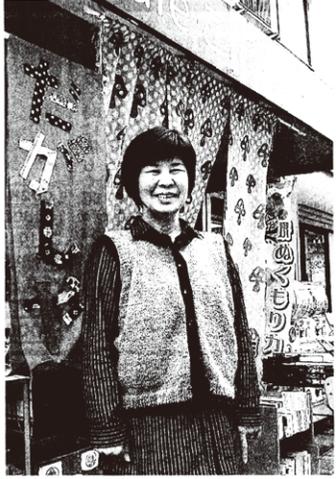
ポーターレス街に活気

堺市堺区の浅香山地区を「元気にしたい」「活躍し入たちが結成した「浅香山GENK」プロジェクト」が、市「NPO活動大賞」を受賞した。プロジェクトの目標は、子育て世代、精神障害のある人や大学生ら多種多様な人々が集い、誰もが隔てなくつきあえる「ポーターレス（障壁なし）」の街だ。

「隔て」のない街が目標

精神に障害がある人たちが、も、こに行けば安心できる。ほかの人と自然にふれあえる。そんな場所をつくりたいと夢見て、仲間たち「こいま」カフェを通じて、3年余り、浅香山駅近くに開いてきた。カフェを通じて、多くの地域の人たちとの輪が生まれた。「人と人のつながりが『面』として広がっていることを日々実感しています」とほほえむ。近隣の浅香山病院で40年近く精神科の看護師として働いた。阪機は、全国精神科病院で入院患者を取材してきた写真家、大西朝夫さんとの出会いだ。被写体になった長期入院患者らが「写真展を開きたい」と声を上げた。2012年以降、患者自身がパネルの側に立ち、見る人に自分を語る写真展を病院の内外で開いた。病院がある堺区今池町とコミュニティ（共同体）を掛け、「ここ今二丁目」と名付けた。初めて名刺を持ち、来場者と

NPO法人kokoimaの理事長 小川 貞子さん (65)



おがわ・さだこ 1954年、愛知県瀬戸市出身。愛知県立看護短大を卒業後、結婚、出産を経て、76年から浅香山病院（堺市）で勤務し、精神科の看護にあたる。副院長兼看護部長だった2015年に早期退職し、同年12月に「Cafeここいま」をオープン。16年に設立されたNPO法人kokoimaの理事長も務める。「ここいま」（072・220・5458）は午前11時～午後4時営業（月火曜休み）。

媒体：『朝日新聞』2019年2月24日「なにわびと」 発行：株式会社朝日新聞大阪本社 執筆：加戸靖史

なにわびと

地域とつながる場を

精神障がい者の暮らしを考える

kokoima 小川貞子さん講演

那覇市地域生活支援センター「なんくるは」のほろ、市与儀の市保健所で地域精神保健福祉教室「このころの健康講演会」を開催した。川貞子理事長の講演があった。



「障がいのある無いは関係ない。みんな街の人だ」と強調する小川貞子さん＝那覇市与儀の市保健所

映画は、大阪府の精神科病棟に長期入院する患者の一人が抱いた「沖縄へ旅行してみたい」という夢の実現を巡る、患者たちの心の揺れを描く。撮影された当時、小川さんはその病院の看護部長だった。

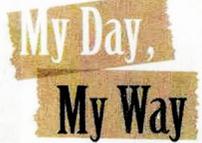
(中川廣江通信員)

媒体：『琉球新報』2020年1月17日号
発行：株式会社琉球新報社 執筆：中川廣江

地域一体で患者ケア

先日、理事を務めている大阪のNPO法人「kokoima」の会合に出席した。法人は2016年に設立。堺市堺区の香ヶ丘商店街で、コミュニティーカフェ「Café ここいま」などを運営する。近くにある浅香山病院と連携し、精神障害者が地域で生活する場をつくるのが目的だ。コロナ禍でも、住民と協力して様々な取り組みをしている。

アサダワタルの



をしてもらったりするという取り組みがその例だ。kokoimaの活動は、ケアを医療や福祉だけに頼らず、地域で行うことの大切さを体現している。コロナ禍で社会との関わりが薄れている人々のために、一人ひとりが思いやりを持ち、できることから支援を始めたい。

代表理事の小川貞子さんを始めスタッフは、浅香山病院の精神科に勤める看護師だった。看護師時代、長期の入院患者が地域生活へ移行できないという課題を抱えてきた。プロの写真家と出会い、患者たちの人となりを伝える写真展を開催したのを機に、病院を退職してNPO法人を設立した。

商店街に、カフェに続いてリユースショップ、手工芸品などをつくる作業所、ギャラリーと四つの活動拠点を設け、空き店



あさだ・わたる 文化活動家。1979年生まれ。芸術を軸に福祉やまちづくりの分野で多彩に活動。近著に「住み開き 増補版 もう一つのコミュニティづくり」(ちくま文庫)など。



あかちゃん
西川 言鶴
ほくもういっかい
あかちゃんになりたい
いっくんに
かわいいておもってもうええし
なげるから
（香川県善通寺市・
香川大教育学部付属幼稚園年中）

◇
兄の「いっくん」とケンカしたあとに。泣くのをがまんしたのかな。（平田俊子）

くらし 家庭

媒体：『読売新聞』2020年11月23日号「アサダワタルのMy Day, My Way」
発行：株式会社読売新聞大阪本社 執筆：アサダワタル

『認知症の医療とケア』第3回介護と医療の勉強会を開催



第3回「介護と医療の勉強会」では「認知症の医療とケア」をテーマに講演と支援者と介護家族による座談会を行った。

講演は堺市認知症疾患医療センターのある浅香山病院で現役の専門医として活躍している釜江先生にお願いした。「認知症になったらどうしよう」ではなく「認知症になっても大丈夫」な社会にするためには医療介護の制度だけでなくお節介士の力が必要だと、参加したお節介士への期待を込めてわかりやすい言葉で認知症に関する様々な疑問に答えその中には自らの足で調べた「駅から浅香山病院までの間にある相談窓口」の情報もあって認知症患者に対する医師としての深い思いが感じられた。

予防サプリや脳トレは効果があるか？との質問に明快に「完全な予防効果のあるものはないが、少なくとも認知症は防げる」との回答。脳血管性の認知症は高血圧や脳梗塞を予防することで、ならずにすむ。効果が高いとされているウォーキングや料理、脳への刺激を高めるようなこともあるので、予防に意味がないわけではない。

特別なことよりも日常生活でできることを続けることや、趣味を活かして旅行の計画表を作ることなども良い刺激だという。「それなら」と前のめりになったところで最後に「ぼけ封じの社寺」の一覧を示し「お参りの旅行計画を立てるのは予防効果がある」と言われて、受講者が慌ててスライドの写真を撮るという楽しい一幕もあった。



座談会では支援者として堺区でぬくもりカフェ（認知症カフェ）カフェここいまを運営する看護師の小川さん（左）と浅香山病院の相談員で精神保健福祉士の佐古さん（右）が事例も交え支援内容を紹介した。「何でも相談してください」と言う佐古さん。

介護家族として出席した吉田さんと連尾さんは体験から家族の葛藤と事前を知っていることの大切さを伝えた。



TOPICS

「カフェここいま」の魅力

座談会で紹介された『カフェここいま』は誰でも気軽に立ち寄れるカフェを作りたいと浅香山病院の元看護師の小川さんが開いたカフェだ。様々な障がいを持った人たちが病院の帰りにどこかでホッとしたいと思った時、地域の一人暮らしの人が誰かと一緒にご飯を食べたいと思った時に気を使わずに来れるようにと土日もお正月もお盆も開けている。お休みは月・火だけ。一番家族が集まる時に一人でなくて良いようにとの心遣い。ただ来るだけじゃなく手伝いもする。働きたい人が多ければ就労支援もすることになった。一番人気の店員は猫のふくまる君だ。



彼に会うためにやってくるお客も多い。つやつやの毛並みに癒されることは間違いない。ランチは日替わりで地元の野菜を使ったスープやシチューとご飯おかずで1コイン。病院の職員やご近所の人達の憩いの場で相席は当たり前。商店街の活気を取り戻そうと関西大学の学生の力を借りて祭りもすれば夜には専門職の溜まり場にもなる変幻自在のカフェなのだ。さきお節介士の見学でも好評だったのはまた行きたいと思わせる温かさがあるから。

今年もお正月を一緒に迎えようとかフェここいまは暖かくして待っていている。

（南海電車「浅香山」駅から徒歩3分）



発行：一般社団法人日本エルダーライフ協会

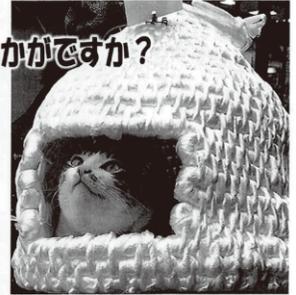
ELDER LIFE JOURNAL

発行：一般社団法人日本エルダーライフ協会

媒体：『ELDER LIFE JOURNAL』2019年1月号
発行：一般社団法人日本エルダーライフ協会 発行責任者：柴本美佐代

ふくまるからのお便り

『夢つぐら』はいかがですか？



「夢つぐら」宣伝中のボク

ボクは、ふくまる。男だ。自分で言うのもなんだが、ボクは働く猫だ。NPO法人 kokoima が運営する「おめでたい作業所」に、朝9時に所長と車通勤する。所長の仕事が終わると、富田に車で帰る。「ねこじゃらし」に掲載してもらうのは2回目である。地域保護猫として命救われ、「Café ここいま」の店員第1号となってCaféで働いていたが、昨年8月から、Café向かいの「おめでたい作業所」に異動した。「おめでたい」は、障がい者の人たちのための作業所なのだが、すごくオープンでいつでも「ふくちゃ〜ん、来て？」と町の人が入ってくる。ボクは失礼のないようにお相手する。結構忙しい。産まれたり、話しかけられたり…。ほとんどの人が「お〜ちようか、ちようか」と、ボクに赤ちゃん言葉で話しかける。不思議だ。ボクはもう2歳なの…。

ふくまるの仕事場 堺区香ヶ丘1丁の「おめでたい作業所」

ふくまるは、『夢つぐら』の広報部長

作業所を利用している人も、ボクがいるせいか猫好きが多い。一番猫好きなのが「猫つぐら」を作り始めた。「つぐら」とは、ワラやヒモなどで編んだ器。昔から飯びつを保温するために入れたり、赤ちゃんを入れたり、猫を入れたりして使っていた。「おめでたい作業所」で製作される「猫つぐら」は、「夢つぐら」と命名されている。ボクたちが良い夢を見られるように、との願いが込められている。「夢つぐら」は、「おめでたい」に通所している人が、毎日4時間ほど作成に取り組んでも、ひと月以上かかる。完成すると、「さあ〜ふくまるは気に入る

かな？」と声がかかり、ボクがチェックする。寝心地・におい・肌触りなどを、慎重にチェックする。ボクが気に入らないと作り直されたりする。ボクの責任は重い。ボクは思う。こんなに時間も（材料費も）かかるのだから、8900円は決して高くない。毎日つぐらに入っている「居心地いいぜ〜」と宣伝する。そう、ボクは「夢つぐら」の広報部長も任命されている。「夢つぐら」が売れると、大好きなおやつをふくまるの守護神と言われる人がご褒美に買ってくる。大好きだ！



ボク専用の「夢つぐら」



「夢つぐら」が売れて、焼かつおのご褒美！



2月、雪を見ているボク

ふくまるの願い

働くボクと『夢つぐら』を見に、「おめでたい作業所」に来てほしい。作品展示もされている。お気に入りの作品が見つかったら、あなたの可愛い猫のために買ってあげてほしい。

先月購入して下さった人は、「ウチの猫たちは奪い合っている」と報告してくれた。間違いない。ほわ〜として、安心できるもの。おまけに、ビニールひもで、硬く、丈夫に編み込んであるから安心できる。ボクが保証する。どうぞ、よろしくお願ひします。

〈お問い合わせ〉
堺市堺区香ヶ丘1-9-1 「おめでたい作業所」
☎ 072-220-5458
【定休日】月・火
【営業日】水〜日 【営業時間】10:00〜16:00

媒体：『ねこじゃらし』02018年6月号
発行：ねこじゃらしの会 執筆：小川貞子

○ 雑誌

連載

 建築
と
社会
を考える

NO.31

近隣住区の維持に 寄与する障害者福祉 「施設」

障害者の「働く」に着目して

大阪大学大学院工学研究科准教授

松原茂樹

1998年大阪大学卒業。2003年大阪大学大学院工学研究科建築工学専攻博士後期課程修了、博士(工学)。一級建築士。専門は建築計画、環境行動研究。主な著書に「まちの居場所まちの居場所をみつめる/つくる」(日本建築学会編、東洋書店、2011)、「利用者本位の建築デザイン事例でわかる住宅・地域施設・病院・学校」(日本建築学会編、彰国社、2017)、「福祉転用による建築・地域のリノベーション:成功事例で読みとく企画・設計・運営」(共著、学芸出版社、2018)。

現在我が国では「働き方改革」が進捗しており、みなさまさまざまな感情を伴いながら「働き方改革」に邁進していることでしよう。今回その働き方を取りあげが、健全者ではなく障害者の働き方について紹介する。障害者の働き方から近隣住区の課題解決となる一助があると考えている。

現在、近隣住区には数多くの課題があるとされている。そのなかでも買い物難民と言われるように徒歩圏に購買施設がなくなることとは大きな課題である。近くの商店街は廃れてしまっ、購買は週末に車でショッピングモールに出かけるという人もいるだろう。購買施設は消費としての利便性や経営の合理化・効率化が進み、近隣住区の購買施設は販売として成立することが難しくなっている。近隣住区における購買施設で障害者が「働く」ことには近隣住区の維持と障害者がふつうの生活を送ることの2つの点で大きな意味がある。

■障害者福祉と建築

まずは障害者福祉とその建築について紹介する。2013年施行の障害者総合支援法では日中に活動する(過ごす)場とグループホームといった夜間に過ごす場(住まいの場)を分けている。かつての入所施設のように日中活動の場と住まいの場が一体であることは現在でも「障害者支援施設」として存在するが、国は地域移行を進めており、今後建て替えはあっても増えることはない。地域移行とは、施設や病院で障害者が一定期間入所入院して、地域社会から隔離された「閉じられた生活」から退所や退院をし、地域社会のなかで住まいを持ち、健全者と同様のふつうの生活を送ることである。

日中に活動する事業として自立訓練、就労移行支援、就労継続支援A型、就労継続支援B型、生活介護などがある。就労移行支援が一般就労を目指す人の事業、就労継続支援A型は雇用契約を結び、支援を受けながら働くための訓練を受ける事業。就労継続支援B型は働くための訓練を受けるだけでなく創作活動も行う事業であり、雇用契約を結ばない。本人の希望もあるが一般的に上述の事業の順に障害者支援区分が重なる傾向にある。

障害者総合支援法は社会福祉法人、NPO法人や株式会社といった事業者が事業として障

害者にサービスを提供する仕組みである。逆に言えば障害者本人(や家族)が自分に合ったサービスを探す仕組みである。事業者は収益を確保する必要があり、特定の障害種別に特化して障害者に配慮した事業を行うことや、地域に不足しているサービスを障害者の就労支援事業として行うように地域の課題解決を担う事業を行っている。事業者によってさまざまな取り組みを日中活動の事業で行うことができ、日中活動の事業に多様性が生まれることとなった。

このように地域移行という社会の変化や制度の変化により従来の障害者福祉施設は事業を担う障害者福祉「施設」に容容していった。なお今回紹介する事例は地域の課題解決を担う事業である。

■障害者福祉「施設」の設計と計画

これまで障害者福祉施設は施設種別として建物と国・自治体によって定められた機能とが一对一に対応していた。極言すればそれに基づいて障害者福祉施設を設計するだけでよかった。障害者総合支援法の施行後、「障害者支援施設」のように一部例外もあるが、障害者福祉施設はその標準型としての建物と機能の一对一対応が崩れてしまった。

障害者福祉「施設」では利用者の障害特性や事業の内容によって求められる機能が異なる。さらに地域の課題解決を担う事業を行う場合その機能も異なる。そのため障害者福祉「施設」の設計は個別に機能を解いていく必要が生じた。たとえば筆者が見てきた事業を列挙すると、飲食店(パン、喫茶店、惣菜屋、レストラン他)、工場(洗濯工場、食品加工工場、機械工場)、購買店、農業など多岐にわたる。その上で、それぞれの障害(知的障害、自閉症・発達障害、精神障害、重度心身障害など)の障害特性に配慮した空間の要件も満たさなければならない。

従来の障害者福祉施設の建築計画ではあるひとつのモデルが存在していたが、上述の通り障害者総合支援法の下では施設の1つの型を示すことが困難であり、多様性を生み出すことができる建築計画が求められている。

それではこれより2つの事例を紹介する。両者とも近隣住区にある商店街の空き店舗を

活用している。かつての賑わいを取り戻せない商店街に社会福祉系の法人が障害者福祉「施設」を立ち上げた。

■事例1) みんなのマーケットるびなす

●高倉台の近隣センターの現状

みんなのマーケットるびなすは堺市の泉北ニュータウン高倉台の近隣センターの一角にある。泉北ニュータウンは2017年にまちびらき50年を迎えたニュータウンである。各住区は近隣住区の考えに基づいて近隣センターが設けられている。ご存じの通り近隣住区では徒歩圏の範囲を住区の基本単位とし、日常生活を送る上で必要な購買施設を近隣センターとして計画している。当初の計画では住民は日常的な買い物やさやかな住民同士のふれあいを近隣センターで行うことを想定していたが、近隣センターは当初の計画通り購買施設としての機能を十分に果たせざ寂しいところが多い。

みんなのマーケットるびなすは社会福祉法人ライフサポート協会が運営する障害者総合支援法の就労継続支援B型の事業であり、2015年にオープンしたスーパーマーケットである。この場所ではこれまで何度もいくつものスーパーマーケットの開店と閉店を繰り返してきた。その一方で住民からスーパーマーケットがなくなることに反対の声もあり、有料老人ホームの新築時には1階にスーパーマーケットが入ることとなったが、またしても閉店した。高倉台は一般企業によるビジネスとしてスーパーマーケットが成立しない場所であると言える。高倉台の高齢化率は30%を越えており、独居高齢者や要介護等の認定を受けている割合も20%を越えている。高齢者にとって近隣センターにスーパーマーケットがなくなることは死活問題であり、買い物難民に陥る可能性があった。

●みんなのマーケットるびなすの取り組み

そうした状況のなか、社会福祉法人ライフサポート協会は地元NPO法人などの協力を得て買い物弱者の支援と障害者の就労支援を目的として高倉台でスーパーマーケットを行うこととなった。居抜きで事業を始めたため前のスーパーマーケットが残っていた設備を使っている。また単に買い物で終わるのでは

なくここで購入した弁当などを食べて住民同交流できるスペースも設けている。

みんなのマーケットるびなすの特徴は大きく6つある。1つ目が食品や日用品の販売物は基本的に近くのスーパーマーケットの協力を得て、そのスーパーマーケットが仕入れた物を販売している。2つ目が惣菜品は有名料理店で腕を振るったシェフにレシピを頂戴し低価格で提供している。3つ目が新鮮な魚の漁師からその日とれた魚を仕入れて手頃な価格で提供していたが、現在はスタッフの知り合いの仲卸から仕入れられている。4つ目が泉北ニュータウンに近接する農園からスーパーマーケットの趣旨に賛同し、減農薬や低農薬・無農薬の野菜を配達してくれている。5つ目が同じ泉北ニュータウンの横塚台にある横塚台レストランからできたの弁当を仕入れられている。6つ目が配達も行っていることである。

エレベーターのない集合住宅に住む高齢者にとって重い荷物を運ぶことは困難で障害者とスタッフがともに配達を行っている。高齢者が多く買い物の支援が必要なこと、障害者が働く場であることを理由に多くの個人・団体からこれらの取り組みの協力が得られて販売が展開している。

イベントも定期的にいくつか行っており、マルシェ、子ども食堂改めみんなの食堂、夏祭りやハロウィンやイースターなど自治会、商店会やNPOなどと協力して取り組んでいる。みんなのマーケットるびなすができたことによって高倉台の近隣センターに新しい活動の展開ができた。

●忙しいスーパーマーケット

みんなのマーケットるびなすでの障害者の働き方をみていこう。現在10名ほどの障害者が「働いている。精神障害を抱える人や知的障害かつ自閉症を抱える人がそれぞれ5名ほどいる(毎月登録人数に変動がある)。精神障害の方は一般企業に勤めていたがその環境が合わず不調をきたした方もいる。

この場所でも度々スーパーマーケットが閉店してきたように、みんなのマーケットるびなすは日中多くの客で賑わう光景からほど遠く、しばらく客がやってくる程度である。しかしながらこの状況が比較的障害支援区分が重い障

害者にとって働きやすいものとなる。客が少ないのでスピードを求める必要がなく、たとえばゆっくりとレジ打ちをすることができ、商品特性や希望に応じて役割分担を決めているので単純な作業を繰り返す作業を担う人もいる。これらの作業を行う上でコミュニケーションの方法や物理的環境の配慮が何より必要であり、スタッフは彼らの支援・指導を行いつつスーパーマーケットとしての業務も担っている。

障害を抱える人にとってこうしたことを何年も積み重ねることで自信をもち、次のステップに進むことを目指している。



写真1 高倉台の近隣センター全景



写真2 みんなのマーケットるびなす全景



写真3 店内の様子



写真4 店内の交流スペース

■事例2) Cafeここいま

●浅香山地区の特徴

南海電鉄高野線「浅香山」駅から徒歩5分足らずのところにCafeここいま・リサイクルショップぜろ、多機能事業所おめでたいがある。これらは小さな商店街の駅側からの「入り口」に位置し、床面積30㎡程度の空き店舗を活用している。これらを運営するNPO法人kokoimaは近隣の浅香山病院の看護部長であった看護師が立ち上げた法人である。

浅香山病院の精神科医療は西日本で有数の歴史と規模を持っていて、1970年代初頭から精神障害者の地域移行を進めていき、現在多くの精神障害を抱える／抱えている人が浅香山地区の文化住宅などに住んでいる。浅香山地区は商店街に隣接して多くの文化住宅がある一方で、その外側には住宅地として開発されたエリアがあり規模の大きい戸建て住宅がある。大きく2つの住まいのタイプが混在している。

●精神障害を抱える人の地域移行

地域移行とは、施設や病院で障害者や患者が一定期間入所入院して、地域社会から隔離された「閉じられた生活」から退所や退院をして、地域社会のなかで住まいを持ち、健常者と同様のふつうの生活を送ることである。日本では他国に比べ精神病院の入院期間が長いことや病床数が多いという事実があり、地域移行が遅れていると言われている。たとえばイタリアでは1978年に通称「バザリア法」⁽¹⁾によって精神病院を廃止し地域社会で生活している。日本でも精神障害を抱える人が地域社会で普通の生活を送る地域移行が少しずつ進んでいるが、まだ途上であり今後も進展が望まれる状況である。

入院患者の中には10年や20年も長期に入院している人がいる。炊事・洗濯など家事を身につけずに入院した人がいきなり地域生活で1人暮らしを始めると満足に家事ができない。また入院前と社会が変わっていて、たとえば今から10年前をさかのぼるとスマホが普及した時期であり、20年前をさかのぼるとインターネットが普及した時期である。スマホはおろかインターネットもしたことがない人が今の社会に適応するには多くの困難が待ち受けることが予想される。長期入院していた人

にとっていきなり地域生活を始めることは難しく、住まいや就労だけでなくさまざまな面で支援を必要としている。

●「ボーダレストアウン」に向けたまちづくり

NPO法人の代表は浅香山病院に勤めていたとき、各地の精神病院で患者の撮影をしていた写真家と出会ったことをきっかけに浅香山病院の入院患者とともに2012年にナラティブ写真展を病院で開催した。それを契機に精神障害を抱える人も社会の一員として地域で普通に生活し誰かの役に立ちたいという思いの実現に向けて、地域移行に向けての取り組みを開始した。他での写真展の開催や院内に患者やボランティアなどさまざまな人が集まるクラブ室のような事務所のオープンなど病院という枠の中で取り組めることを3年間行った。

その後代表は定年の前に退職して、NPO法人kokoimaを立ち上げて2015年12月にCafeここいまの取り組みを始めることとなった。カフェを始めた動機は、住まいの場や就労の場の提供ではなく、まずは精神障害を抱える人の地域の中での居場所となることを目指したことである。カフェで地域の人と日常的に関わることを端緒に精神障害を抱える人にとって住みやすい地域になることを目指している。

精神障害を抱える人が地域で暮らして行くにはさまざまな人の支えが不可欠であり、地域住民との関係を築く必要がある。さらにNPO法人kokoimaがユニークなことは、精神障害を抱える人だけでなく、誰にとっても暮らしやすい地域となることを目指していることである。NPO法人kokoimaのホームページをみると、その理念に「豊かな共生社会の実現を理念に、地域に開かれた事業運営に邁進し、精神障がい者のみならず、社会的弱者となりやすい高齢者、子ども、女性、その他の障がい者とその家族の方たちにとっても暮らしやすいまちづくりに、寄与したいと考えています」と記されていて、さらには「ボーダレストアウン」を謳っている⁽²⁾。

Cafeここいまは結局浅香山病院の近くの商店街の空き店舗を活用することになったが、ここに至る経緯に紆余曲折があった⁽³⁾。Cafeここいまがある商店街は元公設市場であった小さなスーパーマーケットと数軒のお店が営業しているだけの小さな商店街である。

しかしながらこのスーパーマーケットがなくとなると買い物難民に陥る高齢者もいて、小さい商店街ながら浅香山地区にとって不可欠な商店街である。

●精神障害を抱える人の仕事をつくる—Cafeここいまから、リサイクルショップぜろ、多機能事業所おめでたいの展開

2015年12月にオープンしたCafeここいまは精神障害を抱える人の居場所となることを目指してきた。一方で誰かの役に立ちたいという声を受け、代表は精神障害を抱える人ひとりひとりの希望や適正をもとに、地域にない仕事を作っていた。こうしてCafeここいまの隣の空き店舗にリサイクルショップぜろを2017年夏にオープンした。リサイクルショップぜろは障害者総合支援法の就労継続支援B型の事業であり、50代の男性が店長として働いている。商店街の近隣に高齢者が多く住み、家の物の処理に困っていることが多いようであり不要な物を引き取る機会に恵まれている。引き取りに行った物をクリーニングし安価で売り出すと近所の人が購入していく。こうして浅香山地区の人が使っていた物が再び浅香山地区のなかで循環していく。精神障害を抱える人が店長であることもあり、話しをしにくる精神障害を抱える人もいる。

また接客が丁寧ことから固定の客がいる。店長に任せられているので商品の管理など責任持って行い、徐々に働くことの自信を取り戻している。リサイクルショップぜろは浅香山地区の特徴と1人の精神障害を抱える人の性格をうまくマッチングすることに成功しているが、最低賃金を支払うまでに至っていないことが課題である。

さらに2017年夏にCafeここいまの向かいに就労継続支援B型事業と生活介護事業の複合である多機能事業所おめでたいを立ち上げたが、何か特定の仕事・作業を用意することなく、ここに登録してきた人に応じて仕事・作業をつくる方針であり、リサイクルショップぜろと同様に精神障害を抱える人ひとりひとりに仕事・作業を作っていた。現在利用している精神障害を抱える人に配慮し、心の状態が安定せず日々の障害の状態に応じて、自分のペースでゆっくりと作業ができるように一人で作る仕事を用意している。ある人

は猫つぐらを作り、別の人はハンガーにさまざまな布を巻いて「滑らないハンガー」の製作に取り組んでいる。さらにはある人はさおり織りで織物を作っている。

●Cafeここいまの利用状況

2015年12月にオープンしたCafeここいまは早速スーパーマーケットの隣りにコーヒーを飲み立ち寄る人や、昼食を食べに来る人など地域住民にも受け入れられた。地域に住む精神障害を抱える人だけでなく、浅香山病院に入院している人が病院の許可を得て日課としてCafeここいまにやってくる。そこで出会った人同士、スタッフの気配りにより言葉が交わされる。またオープンしてしばらく経ってからの精神障害を抱える人がコーヒーを入れることや給仕をする仕事に取り組み始め、Cafeここいまは障害者福祉事業を行う障害者福祉「施設」にもなった。

昨年度研究室の学生が卒業論文としてCafeここいまで行動観察調査を実施した⁽⁴⁾。会話の内容をみると、看護系の会話としてカフェに訪れた人（近隣の住民が多い）の健康相談やメンバー（おめでたいなどで「働く」精神障害を抱える人）の健康相談・生活相談（地域でどう生活していけばいいのか、どのような制度を利用できるのか）が多い（図1）。スタッフは着飾りでもあるので精神障害を抱える人だけでなく近隣の高齢者にとってもよい相談相手となっていると言える。また精神障害を抱える人からカフェに訪れた人に話しかけることは少ないが、スタッフの気配りもありカフェに訪れた人が精神障害を抱える人に話しかける機会が見られた。

またスタッフ、理事や住民などにインタビュー調査を行った。2015年12月のオープンから2018年秋までの変化をみると、「街の人と一緒に様々な問題乗り越えている」という発言や「色々な人が関わるようになり助け合いながら今のここいまを作り上げている」という発言がみられた。

このようにCafeここいまは当初の目的通りに精神障害を抱える人と住民との関係をつくる役割を担っている。さらに誰が来てもしよいコミュニティカフェを看護師が運営することで、高齢者が気軽に相談できるインフォーマルな場という役割も担っている。Cafeここいま

は障害者福祉「施設」という枠を越えて近隣住区のコミュニティ施設でもあり、一言で説明しにくい場となっている。

■まとめ

障害者福祉「施設」が近隣住区の商店街に生まれたことで商店街に新たな展開が生まれた事例を紹介した。大阪に限らず全国各地のニュータウンや郊外住宅地でも同じような実践が見られる。住民だけが近隣住区の活性化を担うだけでなく障害者も「働く」ことを通じて十分に貢献できる。障害者自身にとって「働く」ことを通じて住民から「ありがとう」というシンプルな言葉をもらうことは「働く」ことの自信にもなる。何より地域でふつうの生活を送る足がかりになる。

本稿で取りあげた障害者の多様な「働く」姿のように障害者は自分のペースで「働く」ことができれば十分に能力を発揮できる。本稿では詳しく紹介できなかったが、ゆっくりに慣れていくほどの丁寧さ・正確さという価値、あるいはその人がそこにいるから買ってくるという評価も必要であろう。障害者が能力を発揮するために障害者ひとりひとりの個性や障害特性を把握し、物理的・人的な環境を整えることが必要である。

国は地域包括ケアシステムの面で「自助・互助・共助・公助」を実践することを求めている。近所の人がお互いに助け合う「互助」において、日常的に人と人とが顔を合わせる機会を提供する近隣住区のお店は購買以上の価値がある。

近隣住区の障害者福祉「施設」で障害者が「働く」姿を見ていると、「働く」ことや「互助」の基本に気づかされる。

(まつばら しげき)



写真5 商店街全景：写真手前左が多機能事業所おめでたい、手前右がCafeここいま



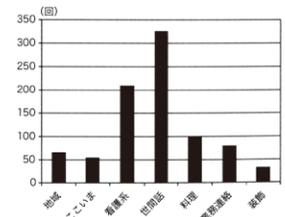
写真6 Caféここいまとせろの全景



写真7 Caféここいまの室内



写真8 夏祭り：商店街店主、地域住民。近くの関西大学の学生が店を出す



5日間(2018年10月17日～21日)の合計
図1 Caféここいまの会話内容

注釈

- 1) イタリアで精神病院を廃止し、医療等は地域精神保健サービス機関で行う。通称はこの運動を牽引した精神科医にちなむ。
- 2) <http://kokoima.com/index.html>
- 3) <https://medium.com/fraze-craze/kokoima実践レポート-精神看護と居場所づくりのハザマで-第四回いざー地域へ-82268493196>
- 4) 豊原大瑛、看護師が作るコミュニティの「つながり」に関する研究—堺市浅香山にあるコミュニティカフェを観て—、平成30年度大阪大学工学部卒業論文

写真館

223

田原隆さん(64)

撮影場所：大阪府堺市・NPO法人kokoiima



いつも穏やかでやわらかい物腰の人だ。誰もが好きになってしまおうと思う。話を聞いた後、国体の記録を調べてみた。

「第32回青森大会200m成年男子B3位。第33回長野大会200m成年男子A5位」

国体の歴史に名前が刻み込まれた田原隆さんは、オリンピックも目の前だったと語った。

愛媛県八幡浜市から広島県呉市に13歳のときに引っ越した。

「成績は悪かったんですが、がんばって勉強し、中京大学に入学したんです。そこで短距離の成績を打ち出しました」。

保健体育の教師をめざしていたが、当時は非常勤講師しか募集がなかった。調子が悪くなったのは24歳のころ。知人が教えてくれた浅香山病院に通うため、呉市から堺市まで通った。

「いまは妻と市営住宅で暮らし、リユースショップぜろで店長をしています」と名刺をくれた。

写真館

222

三谷恵美さん(68)

撮影場所：大阪府堺市・NPO法人kokoiima



「天ぷら屋、お好み焼き、魚屋、肉屋、喫茶店……」

「昔は、店がいっぱいあって、ほんまに楽しかった。みんないい人やったけど、いまはどっかに行ってもうたわ！」

生まれは福井市だが、半年で大阪市の天下茶屋に移住した。

「ジャーナリストにもなりたかったし、国語の先生に憧れがあった。全国高校実力テストで34番だったこともあった。国立大学は学生運動が盛んな時期やし、追手門学院大学の文学部英米文学に入った。OL時代があったけど、三島由紀夫の本を読んだから愛になってな」

浅香山病院に来たのは34歳のときだった。

「病院の外来に来たら、それから16年間、家に帰られへんや。いま、こうして浅香山の産店街が少しずつにぎやかになって、ほんまに楽しこ」

商店街から「三谷さん！」と呼ぶ声が今日も飛び交う。



この度、雑誌『ゴトノネ』の軒先書店となりましたNPO法人kokoimaです。軒先書店、ワクワクと期待いっぱいです。そのkokoimaを紹介させていただきます。

コミュニティカフェ／認知症カフェ「Café ここいま」は、「障害福祉事業所」おめでたい、リユースショップ「ぜろ」のニヶ所を運営しています。（どれも愛嬌あるネーミングだと自負しています）。

浅香山病院で看護部長兼副院長であった小川貞子さんが早期退職し、まず二〇一六年二月Café ここいまをオープンしました。店員一号はふくまる。この猫、キーマンで福猫。香ヶ丘に福を招いてくれています。ある日

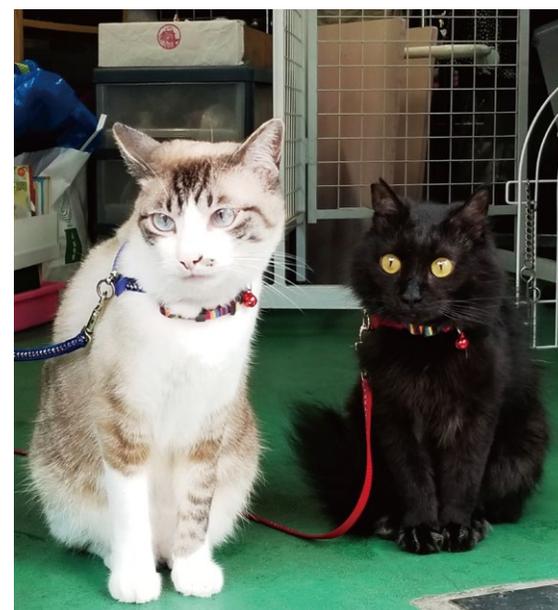
福を招く猫のいる店



突然、殺処分直前の子猫（ふくまる）を保護することになりました。それから毎日小川さんと一緒に通勤。「おめでたい」事業所のメンバーさんが利用するに至った経過も「Café ここいま」の常連のお客さんに出会えたのも、ふくまるがつかないでくれたご縁でした。そんなご縁がつかっていき、私たちが大切に行っている想い【障害のある人・ない人、関係ない、みんなまちの人】がまちの中でじわじわと受け止め、受け入れてもらえつつあると感じています。そして、雑誌『ゴトノネ』の販売を通じて、多くの方と語らうが増えることを思い描いています。

コトノネ読者のみなさま、ぜひ遊びにお越しください。「Café ここいま」のおいしい飲み物とパン、「おめでたい」事業所の夢つぐらやふく織、リユースショップ「ぜろ」のビンテージ商品などを沢山そろえて、愉快的な仲間でお待ちしています。

文・写真／廣田安希子



『コトノネ』取材の後、2021年のお正月にやってきた野良猫「幸(こう)ちゃん」(右。左はふくまる)。3ヶ月経ってやっと隣同士に並べるようになった「こうふく」コンビ!kokoimaに幸福呼んでね。



「浅香山を元気にしたい」 思いを一つに活動

市民活動団体と企業、大学などが連携・協働し、地域課題解決や社会貢献活動のモデルとなる事業を展開する団体を表彰する「さかいNPO協働大賞」(主催/堺市)。第2回大賞に、「浅香山GENKIプロジェクト」が選ばれました。表彰式後に行われた、メンバーと堺市の竹山修身市長との座談会の様子、事業内容を紹介しします。※文中敬称略。



うなぎミュージアム&cafe篠島発創 顧問 山崎友三さん



NPO法人kokoiko 理事長 小川貞子さん



関西大学人間健康学部 教授 安田忠典さん



帝塚山大学 株式会社 セレモニードバイザー 岡崎里奈さん

事業内容

商店街や企業、大学などの団体が一体となって、浅香山・香ヶ丘地域に「新たなにぎわいと価値」を創出することを目的に、地域住民を巻き込んだ活動を行う。

地域情報誌の発行のほか、地域住民から不用品を集めてフリーマーケットを開催し、その収益で夏祭りを開催などのビジネスモデルを展開する。

<http://asakayama-genki.com/>

From 竹山市長

賞をきっかけに 地域の取り組みを知って

「地域のことを真剣に考えていく」という雰囲気づくりを主導するのは行政だと思います。この賞が地域の取り組みについて知ってもらう一つのきっかけになればいいです。私も応援していきたいし、継続的な活動を期待しています。



竹山市長から表彰状を受け取る、団体共同代表の高野さん

大賞受賞を受けて



浅香山GENKIプロジェクト共同代表/株式会社 エヌクリーン 取締役 南部貴子さん

思いがけない賞をいただき、大変光栄です。夏祭りを復活したときに、たくさんの方が集まり、喜んでくれたことは、私たちにとっても大きな力となりました。また、今回の受賞は堺区役所の支援のおかげでもあります。この賞に恥じないよう、これからも地域を元気にする活動をしていきたいです。

大賞 浅香山GENKIプロジェクト



写真左から、うなぎミュージアム&cafe篠島発創 顧問 山崎友三さん、浅香山GENKIプロジェクト共同代表/（株）エヌクリーン 取締役 南部貴子さん、竹山修身市長、NPO法人kokoiko 理事長 小川貞子さん、関西大学人間健康学部 教授 安田忠典さん、帝塚山大学 (株)セレモニードバイザー 岡崎里奈さん

2018年の活動実績

情報誌「よしみち」創刊

堺市内外から多くの方が訪れる「浅香山つつじまつり」に合わせて2000部を発行。浅香山周辺イベント情報や、香ヶ丘地域のお店30軒を紹介し、来場者の「寄り道」を誘う。

バルファストリートフリーマーケット開催

地域の人たちから譲り受けた不用品を開催。住人が気軽に社会貢献に参加できる機会を創出したという評価も、約200人が来場。

「第二回 夏だ! 夜店だ! くらめくバルファストリート」開催

フリーマーケットの収益を資金に開催。飲食物産や雑貨のほか、特設ステージを設置し、歌や演奏などのパフォーマンスも行われた。約1100人が来場。

今後の活動予定

- 2019年6月2日(金)第三回 夏だ! 夜店だ! くらめくバルファストリート開催
- 情報誌「よしみち」の発行
- フリーマーケット開催
- 街のコンシェルジュ(地域の人の声を集める窓口)の開設など

「おせっかいなまち・堺」を実現 将来性にも期待

「大賞に『浅香山GENKIプロジェクト』が選ばれた理由は何ですか?」

竹山 異業種の団体が、それぞれ強みを上手に活かしながら連携して、それを強みと上手に活かしながら連携して、住み心地を向上させたいという思いが、地域活性化に繋がっている。私も期待しています。

小川 私は、浅香山駅前の精神科で看護師をしていました。その後、障害のある人もない人も関係なく居合わせられるポッドのような場所を作りたという思いで、「コミュニティカフェ」を、今は、メンバーが集まる場所として後進もたっています。

岡崎 わが社は福祉業界に所属して、介護や障害者支援ですが、チャリティイベントや清掃活動、町内会イベントのお手伝いという形で、地域貢献活動も行ってきて、さまざまな活動も行ってきてきました。そのノウハウを活用し、浅香山を盛り上げたい。という思いで協力したいという思いでプロジェクトに参加しています。

コミュニティカフェを拠点に 関大生も巻き込んで活動

小川 私は、浅香山病院 担任しています。

山崎 私は、浅香山駅前の関西大学で、ボランティアの学生たちから、夏祭りを活動に参加してほしいという声を受けて、地域センターのまわりの住人の一人として、重要事項を持ち、主体的に関与して活動しています。

岡崎 わが社は福祉業界に所属して、介護や障害者支援ですが、チャリティイベントや清掃活動、町内会イベントのお手伝いという形で、地域貢献活動も行ってきて、さまざまな活動も行ってきてきました。そのノウハウを活用し、浅香山を盛り上げたい。という思いで協力したいという思いでプロジェクトに参加しています。

みんなの思いを結集し 夏祭りを復活させる

「プロジェクト立ち上げのきっかけと活動内容は?」

南部 浅香山・香ヶ丘地域の発行を行っていた、高野さんが目立って活躍しています。

山崎 役割分担というのではなく、大学が責任者の肩が重たくなって、そんな中、それが浅香山で活動しながら抱いていた、まちを元気にしたいという思いを、実現するために、昔開催されていた「夏祭りを復活させた」という思いを、人と人、人と場所をつなげています。

○Web

媒体:Webサイト『Pilot Light Coffee』(2018年5月6日公開 ※現在は公開されていません)

執筆:森本康平 写真:笹田峻彰 写真提供:小川貞子

障がいのある人の居場所から、ボーダレスな街づくりへ。 堺市浅香山でコミュニティカフェを営むNPO法人kokoima、 小川さん、廣田さんたちの挑戦。

● 障害のある人の居場所が商店街を復活させる

病院で写真展をやりながら、患者さんたちと一緒に初めての体験をしていくなかで、「あー」っと気付くわけです。いかに上下関係を作らないようにと思っていても、病院という枠の中では限界があるって。3年間いろんなところで写真展をやってきました、わたしたちのメンバーさんは誰一人として退院していなかった。街に出ていく怖さを乗り越えられなかった。

病院は治療者と患者さんが豊かなコミュニティを気づける場所ではあっても、社会との豊かなコミュニティを気づく場所ではないでしょ。「退院したい」と言ったときに「この場所があるから安心だ」って思ってもらえる場を作ったかったの。それは、街で普通に暮らしている人たちと精神障害者の方が同じ時間を共有できるような場所。

今回お話を聞かせてもらったのは、2015年に大阪府堺市の浅香山に“Caféここいま”を立ち上げた小川さんと店長の廣田さん。おふたりとも元々は浅香山病院の精神科看護士をしていましたが、今は浅香山駅近くの商店街の一角にコミュニティカフェやリサイクルショップ、作業所を開き、障害のある人と地域の人達の交流の場を営んでいます。

病院の近くにCaféここいまを開いた小川さんは、浅香山病院精神科の看護婦



話を聞きに行った日、Caféここいまは定休日だったので、作業所「おめでたい」で話を伺った。

長という立場を捨ててカフェを開こうとした当時の想いを、インタビューの冒頭で語ってくれました。

浅香山病院は1950年代に全国で初めて精神科のデイケアを始めた、先駆的な病院。小川さんが看護師をやめるまでの数年間、この病院では写真家の大西暢夫さんと一緒に、患者さんの病院での生活を撮って写真展を開き、病院の外の人たちに見てもらおうというユニークな取り組みをしていました。写真展に向けて患者さんたちと話し合いながら試行錯誤していくなかで小川さんは、「回復過程のパートナーを患者さんにあてはめるのではなく、治療者のほうも初めての体験をしながら進めていくのが本当のリカバリーだ」と気付いたそうです。

治療者のほうもはじめての体験と一緒にしていく。ハラハラ感もドキドキ感も不安感も、一体になりながら、より沿って動く。

結果はその時は見えていないかもしれない。ご本人がどうありたいかに結果が結びつくという感じ。私も写真展なんかしたことないから、写真をどんなふうに印刷したらいいかも、どの写真が大き化したときに見栄えがするのかわからない。そんなことをメンバーの方々と話ししながら進めていきました。

看護婦長としてそうした体験をしながらも、その立場ゆえメンバーさんに直接寄り添うのが難しいことに、小川さんは歯がゆく感じようになります。メンバーさんの不安やこころの揺れに直接付き合える立場にいたい、そして退院した人の居場所になるような場を作りたいと、小川さんは35年間つとめた病院をやめました。

Caféここいまが2015年12月にオープンしてから少しずつ、街の人たちもカフェを訪れるようになり、障がいのある方と街の人たちとの交流が増えました。

その後商店街の人たちのニーズから、小川さんたちはカフェの隣にリサイクルショップ「ぜろ」を開き、さらに障がいのある人が所属し毎日通える場所を作るために、すぐ向かいに手芸や編み物などを扱う作業所「おめでたい」を開きました。

Caféここいまや作業所があるのは、パチンコ屋さんやひとつ30円のココロック屋さんがある、いかに“大阪”といった雰囲気のある商店街。カフェに入るなんてこっぴどくかしているようなおっちゃんも、リサイクルショップがあればいらなくなった物を置いて行ってくれました。そこで小川さんや障がいのある方とのつながりができ、やがてCaféここいまにも足を踏み入れてくれるようになったといいます。地域の人たちどうしが話す機会も増え、それまでシャッター通りだった商店街が賑わい



を取り戻して行きました。

今ではCaféここいまは、障害のない人にとっても、行けば誰かがいて話ができる憩いの場。障がいのある人と街の人が同じ時間を過ごす様子を近くで見ている店長の廣田さんは、「そこに障がいの壁はない」と、日々感じています。

このまゑ認知症の主人がいる常連さんがカフェでね、「お父さんに朝四時ごろ起こされて、もううちの人生苦勞ばっかりや」って泣いているのを障がいのある方がずっと聞いていたの。常連さんが「今日は話ができずすった。うちだってこんな話ができるとこなかったらやってられへんわ」って言って帰っていくの。

「障がいのある人もない人も一緒に」って街の人も言うてるの。「こんな場所ができる前は、この人たちのこと知らなかったから、はために怖いと思ったり、格好がだらしなくてひいてしまったりしてたけど、知り合ったらみんな一緒に」って。

● 多様な人たちの支えあいが、地域を育む

この国では何十年も、精神病の人を病院へ入院させて治療するスタイルが続けられました。やがて病院の外の社会との関わりが減り、外に出ることが少ない状態で20年、30年と入院していけば、退院することに不安を感じるようになる。そんな人たちに今、日本政府や社会は“地域移行”を掲げて退院させようとしています。

僕の頭の中には葛藤がありました。

「住む場所がない、家族が受け入れてくれないなどの社会的な理由で入院している人達に、病院の外に出てその人らしく自由な生活を送ってほしい」、そんな思いがある一方で、「不安を感じている長期入院の人たちに対して外の人間が、退院することを良しとして支援するのはどうなんだろう。退院することで余計に孤独や不安を感じるかもしれないし、もし病院のなかで安心できるなら、高齢になったあとで退院させようとするのは違うんじゃないか。」そんな思いもあつたんです。

そのことをインタビュー中につぶやくと、小川さんと廣田さんはこんな話をしてくれました。

小川:私も写真展を始めるまではそう思っていたの。開放病棟にいらっしゃる方たちは、多少の門限がある以外は割と自由な生活をしていらっしゃって。浅香山病院には病院を自由にでて電車に乗ってどこかへいたり、特売日を見てスーパーに買い物に行ったりしていらっしゃる方もいたの。

そういう生活を営んでいらしゃったら今さら新しい人間関係を作ってね、街に出るとか、施設に出るとかしなくても、病院のなかで幸せな生活を送る方がいいんじゃないかって。でも、やっぱりそれは違っていて今は思う。

森本:退院された方を見てそう思ったんですか？

小川:病院を出られた人のなかにもやっぱり、居場所を持ってらっしゃらない方なんかは寂しくてしょうがないから、どうしても再入院を繰り返したり、退院を勧めたら「小川さんは『帰れ帰れ』っていうけど、一人で暮らすのってめちゃ寂しいで」っていう人もいる。だけど、本来ひとは、自分の事柄を決める時に誰かにお伺いを立てないといけないシステムのなかで生きているのはおかしいって、それは本当の生き方じゃないんじゃないかって思うの。

北海道のべてるの家の人は、入院している障がいのある人たちのこと「苦労を奪われた人」っていうの。外で暮らしてたら不安っていう苦労もあるし、親が死ぬって苦労もある。入院していたら親が死んだことも隠されてしまう人もいる。病気が悪くなるからってお葬式にも行かせてもらえないとかね。

小川:障がい、病気がゆえに保護されることは、ある意味いいことなのかもしれないけれど、本当に今まで私たちがお世話してきた統合失調症の人を中心に考えると、違うんじゃないかって思うの。本当はもっと彼らにも現実と向き合う力があって、その現実に向き合うときに、安心して頼れる人とか、不安を吐き出せる人が、病院にはいなかったんじゃないか。

今「おめでとう」のメンバーと付き合っているとしみじみと思う。大概の揺れは、関



超イケメンなふくまるくんの横顔と、カフェに飾られていたふくまるくんの写真

係性のなかで乗り越えていけるんじゃないかって。

廣田:カフェに来る街の人のなかにも、やっぱり独りで、ご自身も体の障害をお持ちの方もいて、「うちやっぺ一緒やで!」っておっしゃるんです。「寂しいのはあんただけちゃうで、うちだっぺ一緒やで。うちだっぺ帰ったら一人やしいつ一人で死んでるかわかれへん。それはみんな一緒やで」って。

小川:街の人たちも、結婚して愛し合っていたとしても結局最後は一人ですよ。最後は一人の人たちがこの街にはたくさん暮らしていて、みんな孤独をかかえていて。でも街の人も、辛いことも含めていろんな経験をしているから、私たちが対象としている人たちにも優しくなれる。

●温かな想いで溢れた、心地よい居場所「Caféここいま」

NPO法人ここいまは、小川さん一人の力だけでできたわけではありません。コミュニティカフェを作るアイデアも、小川さんの考えに共感した7人の人たちと「ここいまハウス構想研究会」という集まりの中でできてきたといいます。最近その集まりのなかで、「ボーダレストダウン」という言葉が出てきました。

「堺市に、どんな境目も持たない街を作る。」

今、ここいまは、そんな大きな目標に向かって進んでいるそうです。

小川さんは作業所「おめでとう」を作るときも、街の人に開かれた場所になることを意識したと言います。お話を伺った「おめでとう」のある建物の一階は窓が大きく、レースのカーテン越しに外からでも中の様子がわかります。

ここに遊びにやってくる街のおばあちゃんが、障害のある人が編み物をしている様子を見て「編み方を教えてほしいわ」と言ってくることもあるのだそう。

看板猫が大きな役割を果たしていることも、ここいまを語る上では欠かせません。「週休2日で働いてくれている」と小川さんが話す、ここいまのアイドルでもある、イケメンねこのふくまるくん。彼を見るために「おめでとう」を覗きに来る人もいます。

誰でも気軽に入っていける空間。街の人との交流を生むことで境目をなくしていく目標が、カフェや作業所ではもうすでに、当たり前になっているように感じました。

後日僕がCaféここいまをおじゃましたら、障がいのある人も地域の人も、店の人もお客さんもみんな家族のように親しげに話していて、とても暖かな気持ちになりました。

買い物袋を両手に店に入ってきた、近くでスナックをしているというおばちゃんは、僕のいたテーブルの向かいに座って、この街や商店街のこと、スナックでの話などもたくさん教えてくれました。15年以上前からこの街に住んでいるというそのおばちゃんは、この店ができてから、それまでシャッター通りだった商店街のシャッターが少しずつ開いていくことを嬉しく思っていると話していました。

障がいのある人となない人、子どもと若者とお年寄り、国籍の違う人たちなど、様々な人が交わる空間にぬくもりを感じることがあります。それはきっと、自分と違う人に対して心を開くことで、自分自身に対してもおおらかになれるからなんだと思います。言葉を慎重に選んだり、空気を読んだりしないといけない緊張感がなくて、ただ

同じ場を共有しているものどうし、相手を思いやることができる。

そんな雰囲気のあるCaféここいまは、またいつでも戻ってきたいと思える場所でした。

ローカルな雰囲気を持ちながら、NPO法人kokoimaは、すでに多くの人にインパクトを与えています。

小川さんたちが2016年の冬に、浅香山病院に長い間入院されている高齢の方たちと沖縄旅行へ行ったときのことを撮った「沖縄に行こう」という映画があります。それを去年の8月の商店街のお祭りの日に上映すると、見た大学生や地域の人が涙を流し、今年2月に東京の練馬区で浅香山病院の人たちの写真の展示と映画の上映を行うと、二日間で600人もの人が見に来たのだとか。2017年の夏にCaféここいまがある浅香山の商店街で小川さんたちが開いたお祭りにも、たくさんの方が遠くから来てくれたそうです。

近くにある大学の学生や商店街、街の人たちとのつながりを大切にしながら、障害のある人の居場所づくりからボーダレスな街づくりへと発展していく小川さん、廣田さんたちの活動に、今後も目が離せません。





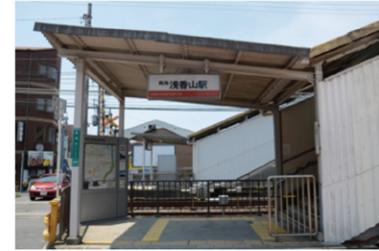
各駅停車で、浅香山で。-NPO法人 kokoima 小川貞子さんを訪ねて

♡ 9

向田奈保
2020/08/19 19:45

大阪府堺市にあるNPO法人kokoima。精神障害のある人たちの支援を中心に、Caféここいま、リサイクルショップ「リユースゼロ」、就労継続支援B型事業所「おめでたい」を運営しています。

なんば駅から南海高野線に乗り換えて、最寄り駅である浅香山を目指します。浅香山に止まるの電車は各駅停車のみ。電車のスピードはゆっくりと。そのため沿線の風景がよく目に入ってくるのですが、どうも線路とまちの距離が近い。“人の存在が近い路線”なのだなと思いつつながらガタンガタンと電車で揺られていました。



浅香山駅に到着し改札を出た途端、私は“まちくささ”を嗅ぎ取ります。自転車をスーっとこいでいくオジちゃんの姿だったり、買い物袋をぶら下げた親子だったり。ここでの“まちくささ”とは生活感。

新しいまちにきたというよりも、日常の延長線のような感じがします。

Kokoimaの場所をメモした地図を片手に駅から歩くこと約2分。パラソルを広げた八百屋さんに目を奪われたのですが、すぐその隣に「Caféここいま」がありました。道を挟んだ向かいには「おめでたい」が。



(パラソルのある店舗は八百屋さん。左隣がcafeここいま)



論文

論文 掲載

【研究の背景】高齢者の健康回復プロセスを支援するコミュニティカフェの役割について、本論文では、地域生活を支えるkokoimaの「まち場」づくりに関心を注いでくださった人です。義父様の畑から(タマネギ、豆、桃、ミカン…)物心両面からご支援いただいております。



【研究の背景】高齢者の健康回復プロセスを支援するコミュニティカフェの役割について、本論文では、地域生活を支えるkokoimaの「まち場」づくりに関心を注いでくださった人です。義父様の畑から(タマネギ、豆、桃、ミカン…)物心両面からご支援いただいております。



【研究の背景】高齢者の健康回復プロセスを支援するコミュニティカフェの役割について、本論文では、地域生活を支えるkokoimaの「まち場」づくりに関心を注いでくださった人です。義父様の畑から(タマネギ、豆、桃、ミカン…)物心両面からご支援いただいております。

論文「コミュニティカフェにおける在宅療養者の健康回復プロセス—医療アプローチを超える開発福祉アプローチの試み—」2017年度

執筆：杉原多可子 (日本福祉大学大学院国際社会開発研究科国際社会開発専攻修士課程 (通信教育))

ナラティブ写真展を浅香山病院内で取り組んでいた頃(2012～2015年)からのお付き合い。小川が浅香山病院を退職してからも地域生活を支えるkokoimaの「まち場」づくりに関心を注いでくださった人です。義父様の畑から(タマネギ、豆、桃、ミカン…)物心両面からご支援いただいております。

卒業論文「コミュニティカフェを運営する看護師がつくる精神障害者と地域住民の「つながり」形成に関する研究」2019年度

執筆：豊原大瑛 (大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻博士前期課程) 松原茂樹 (大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻准教授・博士(工学)) 下田元毅 (大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻助教・博士(芸術)) 木多道宏 (大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻教授・博士(工学))

大阪大学大学院工学部 松原茂樹准教授のゼミ生さんで、香ヶ丘町にkokoimaがつくる「コミュニティカフェ」に興味を持ってくれた若者。おめでたいメンバーさんから愛されてましたね。

修士論文「精神障害者における地域移行支援の変遷と地域とのつながりに関する研究—A地区のNPO法人に通う精神障害者一人一人の生活実態を覗いて—」2021年度

執筆：豊原大瑛 (大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻博士前期課程) 松原茂樹 (大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻准教授・博士(工学)) 木多道宏 (大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻教授・博士(工学)) 下田元毅 (大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻助教・博士(芸術))

ラジオ



媒体：オ・エム・ピー・シー 大阪 松原インターネット放送局
番組名「のんのんとカントリーママのenjoyまつばら」
2020年7/7(火) 12:30~13:30
※再放送2020年7/8(水) 11:00~12:00、21:00~22:00、
7/14 12:30~13:30、7/15 11:00~12:00 21:00~22:00
パーソナリティ：のんのんとカントリーママ、
ゲスト：NPO法人kokoimaから三谷恵美、水巻智佳子、金澤咲
富永昇次局長に「三谷さんまた出てやー!三回でたら1年や。
歳を取るごとに元気になるよ」と言ってくださり固い握手を交わしました。

媒体：吉野川のみえる放送局 FM五条78MHz
番組名：「タテ・ヨコラジオ fm78MHz」
前半 2019年3月4日(月) 10:30~11:00 *再放送2019年3/10(日) 11:30~12:00
後半 2019年3月11日(月) 10:30~11:00 *再放送2019年3/17(日) 11:30~12:00
パーソナリティ：ゴリ鈴木、ゲスト：小川貞子(NPO法人kokoima理事長)

NPO法人kokoimaの理事の皆さま

理事長

小川貞子 (おめでたい作業所 管理者兼サービス管理者) *2016年～

副理事長

北村素美恵 (公益財団法人浅香山病院 看護師長) *2016年～

廣田安希子 (kokoima職員 おめでたい作業所 (Caféここいま店長)) *2016年～

理事

朝田 亘 (文化活動家) *2016年～

来栖清美 (保健師 精神障害者雇用トータルサポーター) *2016年～

釜江和恵 (公益財団法人浅香山病院 部長 認知症疾患医療センター長) *2019年～

松原茂樹 (大阪大学院 工学研究科 地球総合工学専攻 建築・都市デザイン学講座 建築・都市計画論領域 准教授) *2019年～

的場 圭 (関西医科大学 看護学部・看護学研究科 助教 大阪大学大学院医学系研究科 博士課程) *2019年～

村川治彦 (関西大学 人間健康学部 教授) *2019年～

安田忠典 (関西大学 人間健康学部 教授) *2019年～

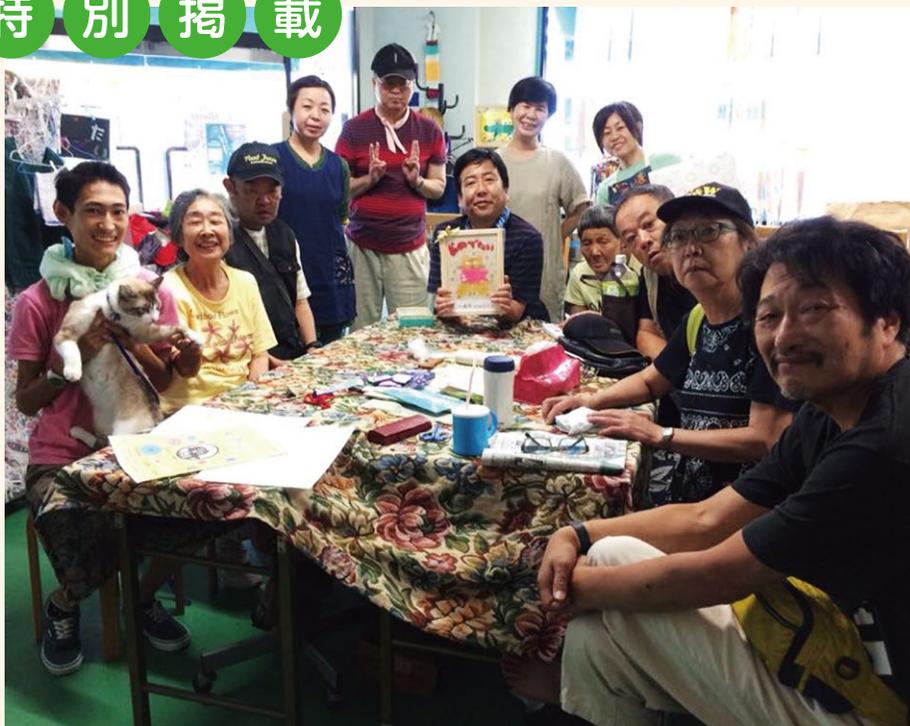
下田健二 (日本語学校 教師) *2016年～2019年

監事

林 敬次 (はやし小児科 院長) *2016年～2019年

下田健二 (日本語学校 教師) *2019年～

特別掲載



街づくり夢基金第15回助成事業

NPO法人kokoima presents

障害のある人・ない人、関係ないない、みんなまちの人

ボーダレス・タウン・プロジェクト ドキュメントブック

2017年10月-2018年9月



はじめに

NPO法人kokoimaは、2015年12月堺市堺区香ヶ丘商店街における「Caféここいま」開設以来、「地域の居場所とは何か?」という問いにずっと向き合い続けてきました。浅香山病院の精神科病棟で生活する長期入院患者が、病院に留まらない「地域生活」へと向かってゆくための場として立ち上げられたCaféここいまも、開設から3年を迎えようとする現在は、その目的に留まらない多様な人たちが集っています。

ここでは、「病」や「障害」を前提に会話するのではなく、いろんな面を持ち合わせているなかで徐々に「その面」についても触れながら、困ったことやつらいことも語り合います。すると、カフェの常連になってきた地域住民のそれぞれも、実は独居老人で日頃誰かとご飯を共にすることがなかったり、障害者手帳を持っているわけではないけれど、どこか生きづらさを抱えている若者だったり、留学したばかりで孤独を感じている海外から来た学生だったり、この場でぐちゃぐちゃと本音を漏らしながら時に楽しく、時にしんみりと混じり合っていくのです。

2017年からは、カフェここいまの隣に、リユースショップ「ぜろ」(ももとは入院患者のひとりある夢を叶えるために行ったバザーから派生)がオープンし、そしてはす向かいに障害のある人々の働く場として就労継続支援B型、生活介護事業所「おめでたい」もオープンするなど、より多様なチャンネルを持った居場所づくりが展開中です。

「多様な人々があるままに過ごせる居場所」をつくることは、「まち」を「ボーダレス」にすること。そんな思いを強くしてきたこの2017年からの一年間、街づくり夢基金を活用し、様々な地域プログラムを企画して参りました。このドキュメントブックでは、主だった企画のレポートと最近のkokoimaの活動紹介などを簡潔ながらできるだけ盛り込んでみましたので、関心を持っていただければ幸いです。

合言葉は「障害のある人・ない人、関係ないない、みんなまちの人」。



年間開催リスト

10月19日	★kokoima討論会 ボーダレスタウン企画 第1弾 「福祉事業所をひらくと起きる素敵なこと」 ゲスト講師：森のキッチン 増田靖さん (社会福祉法人コスモス)	参加者20名
11月24日	★kokoima討論会 18:00～ NPO法人kokoimaの実践報告	参加者6名
12月16日	★kokoima講演会 ボーダレスタウン企画 第2弾 「ザンゼンに生きる工夫について」 ゲスト講師：横浜市 ひかりが丘団地 カブカブ所長 鈴木勲滋さん 会場：関西大学 SA402教室	参加者34名
1月24日	ワークショップ 資料整理 (記録・写真など) kokoima活動報告	参加者7名
2月15日	★kokoima討論会 教育における 青年期の体験学習：「学生がまちで学ぶ意味」 ゲスト講師：関西大学 村川治彦教授・安田忠典教授	参加者15名
3月14日	ワークショップ 資料整理 (記録・写真など) kokoima「おめでとう」活動報告	参加者6名
4月20日	★kokoimaラジオ ゲスト講師：文化活動家 アサダワタルさん 著書「住み聞き」[想起の音楽]等	参加者11名
5月5日	★パルファンストリート フリーマーケット 「地域の不用品で 地域の楽しいをつくる 循環型フリマ」	参加者 推定100名
6月10日	★kokoima「オキナワへいこう」 精神科長期入院患者 (浅香山病院) のドキュメンタリー映画上映 ゲスト講師：写真家 大西暢夫さん 著書「水になった村」[家族の軌跡 3.11の記憶]等 会場：関西大学 SA402教室	参加者82名
7月19日	振り返り 「オキナワへいこう」自主上映活動について	参加者14名
8月2日	★第2回夏祭り「夏だ!夜店だ!パルファンストリート!」 ステージ企画：kokoimaラジオ おめでとう：「くみボタン・ワークショップ」 Café kokoima：味噌カレーライス、キュウリの本漬け	参加者 推定1000名
11月	報告集 作成	

開催レポート①

2017年10月19日

ボーダレスタウン
THE 1st
第4回 kokoima討論会
presented by NPO法人kokoima
参加費無料
講師 増田 靖さん
森のキッチン 店長
「福祉事業所をひらくと
起きる素敵なこと」
10月19日(木)
18:00～in おめでとう
森のキッチン (堺市役所の地下食堂) は、障害のあるスタッフが働くキッチンです。運営者の増田さんから、施設を飛び出したキッチンから生まれた物語を聞かせていただきます。

ボーダレスタウン第2弾 第5回kokoima討論会は
11月24日(金)にNPO法人kokoimaの実践報告を開催します。
詳しくはカフェココイマでおめめでたいまで。
NPO法人kokoima

ボーダレスタウン第一弾「福祉事業所をひらくと起きる素敵なこと」 森のキッチン 増田靖さんをお招きして。

講師にお招きしたのは、森のキッチン店長の増田靖さん。森のキッチンは、堺市役所の地下にある食堂だが、職員だけでなく誰でも利用できるように地域に開かれており、かつ働くスタッフの半数が、障害のある方。つまり障害者の就労継続支援施設として運用されている。奥にはキッズルームもあり、デザイン性も高くおしゃれで、いい意味で「福祉」っぽくない多様な開かれた方がされた空間だ。オープンには2015年2月。運営するのは堺市にある社会福祉法人コスモス。堺市が市役所の食堂の運営を担う団体を募集した際に、公募によって選ばれ、運営がスタートしたという。こういった普通の森のキッチンの様子を写真スライドで見せていただきながら、この森のキッチンで起きているコミュニケーション、事業所を開いて生まれた素敵な出来事、それまでの増田さんの仕事の経緯、変わらない信念をたっぷり伺った。

「おめでとう」を開いたばかりのkokoimaとしては、ボーダレスな居場所づくりの志はもちろんのこと、現実的には障害者就労継続施設に就労されている方々への工賃をいかに増やすのか、という関心がある。増田さんたちはその課題を突きつめていくなから、相当に考えられた上でこの森のキッチンの運営に至ってことが、とても学びになった。「困った」を形にされるなかで、良い就労環境を実現すること、そこで働く方々が「地域に混じる」ことが、同時に編まれてゆく。社会化されることが、経済にも結びつく。そういった理想のかたちの片鱗を、森のキッチンの活動から実感した。

※増田さんは社会福祉法人コスモスを退職され、2018年10月1日より堺市南区でまちかどステーション八百萬屋を開業した。

開催レポート②

2017年12月16日 @関西大学堺キャンパス



NPO法人kokoima Presents
ボードレスタウン
講演会 第二弾
『ザッゼンに生きる場の工夫について』
ゲスト 鈴木 昶滋さん
(地域作業所カプカブ所長)
from 神奈川県横浜 希ひかりが丘団地
ファシリテーター アサダワタル (文化活動家)
小川 貞子 (NPO法人kokoima)
15:00~16:00 鈴木氏講演会
16:00~17:00 パネル対談
12月16日 (土)
15:00~17:00 in 関西大学堺キャンパス
A棟4F 402教室
(関西大学堺キャンパス地下1F)
(障害者手帳を所持の方は無料)
参加費: 500円 (学生・障害者手帳を所持の方は無料)
17:30~ NPO法人kokoimaオープン理事会
参加無料 in おめでとう
このお報は個人や人間関係学部材料をその能力を磨いています。

ボードレスタウン第二弾「ザッゼンに生きる場の工夫について」 地域作業所カプカブ 鈴木昶滋さんをお招きして。

カプカブは、NPO法人カプカブ（横浜市旭区上白根町）が運営する「横浜市地域活動支援センター障害者地域作業所型」だ。ここでは、知的障害など何かしらの生きづらさを抱えたメンバー（愛称「カプカブズ」）が、コーヒーを淹れたり、ケーキをつくったり、創作活動しながら日々を過ごしている。場所は、ひかりが丘団地商店街。堺の泉北ニュータウンとも少し似た雰囲気があり、高齢化が進み、学校の統廃合も進んだり。なので「喫茶カプカブ」の常連客は主に近所のおばあさんたち。カプカブズとおばあさんたちのやりとりが少しヘンテコだけど信頼関係が確かにあって、素敵なコミュニケーションが展開されている。

「ザッゼン（雑然）」とは、世間ではあまりいいイメージで使われることはないが、「やみくもに整理されず、一人ひとりがありのままに生き、単に同調しあうだけでなく、個性を大切にしながらも、手を結び合う」というイメージとしても、捉えられる言葉だ。これは、まさしくkokoimaが掲げる「ボードレス・タウン」そのものであり、それを目指すプロセスで場の「開き方」と「閉じ方」の絶妙なバランスが大切なのではないかと感じた。カプカブという「ここ」で起きている出来事を拙速に言葉（福祉的な意義に還元するなど）にせず、その体験を「味わう」ことを重視しているという点では、カプカブの活動は外から見えにくい。言い換えれば「閉じている」感もある。しかし、その一方で地域の他の事業所と連携しながらこの独特な場づくりを緩やかに広め、かつこの長年の軌跡を最近ではクラウドファンディングを活用して書籍化するなど、しっかり「開く」展開も怠らない。これができるのには、一見すればふわふわと楽しそうなこの空気づくりに、「障害観の根本的な読み替え」という切実な訴えがあるからだと思う。

講演翌日の「おめでとう」でのメンバーの感想。「差を理解する、ということ」「どうしようもなくしんどくて普通でいられないときは、誰にでもあるのだからという想像力を働かせよう」「ザッゼンに生きるということは、枠をはめないこと、枠やルールを決めると、ルールから外れる人を問題にしてしまうから。こういった話を、立場を超えて真剣に、ときに笑いながら話せる場を作れていることは、シンプルに「幸せ」なことなのだと思う。

開催レポート③

2018年2月15日

関西大学 村川治彦・安田忠典教授講座 「青年期(大学)の体験学習 まちで学ぶ意味」

「学生たちの年代は一番身体が自由で能力も高いとき。社会から離れて大学の中で学ばせてしまうのはいかにももったいない。まち場にはいろんな人たちがいて、いろんな生き方をしている。暮らしの中で(まちの人との交わりの中で)学んだ知識を使い、生きる場を経験させていきたい。まちの中で学ばせてください」(安田先生のお話) kokoima発足以前から、熱心に安田ゼミの学生さんたちが、Caféここいまのリノベーションを手伝ったり、まちの祭りに参加している思いをまちの人たちと共有でき、参加者からはこんな感想も聞かれました。「つまり・・・うちらが先生ってことか?」すかさず安田先生「そうなんです。暮らしの中で学んだことや使った知識が、生きる力になるのです。学生にもっと話しかけてやってください」。村川先生からは、身体と対話しながら身体をリラクゼーションさせる体操、呼吸の仕方をワークショップで学びました。互いに身体に触れあい「気持ちいい」を体感。「身体が温くなってきた」という感想をいただきました。

お二人ともまちでよく見かける気さくな先生。「こんにちは」ではじまった講座とワークショップは、関西大学の学生さんたちも(私たちと同じように)香ヶ丘町で暮らし、学び、生きる人達なのだと思える機会となりました。翌日「なかなか、関西大学の子たちをいままでより身近に感じるようになったわ。よかったわ」と、声をかけられました。このまちの人との出会いで社会を体験し、生きる力が增强されていく人たち。彼らのためにも、このまちを豊かで創造性のある関係性豊かなまちにしていきたいと願うkokoimaです。



2018年4月20日

開催レポート④

文化活動家 アサダワタルによる「kokoimaラジオ」

「おめでとう」では、不定期に「kokoimaラジオ」という、kokoima内限定のラジオを実施している。「ラジオ」と言っても電波を飛ばすわけでもなく、インターネットでも放送しない。いまここに居るメンバーだけで「ラジオのような場」を立ち上げ、その妄想のもとで懐かしい音楽を聴きあったり、当時のそれぞれの思い出を語ったりする、ただそれだけの企画だ。ただそれだけだが、ちょっと普通の会話とずれるような仕掛けが入ることで、意外と知らなかった一人ひとりの「一面」が浮かび上がり、「〇〇さん、若い頃そんな趣味があったん?」とか「その歌手が好きだとは聞いていたけど、そこまでファンだったなんてすごい!」とか、そんな発見から会話がさらに紡がれていく。ゲストを招くこともあり、このときは、職業訓練のコーディネーターであり、大阪市中央区の空堀エリアを中心にユニークなまちづくりを行う梅山晃佑さんに来てもらった。少しでもこのkokoimaの日常を外部の人に知ってもらいたいし、メンバーさんには面白い活動人と出会ってもらいたい。そんなことを考えながら実施した。



開催レポート⑤

2018年5月5日 @香ヶ丘商店街



パルファンストリートフリマ

浅香山GENKIプロジェクト(2018年発足)から生まれた企画。GENKIは、シャッター商店街と言われて久しい香ヶ丘町だけ、まちのスーパー・パルファンコリヌがあり、お豆腐屋さん、揚げ物屋さん、和菓子屋さん、クリーニング屋さん郵便局もあるし、関西大学もある、そんな浅香山駅から3分ぐらいのこのストリートで、子どもたちのためにも、地域住民のためにも、豊かにしたいという思いで集っている団体です。もちろんkokoimaは積極的に参加。おめでたい作業所の軒下をGENKIブースに提供。GENKIに集う団体でチラシを配布しました。目的は、香ヶ丘町で8月に開催される「夜店祭り」の資金確保と、にぎやかなことは何回あってもいいから。当日持ち込まれる「リユース品」。即座に値付けし、即座に売る。沢山のボランティアさんに支えられて子どもの日に開催しました。

開催当日。祝日開催は家族でどこかへお出かけする日でもあるから、果たしてどこまで参加いただけるか心配でしたが、その心配は杞憂に終わりました。ほぼほぼ校区内の人からいただき、校区内の方が購入。まちの循環型フリマは本当にまちの人達ばかりで、顔を見知っているだけという距離感をグッと縮めてくれました。あの方は、着物のリメイクがお好きなのとか。どこか遠くまで出かけていくイベントではなく、徒歩で、自転車でいける距離感の暮らしの場で企画する「おもしろいこと」はまちの人を元気にし、物もお金もまちなかで循環させてくれる。よくしゃべり、よく笑い、関係性の公開(おや、あの方とあの方は親しいのだという発見)も行われ、豊かな一日となりました。おめでたい作業所の物販・ハレハレハンガーもご購入いただきました。

開催レポート⑥

2018年6月10日 @関西大学堺キャンパス

大西暢夫 監督「オキナワへいこう」上映会

「オキナワへいこう」は、浅香山病院に長期入院する患者でもあるひとりの女性の「夢(沖縄旅行に行きたい)」を実現させることをきっかけに、「精神科病棟の長期入院」という現実を、ユーモアも交えながら描き出した映画だ。この上映を通じて、(普段、Caféここいまにもよく訪れてくれる)参加者が改めて、あのカフェで様々な立場の人々が交わり合いながら時間を共にすることを少し立ち止まって捉え直したり、何度も出会ったことのある(映画出演者の)メンバーさんの病院での「日常」に触れる機会となった。上映後に、大西監督とkokoima代表の小川真子の対談があり、これまでのkokoima設立の経緯などにも触れられ、会場の関西大学のすぐそばにあるkokoimaでの出来事と映画の内容が密接にリンクしながら語られるエピソードは、上映会に不思議なライブ感と高揚感をもたらしていた気がする。

上映会後の「おめでたい」での懇親会の際に、大西さんは以下のような発言をしていた。“「地域」に対するひとつの見方として、「振れ幅」ってことについて考えてる。メロノームみたいな。ゆっくりしていて振れ幅広いのと早くて狭いのががあるが、今はとにかく(世間の許容量という意味での)振れ幅が狭くて慌たしい。だから患者さんたちのゆっくりしていて振れ幅も広い感じを受け入れてくれるような、そのリズムに合う地域ってどこだろうって考えた時に、Caféここいまやそこがあるこの香ヶ丘商店街はその振れ幅が広いんじゃないかと。この商店街に流れているゆったりとしたリズム感。そこに患者さんがいてわぁーって色んなことを考えこんでしまうと、地域の人が遊びに来て「へー、そうかー。病気かー。まあえんとちゃう?」っていうあの感じ。この何も考えてなさそうで、ルーズなことが、実は「地域」×「ケア」のヒントにもなっているのではない。”「ボーダレス・タウン」にとって、「街のふれ幅」というキーワードはとても大切な気がした。



開催レポート⑦

2018年8月2日 @香ヶ丘商店街



夏だ!夜店だ!パルファン・ストリート

香ヶ丘商店街の店舗、諸団体、地域住民、大学生、子どもたちが一体となって展開する地域づくりイベントが今年も開催された。チームkokoimaも一丸となって冷やしきゅうりの一本漬けやくるみボタンのワークショップ、そして音楽ライブの司会と音響、理事も交えた尺八チームの演奏などを担当。初のイベントステージとなる、パチンコ店グランシップ前では、諸団体や地域住民や関大生によるバンドや弾き語り、関大生による子ども対象の防災ワークショップ、恒例のビンゴ大会などが賑々しく行われ、たくさんの来場者が訪れた。

当日の盛り上がりもさることながら、地域づくりとして大切なはその準備のプロセス、舞台裏のコミュニケーションだ。お祭りの中核を担うスーパーマーケットのパルファン・コリーヌさん、スタッフが地道な地域貢献を行ってきた株式会社芋忠さん、関西大学さんや雑魚寝館さんや浅香山GENKIプロジェクトさんなど、実に様々な団体がこの商店街を開いていくために、苦労と持てる技を出し切っている。そのベースには、常日頃から、「この商店街で目指すべきは、様々なちがいを認め合いながら、緩やかに助け合って生きていく、そんなみんなが街の当事者になれる地域」すなわち「ボーダレス・タウン」というビジョンが、どこかで共有されているからじゃなからうか。

これまで森のキッチンの増田さんや、地域作業所カプカブの鈴木さんなどの話を聞いてきたkokoimaとして、自分たちが運営できる範囲としての「拠点」と、その拠点の背景にある「まち」が、いかにして滲み合うように混じていくか。そのシンボルとなる活動のひとつが、この夏のパルファン・ストリートなのだと思う。お客さんが増えるより「参加者」、もっと言えば「仲間」が増えるほうがもったいい。みんなが「来年のパルファンでは、私も何かやろうかな・・・?」と言いつつ出したいくなる場。そんなことを思いつつ、今年も無事終了した。

「おめでたい」で生み出される作品とその作り手たちの素顔

千代子マグネット(450円)

おめでたいは、まちの人たちからいただいた毛糸で編む。驚くほど多くの種類と色がある。アクリル糸からはアクリルたわしを、ウールからはマグネットや、ニットキャップ、マフラーなどを編む。でも一番の人気商品は、千代子マグネット。最初に編み始めたのは、細編みの達人・千代子さん。別名、前髪ぱつんの千代子さん。編み始めると言葉は消え、千代子さんの周りだけ音が消える。シュルシュル編み継いでいく。ふっと顔を上げる「目は水色にしようかな?」「ヒゲはこの色にする」と。こうやって、一日1個が生み出される。目、鼻、口、ヒゲ・・・バランスが崩れているようで、崩れ方がかわいい!なんだろう、ブサかわいい?ひとつ出来上がるたびに、歓声が湧く。とにかくおめでたいの人気商品。



ハレハレハンガー(400円)

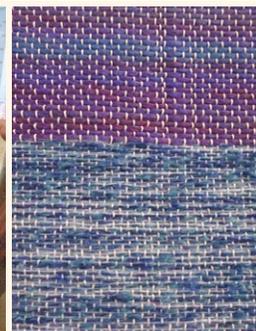
作者は口癖は「ハンガー売れてまっか?」ハレハレハンガーの名付け親。布地を【貼れる】と【ハレ(とケ)】をかけて「ハレハレハンガー」。見た目はとても可愛いが、実はワイルドな男性メンバーが作り始めた。「使うと楽しくなるような明るい色を意識しているんや」と毎日何本も作る。野生的に布や糸を巻いて晴れやかなハンガーを製作する。最近では、女性メンバーが加わり繊細で丁寧な作業で仕上げる。人生のハレの日を演出するような道具を作りたいという思いで開発したハレハレハンガー。おめでたく、パワフルに。大切な日を「すべらせない」洋服も「すべらない」ハンガーなのだ。



ふく織り (kokoima 葉200円/タペストリー2000円~/マフラー2500円~/フロアマット3500円~)

※オーダー受け付けております

糸や布地や古着を、友人やまちの人からいただき、おめでたいは「ふく織り」を始める。布を裂く、糸玉をつくる、縦糸を張る、織る。すべての工程をメンバーで分担し、織士と呼ばれる、別名「色の魔術士」と、「ジャラジャラおじさん」が織る。二人のふく織りは、現在のところショール、ベスト、本の葉、タペストリー、フロアマットなどに加工される。色の魔術士が糸色を選択すると、糸の融合、はたまた色の調和、縦糸と横糸が不思議なハーモニーを醸し出す。一言で言えば・・・「やさしさ」という織物となる。ジャラジャラおじさんは、美しいものを身につける。そのセンスそのままに黙々とサクサクと力強く織る。織る、織る、織る。その集中力は、色に出る。明るく、拓かれた大地のような織りになる。また、繊細なデリケートな織りともなる。



夢つぐら (7000円~)

おめでたい作業所には、ふくまるという保護猫がいる。「ふくまるの寝床の猫つぐらをつくってあげよう」と無類の猫好きさんが声をあげた。猫つぐらとは、長野県や新潟県で彙で作られている猫の寝床の一種。最初は、右も左も分らず、本や動画を見ながら、みんなで協力して見よう見まねで作った。第一号つぐらはなんとも不思議な(味がある?)かたちになったが、入り口が狭く天井が高く、ふくまるはお気に入り。ふくまるのお仕事(まちの人のと触れ合い)がひとしきり終わると、つぐらの中でくつろぎ眠る。つぐらの中でいい夢がみれますようにと願いを込めておめでたい作業所で作る猫つぐらは「夢つぐら」と名付けた。現在は、熟練を重ね嬉しいことに夢つぐらも順調?に売れてきた。そして、おしゃべりな弟子が増えた。見習い弟子は師匠に教えてもらうのが嬉しくて嬉しくて、遅刻がちの毎日だったが、きちんと作業所に通うようになった。師匠は優しく、ときに厳しく教え、弟子はどんなに厳しく言われても「いいもの作るためやから」と前向きに、そして楽しそうに頑張っている。



「おめでたい」の二人の個性が猫たちのために紡ぎあげた、そんな『夢つぐら』を、もう少し、多めにご紹介

kokoimaを代表する商品のひとつ、『夢つぐら』。つぐらとは、新潟県発祥の稲わらを編んで作った猫用の寝床のことです。kokoimaでは、ふくまるという猫が働いています。ふくまるは保護された猫でしたが今ではメンバーや町の人に愛される看板猫。メンバーの中でも猫好きで保護猫活動をしていた片瀬さんが、ふくまるのために、猫たちのために何かつくりたいと一から作り方を勉強し試行錯誤を繰り返し完成させました。

寡黙でがっしりとした風貌の作者は、見た目とは裏腹にひとつひとつ丁寧に編み上げる作業はとても繊細です。そんな作者の姿に憧れて、同じ猫好きのおしゃべり大好きでちょっとおちょこちょいなkokoimaメンバー尚人さんが弟子入り。手先がすくぶる器用な尚人さん。夢つぐらを作るようになってからは作業することが楽しくなりました。一人が気楽だと思っていた師匠も、尚人さんが弟子入りしてちょっと嬉しそう。

『夢つぐら』は、全く個性の異なる2人が、猫たちにいい夢をみて欲しいという同じ願いを込めて、ひとつひとつ丁寧に紡いでいます。



「ぜろ」という名の、もうひとつの街のつなぎ場

まちの人からいただくものを、リユースして販売するお店。その名も「ぜろ」。ぜろのハートフルな店長田原さん。まちの人気者であり、相談役。「にちゃんがいると、安心するわ」よく気がつく販売員三谷さん。近くのお好み焼き店のママに「これが似合うと思う」と訪問販売。店の雰囲気やレイアウトにこまめに気を利かす。小さな服が届くと「ふくまるに似合うよ、着せよ」最近の夢は「おめでたいのメンバーと、与論島に行くこと!」だとか。



「外」へ出てゆくkokoima



外部イベント出演

アメニティフォーラム23「アサダワタル超支援?!セッション」

(2018年2月9日/滋賀県・大津プリンスホテル/シンポジストとして参加)

テーマ：「精神障害」はコミュニケーションの資源となるか ～支援としての「Caféここいま」や「幻聴妄想かるた」から見えること～
出演：新澤克憲 (NPO法人やっここ ハーモニー)、小川貞子 (NPO法人kokoima)、岩上洋一 (一般社団 法人チキラネット)、アサダワタル (文化活動家/大阪市立大学)

報告趣旨：精神障害者の支援現場で「地域コミュニティとの交わりや当事者研究から生まれた商品開発」を通じて、「精神障害」が時として放つ独特な思考やコミュニケーションが社会の風通しを良くしていく、そういった創造的なコミュニティづくりについて再考してみた。

第4回身の医療研究会「身を生きる臨床とは」

(2018年2月13日/関西大学梅田キャンパス/シンポジストとして参加)

テーマ：「身」の定義は難解で答えを出すことは難しいが、看護師として長年とらえてきた「身」は、感受性のある「からだ」と感じる。病院を出て、まち場のkokoimaを「身が居合せる場」として規定し、そこで遭遇する出来事を、人がどのように処理していくのか、臨床看護師の経験知から再考してみた。

ガシ横フリーマーケット (2018年3月18日/堺東大小路/出店)

手をつなごう、浅香山フェスティバル (2018年3月24日/浅香山小学校体育館/バザー担当)

浅香山校区にある障害福祉施設、子育てサロンなどが開催されているイベント。浅香山小学校体育館内で開催。kokoimaは、お声掛けいただいた8回目から参加。小学校校門前バザーを担当した。

堺市主催：大和川クリーニンググリーン活動 (2018年4月28日/大和川河川敷/参加)

臨床実践の現象学会「私たちの実践って何だろう」

(2018年8月4日/大阪医科大学看護学部講堂/ラウンドテーブルディスカッションに参加)

テーマ：人とかわかり、意味が生まれる

出演：吉川雄一郎 (大阪大学)、小川貞子 (NPO法人kokoima)、村上靖彦 (大阪大学)

報告内容：「病院におけるかわかりとまちでのかわかりまち場で感じていること」病院時代の私、まちの私を、比較することで、看護師としての臨床経験からは、学びえないようなこと、気づきえないことを報告した。少なからず、病院での経験がスライドできることにも気づくことができ、自身にとっても貴重な体験となった。

映画『オキナワへいこう』の上映展開

現在、kokoimaでは、映画『オキナワへいこう』(大西暢夫監督作品)の配給元となり、上映活動に関わっている。kokoimaの写真展メンバーであり、浅香山病院に長期入院する患者でもあるひとりの女性の「夢(沖縄旅行に行きたい)」を実現させることをきっかけに、「精神科病棟の長期入院」という現実を、ユーモアも交えながら描き出した映画。その上映活動を通じて、kokoimaの活動の広がりや、「おめでたい」で行う「就労」にとっても多様なメニューが生まれることを期待している。

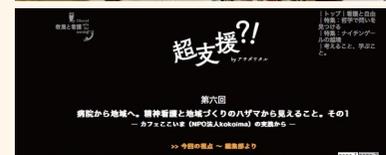
映画『オキナワへいこう』
自主上映のお願い

「沖縄に行きたい」精神科病棟に長期入院する患者たちの心の揺れを見つめるドキュメンタリー映画
監督:大西暢夫 配給:おめでたい作業所 上映時間:8.1分

□上映費用
入場者数によって決まります。詳しくはメールにて問合せ下さい。
□映画場でのおめでたいグッズ販売
映画ステッカー1枚あたり100円、おめでたい商品の売上20%を上映費用に還元します

自主上映ご希望の方問い合わせ先:
omedetail91@gmail.com(NPO法人kokoima)

メディア掲載



ウェブ連載「超支援?!-支援現場に表現的まなざしを向けてみる- by アサダワタル」

(日本看護協会出版会/2018年に3回掲載)

- kokoima理事であり、文化活動家のアサダワタルさんによる長期連載にて、kokoimaのこれまでの活動を数回にわたって連載中。
- 現在までの掲載された内容は以下の通り：第六回病院から地域へ。精神看護と地域づくりのハザマから見えること。その1—カフェここいま (NPO法人kokoima) の実践から—第七回病院から地域へ。精神看護と地域づくりのハザマから見えること。その2—「ココ今ニティー写真展」が切り開いた「ケア観」の揺らぎと「地域」への回路—第八回病院から地域へ。精神看護と地域づくりのハザマから見えること。その3—私たちにとって「地域」とは何か?—

「ねこじゃらし」夏号

(2018年6月号)

- ねこじゃらしは、無類のネコ好きさんが、好きが高じて猫自慢のような年4回の機関紙を発行されている。多くのネコ愛好家が投稿されている。河内長野発信で、Caféここいまは機関紙の常設展示場となっている。おめでたい「夢つぐら」の物語を、掲載いただいた。



最近のkokoima(あとがきにかえて)

シャッター商店街と揶揄されていた香ヶ丘町に住まわせていただいて3年が経過した。1年目が過ぎた時「今だから言うけど、1年以内にCaféはつぶれると思った」1年半を迎えた時、隣の店舗が閉店し「kokoimaさんと借りてくれへん?」と誘われた。その店舗を迷いながら借り、バザー品の処分程度に営業してきたが、「ここは楽しいわ」「買い物できるとこないから」というまちの人の声に押されるように「リユースショップぜろ」へと転身。そのころから、kokoimaは新たなステージに上がり始めたように感じる。さらに3か月後に(もろもろ思うことあり)、日中活動系の就労施設「おめでたい作業所」をCafé向かいに開所。気づけばkokoimaがまちに開いた場は3面となった。

Caféという一つの場しか持たなかった当初は、Caféに集う人は、市の外から来訪して下さる多様な人たち、まちの人たち、精神障害者手帳を持った人たちであった。ところが、リユースショップぜろの顧客はまるごとまちの人たち。不用品と判断された品物も、ほぼ半径2キロ圏内のまちの人から集まる。購入する人もまちの人たちや浅香山駅を利用する人たち。「(この通りには)食料品以外のものを買える場所がない」と言う声をまちからいただき、まちに売り、まちの不用品を必要品に循環させ、物を介して演繹的に人と人をつないでいく。つまり誰かの所有物であった物を他の誰かにつないでいく場となっていった。おめでたい作業所を開所してからは、メンバー(おめでたい作業所を利用している人)がCaféの店員やぜろの店員を担い始め、さらに「まちの物語」は深まっていったと思う。

Caféでは「いつもの兄ちゃんはどうした?休んでるのか?」「体調悪いんか?」とまちの人が話しかけてくる。ぜろでは「兄ちゃん、ええもんあるか?」「姉ちゃん、まけてくれたん!」「これ、おまけです」という会話が生み出される。値切り交渉などは「1対1」の真剣勝負となる(笑)。一日に何回も通りをバギーで往来している高齢のご婦人は、1時間近くかけて店内の品物をまったりとくまなく探索されるが、メンバーは誰も迷惑そうにしない。「遊んでくれたらいいから」と声をかける。「ここは楽しいわ」「兄ちゃん、息子に電話が通じないんや、(電話が)壊れてるのかな?」など相談されて、「僕はおばあちゃんっ子やから」と身内のような気持で向き合っている。おめでたい作業所では、「不用品下さいって書いてあるけど(いつも入り口にボードが出ている)、なんでもいいの?」とまちの人が聞いてくださる。直接運び込んでくださる。「これ休憩の時に食べて」と差し入れも日常的だ。メンバーは糖尿の人が多いのに、食べ物に不自由しない(笑)。

kokoimaは3つの場(Café、ぜろ、おめでたい)によって、まちの外の人たち、まちの中の多様な人たち・まちの様々な団体とつながらせていただき、香ヶ丘町に存在できていると日々感じる。感謝しかない。最近ではおめでたいが作業所らしくないせいか、まちの人が所内をじっくり見て「これいくら?」と、メンバーの上着を手にもされることも一度や二度ではない。そんな時、困り顔で困惑しているメンバーも、おめでたいの「開く」という趣旨に不満の意見は出ない。そんな日常のなか「(ぜろは)なんでもあるね」という声に触発されて、香ヶ丘のリユース百貨店をめざそうか?!はたまた子供が集まるレジャーランドは?と野望を持ちはじめている私たちである。



街づくり夢基金第15回助成事業
NPO法人kokoima presents
**障害のある人・ない人、
関係のない、みんなまちの人**
「ボーダレス・タウン・プロジェクト」
ドキュメントブック
発行：NPO法人kokoima
〒590-0011 大阪府堺市香ヶ丘町1丁7番8号
072-220-5458
omedetai191@gmail.com
発行日：2018年11月20日
助成：生活協同組合エスコープ大阪



NPO法人kokoima

kokoimaアーカイブ 2015-2017.8.1

堺区香ヶ丘町をまち場と決め、活動を開始する。

—コミュニティcafeここいま開設〜リユースショップゼロ・
障害福祉事業所おめでたい オープンまで(まち場は3面に)—

kokoimaアーカイブ 2017.8.2-2021.4.1

堺区香ヶ丘町のまち場を4面とする。

- ・アトリエ&ギャラリー ふくもち開設(まち場は4面に)
- ・まちの協働活動、浅香山GENKIプロジェクト始動!
- ・コロナ禍でもめげずに、外へ外へと、活動を広げる。

発行日:2021年7月15日

編集協力:松永大地
デザイン:佐藤大介

編集・発行:NPO法人kokoima
大阪府堺市堺区香ヶ丘町1丁7番8号
電話:072-220-5458
<https://kokoima.com>

©kokoima 2017-2020